利ヲ收得スヘキニアラス從テ檢事カ分納ノ慣例ヲ破リ一時ニ完納スヘキヲ命スルモ納附者ハ之ヲ拒ムヲ得ス

（參照）刑法施行後ハ舊刑法又ハ舊刑法施行前ノ法令ノ刑ニ處セラレタル者ト雖モ刑ノ執行、假出獄及ヒ時效ニ付テハ刑法ノ規定ヲ準用ス但罰金又ハ科料ヲ完納スルコト能ハサル者ヲ勞役場ニ留置スル場合ニ於テハ檢事ノ請求ニ依リ裁判所決定ヲ以テ其言渡ヲ爲ス可シ（刑法施行法第十三條第一項）

原　審　長崎控訴院

抗告人　矢野彦兵衛

右親權者　矢野タカ

判決

本件抗告ハ之ヲ棄却ス

理由

按スルニ抑モ刑罰ナルモノハ有責不法ノ行爲ニ對スル一ノ制裁方法ナレハ原則トシテハ之カ受刑資格ヲ犯人ノ一身ニ限ルヘキコトハ洵ニ所論ノ如クナルモ刑事訴訟法第三百二十條第二項ニハ罰金ノ徵收ハ檢事ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可キ旨ノ規定アリ刑法施行法第五十條ニハ右徵收ニ付テハ非訟事件手續法第二百八條ノ規定ヲ準用ストノ規定アリ而シテ右非訟事件手續法第二百八條ニハ過料ノ執行ニ付テノ檢事ノ命令ハ執行力ヲ有スル債務名義ト同一ノ效力ヲ有シ其執行ハ民事訴訟法第六編ノ規定ニ從フ旨ノ記載アリテ其民事訴訟法第五百十九條ニハ判決ニ表示シタル債務者ノ

一般ノ承繼人ニ對シテ亦執行力アル正本ヲ付與スルコトヲ得ヘキ旨ヲ規定シ以テ序上ノ原則ニ一ノ例外ヲ設ケ罰金刑ノ如キ財產刑ニ關シテハ自由刑生命刑等ト異ナリ特ニ一種ノ執行方法ヲ規定シアルカ故ニ本件ノ如キ場合ニ於テハ事案ノ被告本人タリシ當被告先代彦兵衛ノ死沒シタルニ拘ハラス其相續人タル抗告本人彦兵衛ニ對シテ亦之カ執行ヲ爲シ得ヘキモノナルコト明瞭ナレハ之ト同趣旨ニ出テタル原決定ハ相當ナリトス尙ホ又抗告人ハ縱シ假リニ抗告人ニ罰金納入ノ義務アルモノトスルモ曩キニ先代彦兵衛ニ於テ其筋ヨリ分納ノ許可ヲ得タルモノナルヲ以テ之カ殘額全部ニ對シ一時ノ執行ヲ命シタル檢事ノ本命令ハ不當ナル旨主張スルモ罰金ハ一箇ノ財產刑ニシテ裁判ノ確定ヨリ一个月內ニ之カ完納ヲ爲スヘキモノナルコトハ法ニ明文ノ存スル所ナルヲ以テ縱シ當該官廳ニ於テ被告人ノ境遇ニ同情シ若クハ或事情ヲ斟酌シタル結果永年ニ渉リ之カ分納ヲ許可シタルカ如キ便宜ノ取扱ヲ爲シ來リタル事實アリトスルモ幷ハ所謂一ノ行政上臨機ノ處分ヲ爲シタルモノニ外ナラスシテ被告ハ爲メニ分納ノ權利ヲ獲得スヘキモノニ非サレハ之カ從來ノ慣例ヲ主張シテ右檢事ノ命令ヲ拒ムコトヲ得サルモノトス又抗告人ハ本案罰金刑ノ判決ハ新刑法施行前ナル明治三十七年ニ於テ確定セル所ナリ當時ノ刑法ニ於テハ罰金刑ハ一身ニ專屬スルノ主義ヲ採リタルコト疑ナキヲ以テ其後ニ至リ發布セラレタル刑法其他附屬法ニ於テ縱シ其主義ヲ變更シタリトスルモ刑罰法ハ遡及セストノ原則ニ則リ施行前確定セル罰金刑ノ性質ヲ變更スヘキ理由ナキヲ以テ現代彦兵衛ニ於テハ罰金納付ノ義務ヲ負擔スヘキモノニ非サル旨主張スルモ先代彦兵衛ニ於テ舊刑法施行ノ當時死沒セハ格別同人ハ罰金分納ノ許可ヲ得現ニ新刑法實施後其支配ノ下ニ

相續人ニ對スル罰金ノ追徵○罰金ノ分納及ヒ其ノ取消

着着其義務ヲ履行シ來リ明治四十四年八月十一日ニ到リ死沒シタルモノナルカ故ニ刑法施行法第十三條ノ趣旨ニ從ヒ其後ノ履行ニ關シテ亦新法ノ規定ニ準由スヘキヲ相當トスルヲ以テ本論旨亦理由ナシ因テ刑事訴訟法第二百九十七條ニ依リ主文ノ如ク決定ス

◉詐欺未遂事件

明治四十五年(れ)第八〇二號 明治四十四年五月十七日判決（棄却）

判決要旨

一其ノ實債權ナキニ拘ラス之レアルカ如クニ裝ヒ支拂命令ヲ申請シタル所爲ハ財ヲ得ンカ爲メニ裁判所ヲ欺罔シタルモノニシテ詐欺取財罪ノ未遂犯ヲ構成ス

第一審　山口地方裁判所　第二審　廣島控訴院

被告人　釜谷寅造　辯護人　佐藤有恭

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

裁判所カ形式上適法ナル支拂命令ノ申請ヲ受クルトキハ法律ノ規定ニ依リ其申請ノ原因タル債權ハ現ニ存在スルモノナリトノ推定ヲ爲シ支拂命令ヲ發スヘキモノナレハ適式ナル支拂命令ノ申請

ヲ爲スノ事實ハ裁判所ニ對スル一ハ欺罔手段タルコトヲ妨ケサルモノトス而シテ原判決ノ認メタル事實ニ依レハ被告ハ山口區裁判所ニ論旨所揭ノ如キ形式上適法ナル支拂命令ノ申請ヲ爲シ同區裁判所ヲシテ林善太郎ニ對シ支拂命令ヲ發セシメタルモノニシテ裁判所ヲ欺キ金員ヲ騙取スル爲メ其欺罔手段ニ著手シタルモノナルヲ以テ本論旨ハ上告ノ理由ナシ

◉放火未遂窃盜事件

明治四十五年(れ)第六五一號 明治四十五年四月二十九日判決（破毀）

判決要旨

一、放火罪ノ如キ公益ヲ侵害スルヲ以テ本質ト爲ス犯罪ト雖モ苟モ同一意思ノ發動ニヨリテ其ノ行爲ヲ反覆實行スルニ於テハ之レニ連續犯ノ適用ヲ爲スヲ妨ケス

第一審　東京地方裁判所　第二審　東京控訴院

被告人　山本寅之助　辯護人　福岡伯

判決

原判決ハ之ヲ破毀ス。被告寅之助ヲ無期徽役ニ處ス

理由

按スルニ同一ノ意思發動ニ因リテ同一罪名ニ觸ルル同種ノ行爲ヲ反覆實行シタル場合ニ於テハ其裁判所ヲ偶罔シテ支拂命令ヲ得タル者ノ處分○放火罪ノ連續犯

日時場所ノ異同ヲ論セス其侵害法益ノ單一ナルト否トヲ問ハス同シク刑法第五十五條ノ連續犯ヲ構成スヘキコトハ本院最近判例ノ示ス所ナリ而シテ右連續犯ハ唯リ個人的法益ニ對スル犯罪特ニ財産的法益ニ對スル犯罪ニ付キ成立スルモノニ非ス他ノ公共的法益ニ對スル犯罪ニ在テモ其適用ヲ見ルハ疑ヲ容レス故ニ放火罪ノ如キ個人ノ財産的法益ヲ侵害スルニ止ラス主トシテ靜謐ナル公共的法益ノ侵害ヲ以テ其本質ト爲ス犯罪ト雖モ同一ノ意思發動ニ因リテ其行爲ヲ反覆實行スルニ於テハ當然連續犯ヲ構成スヘキモノトス今原判決ヲ按スルニ被告ハ火災ノ騷擾ニ乘シテ竊盜ヲ爲ス目的ヲ以テ人ノ住宅ヲ燒燬セント企圖シ判示第一乃至第四ノ放火未遂ノ行爲ヲ接續シタル時刻ニ在テ接近シタル場所ニ於テ連續實行シタル事實即チ當初ノ意思ヲ繼續シテ同一罪名ニ觸ルル同種ノ行爲ヲ反覆シ因テ一箇ノ公共的靜謐ヲ侵害セント爲シタル事實ヲ判示シタルモノニ外ナラサレハ前掲本院判例ノ趣旨ニ照ラシテ右判示四箇ノ放火未遂ノ行爲ハ一箇ノ連續犯トシテ之ヲ處斷セサルヘカラス然ルニ原判決ニ於テハ之ヲ別箇獨立ノ罪ヲ構成スルモノト判定シ併合罪ヲ以テ論シタルハ所論ノ如ク擬律錯誤ノ違法アルモノニシテ本論旨ハ理由アリ

◎詐欺未遂及誣告事件

明治四十五年(れ)第六二三號
明治四十五年五月二日判決（棄却）

判決要旨

一、甲者カ自己所有ノ土地ヲ或ル事情ノ爲メ一時假裝的ニ乙者

ノ所有名義ニ變更シタルニ乙者カ擅ニ之ヲ自己ノ物トシテ他人ニ賃貸シタル所爲ハ他人ノ土地ヲ不正ニ領得スルノ意思ヲ外部ニ表現シタルモノニシテ横領罪ヲ横成ス

第一審　札幌地方裁判所　第二審　函館控訴院

被告人　澤國庫次　辯護人（花井卓藏　高野金重　波邊澄也）

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

横領罪ニ於ケル横領トハ自己ノ占有スル他人ノ物ニ關シ不正ニ之ヲ領得スル意思ノ實行ヲ謂フモノナレハ原判決ニ認定セル如ク被告カ本件地所ヲ其地番號訂正ノ爲メ岩松ト被告トノ間ニ於テ假裝賣買ニ因リ登記簿上被告ノ所有名義ト爲シ之ヲ占有スルモ其所有權ハ當事者間ニ於テハ依然岩松ニ在ルヲ以テ同人ノ承諾ナク擅ニ被告カ之ヲ横領センコトヲ企テ自己ノモノトシテ他人ニ賃貸シタル以上ハ被告ハ其占有スル該地所ニ關シ不正ニ領得スル意思ヲ右賃貸ノ行爲ニ依リ外部ニ表現セシメタルモノニ外ナラス蓋シ占有スル他人ノ物ヲ自己ノ物トシテ賃貸スルモ之ヲ自己ノ物トシテ質入スルモ其不正ノ領得タル點ニ於テ擇フ所ナシ故ニ刑法第二百五十二條ニ規定セル犯罪ノ成立ヲ妨クルコトナシ依テ本論旨ハ理由ナシ

◉賄賂事件

明治四十五年(れ)第五七一號
明治四十五年五月六日判決（棄却）

判決要旨

一、縣會議員タルノ資格ヲ收得スルハ議員カ當選ノ承諾ヲナシタル時ニアラスシテ當選確定ノ時ニ在ルモノトス從テ縣會議員ニ當選シタル者カ其ノ職務ニ關シ賄賂ヲ收受シタル以上ハ假令其ノ收受ノ時期カ當選ノ承諾ヲ與ヘサル以前ナリシトスルモ收賄罪ヲ構成スルテ妨ケス

一、縣會議員カ其ノ地位ヲ辭スルトキハ辭職ノ意思表示カ當該官府ニ到達シタルトキ又ハ辭職シタリト看做サルヽ事實ノ發現シタルトキヲ以テ當選ノ效力ヲ失フ從テ縣會議員カ已ニ辭意ヲ有スルモ其ノ意思カ相當官府ニ到達セサル以前又ハ辭職シタリト着做スヘキ事實ノ發現セサル以前ニ職務ニ關シ金品ヲ收受シタルトキハ收賄罪ヲ構成ス

一、收賄シタル金錢ヲ直チニ自己ノ金錢ト混淆シ判別不能ニ至ラシメタルトキハ之ヲ費消シタルモノト同シカラサルモ結極右收賄金ハ沒收スルコト能ハサルニ至リタルモノナレハ之レニ對シ刑法第百九十七條第二項ヲ適用シタルハ相當ナリ

第一審　前橋地方裁判所
被告人　長沼宗雄

第二審　東京控訴院
辯護人　〔鹽谷恒太郎〕〔吉岡秀四郎〕〔花井卓藏〕

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

辯護人法學博士花井卓藏上告趣意書第一點府縣制第三十一條ハ「選擧ヲ終リタルトキハ選擧長ハ直ニ當選者ニ當選ノ旨ヲ告知シ同時ニ選擧錄ノ寫ヲ添ヘ當選者ノ住所氏名ヲ府縣知事ニ報告スヘシ（第一項）當選者當選ノ告知ヲ受ケタルトキハ十日以內ニ其當選ヲ承諾スルヤ否ヤヲ府縣知事ニ申立ツヘシ（第二項）前三項ノ申立ヲ其ノ期限內ニ爲ササルトキハ當選ヲ辭シタルモノト看做ス（第五項）」ト規定シ第三十三條ニ「當選者其當選ヲ承諾シタルトキハ府縣知事ハ直ニ當選證書ヲ付與シ其住所氏名ヲ告知スヘシ」ト規定ス是故ニ府縣會議員ニ當選ノ告知ヲ受ケタルモノハ府縣會議員ノ收賄○縣會議員ノ資格ノ發生及ヒ消滅ノ時期○收賄金ノ沒收不能

縣知事ニ對シ十日以内ニ其當選ヲ承諾スル旨ノ申立ヲ爲シ法定ノ期限内ニ當選ヲ承諾スル旨ノ申立ヲ爲サザルトキハ當選ヲ辭シタルモノト看做サルルヲ以テ縣會議員ノ選擧ニ於テ當選者タルコトヲ知リタル事實ハ未タ以テ縣會議員タルノ職ニ就キタルモノト言フコトヲ得ス原判決ハ「明治四十四年九月二十五日縣會議員總選擧施行セラレ其結果ヲ知ルヤ云云無所屬議員タル被告人宗雄ノ向背如何ハ各派勢力ノ消長ニ多大ノ影響ヲ及ホスヨリ云云仲次郎ハ專ラ同人勸誘ノ任ニ當リ云云議長參事會員等ノ下ニ幹部ノ意ノ如ク投票セラレタキ旨懇請シタルニ云云金百圓ヲ被告人宗雄ニ贈與シ同人ハ之ヲ收受シタリ」ト判示スルニ止マルヲ以テ群馬縣會議員總選擧ノ日ト被告人ノ金百圓ヲ收受シタル日トハ僅ニ五日ヲ隔ツルノミニシテ未タ當選ヲ承諾スルヤ否ヤノ申立ヲ爲スヘキ期間内ナルノミナラス被告人ハ當選證書ヲ付與セラレタル事實ヲ明ニセサルカ故ニ被告人ハ群馬縣會議員タル資格ヲ獲得シタル者ナリヤ否ヤヲ知ルニ由ナキモノトス然ルニ公務員其職務ニ關シ賂賄ヲ收受シタルモノトシテ刑法第百九十七條ニ問擬シタル原判決ハ理由不備又ハ擬律錯誤ノ不法アルモノト信スト云フニ在リテ◎原判決ノ判示事實ハ洵ニ論旨ニ揭タル所ノ如シ然レトモ縣會議員ノ資格ハ當選ノ効力ニ依リ取得スルモノニシテ其任期ノ起算點ハ承諾ノ申立ヲ竣テ始マルモノニアラス唯之ヲ辭シ又ハ之ヲ辭シタルモノト看做スヘキ場合ニ當選ハ其効力ヲ解除セラルルニ過キス故ニ縣會議員ニ當選シタル者カ承諾又ハ辭退ノ未定ナル時期ニ於テ縣會議員ノ職務ニ關シ賄賂ヲ收受スルニ於テハ即チ公務員其職務ニ關シ賄賂ヲ收受シタルモノニシテ刑法第百九十七條ノ犯罪ヲ構成スヘキハ勿論ナリ論旨ハ理由ナシ

第三點刑法第百九十七條第二項ニ依レハ收受シタル賄賂ノ價額ヲ追徵スルハ費消讓渡等ニ因リ收受シタル賄賂カ犯人ノ手裡ニ現存セサル場合ニ限ルヘキモノトス原判決ハ「被告人宗雄ハ右收受シタル賄賂ノ一部ヲ費消シ其餘ハ所持ノ金錢ト混同シテ判別不能ニ至ラシメタルモノトス」ト判示シ被告人ノ費消シタルハ賄賂ノ一ニシテ其餘ハ被告人ノ手裡ニ存スル事實ヲ認メナカラ收受シタル賄賂ノ全部ニ對シ追徵ノ言渡ヲ爲シタルハ擬律錯誤ノ不法アルモノト信スト云フニ在レドモ◎被告カ賄賂トシテ收受シタル金錢ヲ自己ノ所持セル金錢ト混同シテ判別不能ニ至ラシメタルハ之ヲ費消シタルモノト同ノカラサルハ勿論ナレトモ判別不能ナルニ於テハ收賄金其物ハ沒收スル能ハサルニ至リタルモノニ外ナラス故ニ原判決ニ於テ追徵ノ言渡ヲ爲シタルハ至當ナリ論旨ハ理由ナシ

◉水利及營業妨害事件

明治四十五年(れ)第六〇九號
明治四十五年五月六日宣告　（棄却）

判決要旨

一、多年河川ノ流水ヲ田地ニ灌漑シ水車ニ利用スル等ノ慣行アルトキハ其使用者ニ流水使用ノ權利ヲ生スルヨトハ古來我邦ノ慣習上認メ來リタル所ナリトス

第一審　宇都宮地方裁判所栃木支部　第二審　東京控訴院

慣行ニ因ル流水使用權ノ取得

被告人　田島宗伯　外一名　　辯護人　關口吾一郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

多年河川ノ流水ヲ田地ニ灌漑シ水車ニ利用スル等ノ慣行アルトキハ其使用者ニ流水使用ノ權利ヲ生スルコトハ古來我邦ノ慣習上認メ來リタル所ニシテ當院ニ於テモ從來屢判例ヲ以テ之ヲ認容セリ今原判決ノ認定シタル事實ニヨレハ月谷川ノ流水ヲ堰止メ土管ニヨリ官有水路ニ引キ入レ之ヲ被告宗悅名義ニテ買受ケタル水田及堀越慶三郎ノ宅地ニ建設シアル水車ニ利用スルコトハ其土地ノ未タ同人等ニ歸屬セサル以前即チ四十餘年ヨリノ慣行ナレハ該流水ノ使用ニ付テハ慣習上其使用者ニ權利ヲ生シタルモノト認ムルヲ相當トス然レハ原審カ右慣行ニ依リ堀越慶三郎ハ該流水ヲ水車ニ使用スルノ權利アリト判定シタルハ正當ニシテ不法ニアラス又水利妨害罪ヲ斷スルニ當リテハ被害者ニ水利ノ使用權アルコトヲ認ムル足ルヘキ事實ヲ示スノ要アルモ何故ニ其權利アルヤヲ說示スルノ要ナケレハ原判決ニ本件ノ水利ハ四十餘年前ヨリノ慣行ニ係ルコトヲ判示シ被害者ニ其使用權アルコトヲ判定スルニ足ルヘキ事實ヲ確定シアル以上ハ慣行ニヨリ被害者ニ其使用權アル所以ノ說示ナキモ不法ニアラス故ニ論旨ハ總テ理由ナシ

●賄賂提供並收賄事件

明治四十五年(れ)第六八五號　明治四十五年五月六日判決　（破毀）

判決要旨

一、公務員カ其ノ上長ノ委任ニヨリ工事ヲ監督中請負人ノ依賴ニヨリ賄賂ヲ得テ監督ヲ寬ニシ疎惡ノ材料ヲ用ユルヲ看過シタル所爲ハ收賄罪ヲ構成スルト同時ニ刑法第二百四十七條ノ背任罪ヲ構成ス

一、司法省工手ナル者ハ公務員ニアラス請負工事ノ監督ヲ命セラレ其ノ任務ヲ執行中前項ノ所爲アリタリトスルモ背任罪ノ一罪ヲ以テ處分スヘク之レニ收賄罪ヲ問擬ス可カラス

一、收賄物ノ沒收及ヒ追徵ハ收賄罪ニ對スル附加刑ナルヲ以テ收賄金ヲ被害者ニ返還スルモ之レカ追徵ヲ免カレ得ヘキモノニアラス

第一審　山形地方裁判所　　●第二審　宮城控訴院

被告人　小林昌德　外二名　　辯護人　（村岡吾一　末繁彌次郎　鈴木八郎）

司法省工手ノ收賄○收賄金追徵ノ性質

判決

原判決中被告粟山助次郎ニ關スル部分ヲ破毀ス。被告助次郎ヲ懲役一年ニ處シ未決勾留ノ日數六十日ヲ本刑ニ算入ス

理由

判旨第一點、按スルニ原判決ニ認メタル事實ニ依レハ被告助次郎ハ司法省工手トシテ鶴岡區裁判所廳舍ノ新築工事監督中同工事請負人タル相被告小林昌德同中村米治ヨリ工事ノ監督ヲ寛ニセラレタキ旨ヲ依賴セラレ其報酬トシテ自轉車一輛現金二百圓菓子一箱ノ贈與ヲ受ケタル結果工事設計書ニ依レハ窓ノ鴨居ハ眞去材ヲ使用スヘキモノナルニ眞持材ヲ使用スルコトヲ許可スル等工事請負人ノ利益ノ爲メ其任務ニ反シテ工事ノ監督ヲ寛ニシ國ニ財產上ノ損害ヲ加ヘタルモノナルヲ以テ司法省工手トシテ公務員ナランカ前示被告助次郎ノ行爲ハ刑法第百九十七條ノ收賄罪ヲ構成スルト同時ニ同法第二百四十七條ノ背任罪ヲモ構成シ同法第五十四條ニ所謂一箇ノ行爲ニシテ數箇ノ罪名ニ觸レタルモノナルモ司法省工手ナル者ハ明治三十六年十月八日司法省營甲第一五四〇號ノ通牒ニ依リ從來工事雇又ハ臨時雇等區區ノ名義ヲ以テ使用セシモノヲ工師及工手ノ名稱ニ改メタルマテニテ其性質一般ノ雇員ト異ルコトナク又現行法令中何等其職務權限ヲ定メタル者ナケレハ刑法第七條ニ所謂官吏公吏若クハ法令ニ依リ公務ニ從事スル職員ナリト云フヲ得ス從テ刑法上之ヲ公務員ト稱スルコトヲ得サレハ司法省工手ニシテ其職務ニ關シ金品ノ贈與ヲ受クルコトアルモ之ヲ收賄罪ニ問擬スルハ失當ナリトス然レハ本件被告助次郎ノ行爲ハ宜シク之ヲ背任罪ニ問

ヒ刑法第二百四十七條ヲ適スヘキモノナルニ原審カ之ヲ收賄罪ニ問ヒ同法第百九十七條ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤ニシテ原判決ハ破毀ヲ免レサレハ本論旨ハ理由アリ

判旨第三點、按スルニ賄賂ノ沒收及追徵ハ共ニ收賄罪ニ對スル附加刑ナルヲ一旦收賄罪ノ成立シタル以上ハ其後ニ至リ賄賂ヲ被害者ニ還スルモ之カ追徵ヲ免カレ得ヘキ者ニアラス然レトモ本件被告助次郎ノ行ノ收賄罪ヲ構成セサルコトハ相辯護人村岡吾一ノ上告趣意書ニ對シ說明スルカ如クナルヲ以テ追徵處分ヲ攻擊スル本論旨モ亦結局其理由アルモノトス

◉詐欺横領事件

明治四十五年(れ)第五六九號　明治四十五年四月二十二日判決　(棄却)

判決要旨

一、債權者ヨリ債務履行ノ請求ヲ受クルニ當リ債權者ヲ恐喝シテ請求ノ實行ヲ躊躇セシメ債務ノ履行ヲ免カレタル所爲ハ假令其ノ免カレタル期間カ一時ニシテ永久ニ債務ノ免脫ヲ得タルニアラストスルモ刑法ニ所謂不法ニ財產上ノ利益ヲ得タルモノニ外ナラス之レニ恐喝取財罪ノ已遂ヲ以テ問擬シタルハ相當ナリ

恐喝ヲ以テ債務ノ履行ヲ延期シタル者ノ處分

第一審　東京地方裁判所　第二審　東京控訴院
被告人　中野不喩等　辯護人　羽田智證　田阪貞雄

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

刑法第二百四十九條第二項ニ所謂財産上ノ利益トハ積極的ナルト消極的ナルト將タ永久的ナルト一時的ナルト其種類及ヒ態樣ノ如何ヲ區別セス財産上ノ利益ヲ汎稱スルモノナルヲ以テ恐喝ニ因リテ得タル財産上ノ利益カ消極的ニシテ而カモ一時的ニ止リ永久的ニ之ヲ保持スル能ハス又積極的ニ利得スル所ナシトスルモ恐喝罪ノ成立ヲ妨クルモノニ非ス原判決ニ依レハ被告ハ家賃ノ支拂ヲ延滯シタルカ爲メニ家主ヨリ其支拂ト借家ノ返還トヲ請求セラルルヤ之ヲ恐喝シテ家主ヲシテ其請求ノ實行ヲ躊躇セシメ因テ被告ハ一時其義務履行ヲ免カレ財産上利益アル狀態ニ措カレタルモノナレハ家主ヲシテ全然債務免除ノ意思ヲ表示セシメテ被告ニ於テ永久ニ債務ノ免脫ヲ得タル場合ニ非スト雖モ刑法ニ所謂不法ニ財産上ノ利益ヲ得タルモノニ外ナラス故ニ原判決カ被告ノ行爲ヲ恐喝罪ノ既遂ヲ以テ論シタルハ相當ニシテ所論ノ如ク違法アルモノニ非ス論旨ハ理由ナシ

◉恐喝取財事件

明治四十五年(れ)第五七八號　明治四十五年四月二十六日宣告　（破毀）

判決要旨

一、強迫ニ因ル意思表示ハ全然意思ノ自由ヲ喪失セサル限リハ單ニ之ヲ取消シ得ヘキニ止マリ當然無效ニ非サルヲ以テ被強迫者カ取消ノ意思表示ヲ爲ササル以上ハ恐喝ニ因テ得タル證書ト雖モ犯人ニ還付シ被害者ニ還附スヘキモノニアラス

第一審　松山地方裁判所　第二審　廣島控訴院
被告人　井上丈平外三名　辯護人　高木益太郎

判決

原判決中被告丈平ニ關スル部分ヲ破毀シ被告丈平ヲ懲役六月ニ處ス

理由

按スルニ贓物ノ還給ハ民法上ノ請求權ヲ基礎トスル原狀回復ノ一方法ニ過キサルヲ以テ直ニ其還給ヲ命スヘキヤ否ヤハ民法上ハ關係如何ニ因リテ定マルモノトス原判決ノ認定事實ニ依レハ所論二通ノ證書ハ被告等カ中島理市ヲ恐喝シタル結果之ヲ交付スルニ至ラシメタルモノナルモ當時同人カ全然意思ノ自由ヲ奪ハレタルニ非サレハ自ラ明カニシテ法律行爲ノ要素ニ錯誤アラサルコト亦明白ナリ然レハ即チ右理市ノ意思表示ハ民法第九十六條ニ所謂迫强ニ因ル意思表示トシテ之ヲ

取消スコトヲ得ヘキニ止マリ當然無效ニ非サルカ故ニ原判決カ同人ノ取消ノ意思表示ヲ埃タスシテ直ニ右證書ヲ同人ニ還付スヘキモノト爲シ其旨ヲ言渡シタル第一審判決ヲ是認シタルハ法律ノ適用ヲ誤マリタルモノニシテ本論旨ハ理由アリ然レトモ右法律適用ノ是正ハ證書ノ差出人タル被告丈平ニ之レヲ還付スヘキ結果ヲ生スルニ止マリ毫モ他ノ被告ニ關係ナキヲ以テ丈平ニ關シテノミ刑事訴訟法第二百八十六條前段第二百八十七條ニ依リ判決ヲ爲スヘキモノトス依テ原判決ノ認定ニ基キ法律ニ照スニ被告丈平ノ所爲ハ刑法第二百四十九條第一項ニ該當スルヲ以テ被告丈平ヲ懲役六月ニ處スヘク領置ニ係ル借用證書（第一號證）契約證書（第二號證）ハ刑事訴訟法第二百二條ニ從ヒ差出人タル被告丈平ニ還付スヘク第一、二審ノ公判裁判費用ハ刑法施行法第六十七條刑事訴訟法第二百一條第一項ニ從ヒ被告丈平ヲシテ主文所掲ノ共同被告人ト連帶負擔セシムヘキモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ被告與一常吉彌市ノ上告ニ付テハ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ主文ノ如ク判決ス

◉瀆職事件　明治四十五年（れ）第五九〇號　明治四十五年四月二十六日判決（棄却）

判決要旨

一、署名トハ本人ノ自署ヲ云フ

一、身分届出書ニハ届出本人ノ署名ヲ要ス從テ戸籍吏カ届書中ノ署名カ本人ノ自署ニ非スト認メタルトキハ之ヲ受理セサルコトヲ得

第一審　宮崎地方裁判所　被告人　小林又次郎

第二審　長崎控訴院　辯護人　高木益太郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

身分ニ關スル届書ニハ届出人ノ署名ヲ要スルコト戸籍法第四十四條ノ規則ニ依リ明白ニシテ所謂署名トハ本人ノ自署ヲ指稱スルコト疑ヲ容レサルヲ以テ戸籍吏カ届出人ノ記名ヲ其自署ニ非スト認メタルトキハ其届書ヲ受理セサルヲ當然トス故ニ原判決ノ認ムル如ク被告カ戸籍吏トシテ本件届書ニ於ケル新名イシノ署名カ自筆ニ非サルコトヲ知リナカラ賄賂ヲ收受シ因テ之ヲ自署ナリトシ受理シタルハ即チ不正ノ處分ヲ爲シタルモノト謂フヘキコト勿論ナレハ本論旨ハ其理由ナシ

◉郵便物竊取事件　明治四十五年（れ）第五九四號　明治四十五年四月二十六日宣告（棄却）

判決要旨

一、郵便集配人ハ其配達中ニ係ル郵便物自體ニ付テハ事實上ノ署名ノ意義○身分届書ニ於ケル本人ノ署名○竊盜罪ノ構成

支配アルヘキモ封入ノ物件ハ依然他人ノ占有ニ屬ス從テ集配人カ之ヲ領得シタル所爲ハ横領罪ニ非スシテ竊盜罪ヲ構成ス

第一審　仙臺地方裁判所　第二審　宮城控訴院

被告人　名取忠八

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

郵便集配人ハ其配達中ニ係ル郵便物自體ニ付テハ事實上ハ支配アリト謂ヒ得ヘキモ封入ノ物件ハ依然他人ノ占有内ニ存シ自己カ自由ニ處分シ得ヘキ狀態ニ在ラサルヲ以テ其物件ヲ奪取シタル所爲ハ横領罪ニ非スシテ竊盜罪ヲ横成スヘキモノトス原院認定ノ事實ニ依レハ被告ハ郵便集配人トシテ本件信書ヲ配達スルニ當リ爲替證書ノ封入シアルヲ察知シ惡意ヲ起シ擅ニ之ヲ開披シテ在中ノ小爲替證書ヲ取出シタルモノナルカ故ニ此事實ニ對シ刑法第二百三十五條ヲ適用シタル原判決ハ相當ニシテ上告論旨ハ理由ナシ因テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ主文ノ如ク判決シタリ

◉有價證券偽造行使詐欺事件　明治四十五年(れ)第六一五號　明治四十五年四月二十五日判決　(破毀)

判決要旨

一、振出人ノ署名ヲ偽造シテ振出タル手形ニ裏書ヲ爲シタルトキハ右偽造ノ部分ハ没收スヘキモ裏書ノ部分ハ没收スヘキモノニアラス

(參照)左ニ記載シタル物ハ之ヲ没收スルコトヲ得(三、犯罪行爲ヨリ生シ又ハ之ニ因リテ得タル物)没收ハ其物犯人以外ノ者ニ屬セサルトキニ限ル(刑法第十九條第一項第三號第二項)

第一審　高知地方裁判所　第二審　大阪控訴院

被告人　中澤寅次郎外一名　辯護人　(横山鑛太郎　重信喜太郎)

判決

原判決ヲ破毀シ

理由

原判決ノ没收處分ハ洵ニ論旨ニ掲クル所ノ如シ依テ按スルニ振出人ノ署名ヲ偽造シ因テ偽造シタル約束手形ニ裏書ヲ爲シ之ニ署名シタル者ハ偽造シタル約束手形ノ文言ニ從ヒ責任ヲ負フヘキヲ以テ裏書ニシテ眞正ナル以上ハ縱令偽造ノ爲メ振出名義人ニハ義務ナシトスルモ裏書人ハ其義務ヲ免カレス因テ該手形ノ所持人ハ裏書人ニ對シ手形上ノ權利ヲ行使スルヲ得ルモノナリ原判決ノ認ムル事實ニ依レハ其没收ヲ言渡シタル約束手形ノ裏書ハ偽造ニアラス故ニ約束手形ノ偽造部分ハ犯罪行爲ヨリ生シタル物ニシテ何人ノ所有ニモ屬セサルヲ以テ刑法第十九條第二項第三號及第

二項ニ依リ沒收スヘキハ勿論ナルモ裏書ノ部分ハ之ヲ沒收スヘキモノニアラス故ニ論旨ハ理由アリ原判決ハ全部破毀ヲ免カレス

◉賍物收受賭博事件

明治四十五年(れ)第三五號　明治四十五年四月八日宣告　(棄却)

判決要旨

一、刑法第二百五十六條第一項ハ賍物タル情ヲ知リ無償ニテ之ヲ收得シタル場合ニ限リ適用シ賍物タル情ヲ知リテ質ニ取リ之ヲ取得シタル行爲ハ同條第二項ニ該當ス

(參照)　贓物ヲ收受シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス」贓物ノ運搬、寄藏、故買又ハ牙保ヲ爲シタル者ハ十年以下ノ懲役及ヒ千圓以下ノ罰金ニ處ス(刑法第二百五十六條)

第一審　東京地方裁判所　　第二審　東京控訴院

被告人　宇加治周治　　辯護人　川島仟司

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

刑法第二百五十六條第一項ノ收受罪ハ賍物タル情ヲ知リ無償ニテ之ヲ收得シタル場合ニ限リ成立スルモノニシテ本件ニ於ケル如ク賍物タル情ヲ知リテ質ニ取リ之ヲ取得シタル行爲ハ同條第二項ノ寄藏罪ニ該當スルモノトス從テ原判決カ同條第二項ヲ適用シ被告ヲ處斷シタルハ相當ニシテ本論旨ハ理由ナシ

◉恐喝事件

明治四十五年(れ)第四三三號　明治四十五年四月十一日判決　(破毀)

判決要旨

一、數人ヲ各別ニ恐喝シ因テ各自ヨリ金員ヲ交附セシメタル所爲ハ連續犯ニシテ刑法第二百四十九條第一項同第五十五條ニヨリ處斷スヘク合併罪トシテ同法第四十七條第十條ヲ適用スヘキモノニアラス

(參照)　連續シタル數箇ノ行爲ニシテ同一ノ罪名ニ觸ルルトキハ一罪トシテ之ヲ處斷ス(刑法第五十五條)

第一審　千葉地方裁判所　　第二審　東京控訴院

被告人　小川喜平　　辯護人　川島仟司

判決

原決判ヲ破毀シ被告喜平ヲ懲役五月ニ處ス

理由

刑法第二百五十六條ノ旨趣●數人ヲ恐喝シ數人ヨリ財物ヲ領得シタル者ノ處分

按スルニ單一ナル意思發動ノ下ニ同一罪名ニ觸ルル行爲ヲ反覆シ因テ同種ノ法益ヲ侵害シタルトキハ縱令其法益ハ數箇ニシテ數多ノ被害者ニ屬スルモ連續犯ヲ構成スヘキコトハ近ク當院刑事聯合部ノ判決ヲ以テ判示シタル所ナリ原審ノ認定シタル事實ニ依レハ被告ハ高橋萬右衞門市原彌平高橋忠太郎及伊原寅之助ノ四名ヲ恐喝シ金員ヲ交付セシメント企テ各別ニ同人等ヲ恐喝シ因テ各自ヨリ金三圓七十五錢宛ヲ交付セシメタルモノナレハ其所爲ハ刑法第二百四十九條第一項第五十五條ニ該當スル連續ノ恐喝罪ナリトス然ルニ原審カ之ヲ併合罪トシ同法第四十七條第十條ヲ適用シテ處斷シタルハ擬律ノ錯誤アル判決ニシテ本論旨ハ其理由アリ故ニ原判決ハ此點ニ於テ破毀ヲ免レサルモノトス

◉私印盜用私書及公正證書僞造行使詐欺取財事件

明治四十五年(れ)第四三四號
明治四十五年四月十二日判決　（破毀）

判決要旨

一、共同被告中證據不十分ニヨリ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者ニ對シ證言ヲ徵スルニ當リ刑事訴訟法第百二十三條同第百二十四條ノ規定ニ違背シタルトキハ其證言ハ當該事件ニ付キ斷罪ノ資料タラサルノミナラス當該事件ニ付キ證人ト共犯關係アリシ被告ニ對シ起レル他事事件ノ爲メニモ亦タ罪證タルヲ得サルモノトス

（參照）左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ」第六、現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ替ヲ訴ヲ受ケ其證憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者（刑事訴訟法第百二十四條第六號）

第一審　山口地方裁判所

被告人　木本重助

第二審　廣島控訴院

辯護人　花井卓藏　渡邊澄也　橫山勝太郎

判決

原判決中有罪ノ部分ヲ破毀シ事件ヲ大阪控訴院ニ移ス

理由

辯護人法學博士花井卓藏辯護人渡邊澄也同橫山勝太郎上告趣意書第一點本案記錄中ノ僞證事件ノ書類ヲ閲スルニ(1)豫審請求書（明治四十四年一月二十七日附）ニハ藤富甚太郎ハ被告人トシテ豫審ヲ求メラレ其起訴事項ニハ「甚太郎ハ其頃ヨリ同年五月初メニ亘リ兩三書面ヲ以テ右演述ニ符合スヘキ樣僞證スヘキ旨ヲ通知シタルニヨリ重助ハ同事件（藤富甚太郎ヨリ西井富藏ニ對スル强制執行異議事件）ノ證人トシテ同年五月十一日谷村區裁判所ニ出頭シ宣誓ヲ爲シタル上這般ノ消息ヲ十分承知シナカラ甚太郎ノ申立通リ虛僞ノ陳述ヲ爲シテ僞證シタルニ」ト記載セラレ(2)豫審終結決定書ニハ「被告甚太郎カ云云被告重助ニ依賴シ同人ヲシテ同年五月十一日谷村區裁判所ニ於テ同事件ニ付キ僞證ヲ爲サシメ云云ノ公訴事實ハ其證憑充分ナラサルニ付云云免訴スヘキ者トス」ト記載セラレ由是觀之藤富甚太郎ハ同人ヨリ西井富藏ニ係ル强制執行異議事件ニ付被告重助ニ依賴シテ僞證ヲ爲サシメタルモノトシテ起訴セラレ豫審ニ於ケル審訊ノ結果被告ハ公判ニ付セラレ甚太郎ハ其證憑十分ナラサルノ理由ニヨリ免訴セラレタルコト明瞭ナリトス而シテ被告ハ該僞證事件ニ付第一審ニ於テ有罪ノ言渡ヲ受ケ原院ニ於テハ該僞證事件並ニ公私文書僞造行使詐欺取財事件ニ關シ審理セラレタルノミナラス公私文書僞造行使ト僞證トハ其事實牽連シテ離ルヘカ

ラサルコト記錄上明白ナルヲ以テ藤富甚太郎ハ現ニ供述ヲ爲スヘキ被告ニ對スル僞證事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證憑十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタルモノナルコト疑ノ餘地存セサル所ナレハ藤富甚太郎ハ刑事訴訟法第百二十四條六號ニ依リ證人タルノ資格ナキモノトス然ルニ原院ニ於テハ同人ニ對シ證人トシテ宣誓セシメタル上訊問ヲ爲シタル不法アルニ拘ハラス其供述ヲ斷罪ノ證據ニ採用シタル原判決ハ採證ノ法則ニ背反スル不法アルモノト信スト云フニ在リ

按スルニ證人カ現ニ供述スヘキ事件ニ付テ訴追セラレ其證憑充分ナラサルカ爲メ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者ナルトキハ宣誓ヲ用ヰテ之ヲ訊問スルコトヲ許ササルハ刑事訴訟法第百二十四條第六號ノ明定スル所ニシテ此規定ニ違背シテ訊問シタル結果ハ右同事件ノ斷罪ノ資料ニ供スルヲ得サルハ勿論其事件ニ付證人ト共犯關係アル被告人ニ對シ起レル他事件ノ證據トシテモ證據資料ト爲スヲ得ス因テ本件訴訟記錄ヲ調査スルニ所論藤富甚太郎ハ同人及ヒ西井富藏間ノ强制執行異議事件ニ付被告重助ト共ニ僞證ノ所爲アリトシテ起訴セラレタルモ豫審ノ末其證憑充分ナラストシテ免訴セラレ被告重助ノミ獨リ右僞證罪ノ決定ヲ受ケ其結果一審ヲ經テ原院ノ審理ニ付セラタル事實ナルコト所論ノ如クニシテ重助ノ本案被告事件カ公私文書僞造行使詐欺取財ト共ニ右僞證事件ヲモ包含セルコトハ極メテ明カナレハ甚太郎ハ前示法條ノ規定ニ從ヒ右重助ノ僞證事件ニ付證人トシテ訊問スルヲ得サルモノニ屬ス然ルニ原院ハ同人ヲ訊問スルニ當リ訊問ノ範圍ヲ制限セス汎ク重助ノ被告事件ニ付證人トシテ訊問スル旨ヲ告ケ宣誓供述セシメタルノミナラス現ニ其訊問カ同人ノ免訴セラレタル僞證事件ニ亘レルコト原院第三回公判始末書ノ記載ニ依リ明瞭ナルヲ以テ原院カ被告重助ノ公私文書僞造行使ノ罪ヲ斷スルニ當リ右違法ノ手續ニヨリ訊問シタル藤富甚太郎ノ供述ヲ採用シタルハ即チ論旨ノ如ク採證ノ法則ニ違背セル不法アルヲ免レスシテ原院カ重助ニ對スル右僞證事件ニ付無罪ノ言渡ヲ爲シタルコトハ毫モ當初ノ訊問手續ヲ適法ナラシムルノ理由ト爲スニ足ラサルモノトス而シテ以上ノ瑕瑾ハ原判決ノ全部ニ亘リ破毀ノ原因ト爲ルヲ以テ他ノ上告論旨ニ付テハ說明ヲ省略シ刑事訴訟法第二百八十六條前段ノ規定ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

◉公文書僞造行使横領等事件

明治四十五年(れ)第六九五號
明治四十五年五月二十三日判決（破毀）

判決要旨

一、村會ノ起債決議ニ基キ村債トシテ金圓ヲ受領スルハ收入役ノ職務ニ屬シ村長ノ職務ニ屬セス從テ村長カ之ヲ受領スルモ職務上之ヲ受領スルモノト云フヲ得ス

一、前項ノ場合ニ於テ村長カ受領シタル村債金ヲ擅ニ之ヲ自己ノ用度ニ使用シタル所爲ハ刑法第二百五十二條ニ據リ處斷スヘク同第二百五十三條ヲ適用スヘキモノニアラス

說明

村長ノ村債受領及受領後之ヲ消費シタル村長ノ處分

村長ノ村債受領及受領後之ヲ消費シタル村長ノ處分ニ於テハ其ノ引渡ノ日ヨリ始メテ村ノ收入ニ歸シタル金圓ヲ收入役ニ引渡スニ唯村長タル一私人ノ個人的受領タルニ過キサルナリ勿論村長カ其ノ自ラ受領之ヲ受領スルニ於テハ之レ則チ職務權限外ノ行爲ニシテ其ノ受領ハ村ノ收入タル不問之レカ受領ハ必ス收入役ノ職務ニ屬シ村長ノ職務ニ屬セス故ニ若シ村長カ村長ノ村金受領ハ村ノ公金ハ稅金タルト一時村債トシテ借入ル村債金タルトヲ

スルモ之ヲ引渡サシテ自ラ之ヲ處分スルニ於テハ則チ村ノ公金ヲ費消シタル

ニアラスシテ個人間ノ私金ヲ消費シタル者ニ外ナラス左レハ其ノ費消行爲ニ對

シテハ宜シク刑法第二百五十二條ヲ以テ處斷スヘク同第二百五十三條ヲ以テ處

斷スヘキニアラサルナリ

更ラニ論歩ヲ轉シ村ノ收入タルヘキ金圓ヲ村長ニ交附スル者ノ方面ヨリ觀察セ

ンニ村税又ハ村ノ借入金ノ如キ苟モ村ノ收入タルヘキ金圓ハ必ス收入役ニ交附

スルヲ要シ村長ニ交附スルモ之レニ依リテ納税又ハ貸附ヲ完了シタリト云フ可

ラス若シ之ヲ受ケタル村長カ收入役ニ之ヲ引渡スニ於テハ收入ノ效ヲ生スルモ

然ラスシテ之ヲ自消スルニ於テハ村收入ノ效ナク納税者ハ更ラニ正式ノ納税ヲ

再ヒ收入役ニ其ノ金圓ヲ交附スルニアラサレハ村ニ對シ返還ヲ請求スルコトヲ

得サルノ結果ヲ生ス近時町村ノ收入金ヲ納附スルニ當リ往々之ヲ町村長ニ交附

シ町村長ハ亦タ己レニ受領ノ權限アルカ如クニ誤解シ以テ町村收入金ノ授受ヲ

ナスモノ少カラス危險モ亦タ甚シト云フヘシ職ニ町村長タル者及ヒ地方住民タ

ルモノ若シ茲ニ注意ヲ怠ル勿クンハ本件ノ如キ失體ヲ防止スルヲ得ンカ

第一審　德島地方裁判所

被告人　小原重郎

第二審　大阪控訴院

辯護人　鈴澤總明

判決

原判決ヲ破毀シ事件ヲ廣島控訴院ニ移ス

理由

辯護人法學博士鵜澤總明上告趣意書第四點原判決ハ其第五第六事實ニ於テ被告カ野村龍三郎及ヒ篠原仁平ヨリ各金二百圓ヲ村債トシテ職務上收受シナカラ之ヲ横領シタル旨判示シ被告ヲ刑法第二百五十三條ニ問擬シタリ然レトモ村ノ會計事務ハ町村制第八十條ニ依レハ全然收入役ノ職務ニ屬シ村長ノ職務トスル所ニアラス今判示ノ事實ヲ按スルニ村債トシテ既ニ成立シタルモノナレハ此金員ノ收受ニ付テハ最早會計事務ニ屬スルモノト謂ハサル可ラス然ラハ前示法條ニ依リ當然村收入役ノ職務ニ屬スルモノナリ果シテ然ラハ原判決カ村長タリシ被告カ村債タル金員ヲ收受スルコトヲ以テ其職務ト爲スニハ之カ理由ヲ詳示セサル可ラサルニ事茲ニ出テス漫然刑法第二百五十三條ニ問擬シタルハ理由不備ノ不法アリト思料スト云フニ在リ

町村收入役ノ權限ニ屬シ町村長ハ町村制上特ニ收入役ノ權限ニ歸セシメタル町村收入ノ受領ニ關スル事項ニ付テハ外部ニ對シテ町村ヲ代表スル權限ヲ有セス是レ明治二十一年法律第一號町村制第六十二條第一項同第七十一條ノ規定ヨリ生スル當然ノ結果ニシテ本院判例ノ屢次説示スル所ナリ原判決ヲ査スルニ被告カ德島縣三好郡足代村村長就職中下記ノ行爲アリタルコトヲ認メ第五事實トシテ被告カ明治四十三年四月二十五日足代村會ノ起債決議ニ基キ同村村債トシテ同年五月一日同村野村龍三郎ヨリ金二百圓ヲ職務上收受シタルニ拘

村長ノ村債受領及受領後之ヲ消費シタル村長ノ處分

ラス之ヲ收入役ニ引渡サス同月中居村ニ於テ擅ニ自己ノ用途ニ費消シタルコト第六事實トシテ被告カ同四十四年五月初旬同村會ノ起債決議ニ基キ同村篠原仁平ヨリ金二百圓ヲ同村債トシテ職務上收入シナカラ之ヲ收入役ニ引渡サス同月中居村ニ於テ擅ニ自己ノ用途ニ費消シタルコトヲ判示セルヲ以テ原判決ハ被告カ足代村長トシテ在職シ前掲町村制ノ施行中村會ノ起債決議ニ基キ村債トシテ金額ヲ收受シタル行爲ヲ村長ノ職務ニ屬スルモノト認メタルニ外ナラス然レトモ村債トシテ金額ヲ受領スルハ村收入ノ受領ニ關スル事項ナルコト勿論ナルヲ以テ即チ村收入役ノ職務ニ屬シ村長ノ職務ニ屬セス故ニ原判決カ該金額受領ニ關スル被告ノ行爲ヲ村長ノ職務ニ屬スルモノト認メタルハ不法ニ事實ヲ確定シタルモノニシテ右事實ノ確定ニ付キ原判決ヲ不法トスル本論旨ハ理由アリ原判決ハ破毀ヲ免レス既ニ此點ニ於テ原判決ヲ破毀スル以上ハ爾餘ノ論旨ニ對シテ說明ヲ爲スノ要ナシ

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ依リ主文ノ如ク判決ス

◉家宅侵入竊盜文書僞造行使等並附帶私訴事件

明治四十五年(れ)第八五三號
明治四十五年五月二十三日判決（棄却）

判決要旨

一、他人ノ印章ヲ竊取スル所爲ト已ニ竊取シタル印章ヲ不正ニ使用スル所爲トハ一ハ他人ノ財産權ヲ侵害シ他ハ公ノ信用

ヲ侵害スル別個ノ行爲ニシテ右二個ノ所爲ハ各獨立シテ別罪ヲ構成ス

一、家宅侵入ノ行爲ハ竊盜ノ要素ニアラス唯其ノ手段タルニ過キサレハ人ノ家宅ニ侵入シテ財物ヲ竊取スルノ所爲ハ盜罪ノ已遂タルト未遂タルトヲ區タス別ニ家宅侵入罪ヲ構成ス

第一審　奈良地方裁判所
公訴私訴上告人　宮川萬次郎
私訴被上告人　中島善太郎

第二審　大阪控訴院
辯護人　（横山磯太郎）（米田實）（松本靜夫）

判決

本件公私訴ノ上告ハ共ニ之ヲ棄却ス。私訴上告費用ハ上告人ノ負擔トス

理由

上告第三點原判決ハ文書ヲ僞造シタリトノ點ニ關シ「同年十一月九日大和國奈良郵便局ニ至リ右通帳ヲ同局ニ提出シテ金二十四圓五十錢ノ拂戻ヲ請求シ同時ニ同所ニ於テ善太郎名義貯金拂戻金受領證ヲ僞造シ其印鑑欄ニ前記竊取シタル印章ヲ押捺シ」ト判示シ以テ中島善太郎ノ署名ヲ僞造

他ノ印章ヲ竊取シテ行使シタル者ノ處分○人ノ家宅ニ侵入シテ竊盜シタル者ノ處分

シ且ツ同人ノ印章ヲ不正ニ使用シタル文書偽造罪ナリトセラレタルモノノ如シ然レトモ右ノ内印章ニ付テハ既ニ前段ニ於テ上告人カ之ヲ竊取シタル事實ヲ認定シ竊盗罪ニ擬セラレアルヲ以テ該印章ハ之ヲ不正ニ使用スルト毀壞又ハ放棄スルト或ハ賣却讓與スルトモ各犯罪ニ因リテ得タル物ノ處分ニシテ其所爲ノ如何ヲ問ハス別ニ罪作スヘキ理アルコトナシ然ルニ原院ハ被告カ竊取後ノ處分タル前示印章ノ押捺ヲ以テ文書偽造ニ於ケル印章不正使用ナル一部ノ犯罪事實ヲ構成スルモノトシ前記ノ如ク判示セラレタルハ違法ニシテ原判決ハ破毀ヲ免レスト云フニ在リ

因テ按スルニ竊取シタル印章ヲ破壞放棄若クハ賣却讓與スルカ如キハ盗賍品ノ處分ニ外ナラスシテ別ニ犯罪ヲ構成セサルコトハ論旨ノ如クナルモ他人ノ印章ヲ竊取スルト其竊取シタル印章ヲ不正ニ使用スルトハ一ハ他人ノ財産權ヲ害シ他ハ公ノ信用ヲ害スル行爲ニシテ全然行爲ノ性質及侵害セラレタル法益ヲ異ニスルヲ以テ各獨立シテ別箇ノ犯罪ヲ構成スルコト論ヲ竢タス政ニ本論旨ハ理由ナシ

第四點原判決ハ上告人ハ中島善太郎方家人ノ不在ニ乘シ其室内ニ忍ヒ入リ金錢竝ニ物品ヲ竊盗シタルモノト認メ住居侵入罪及竊盗罪ノ競合ナリトシ處斷セラレタルモ右ハ誤謬ニシテ單一ノ竊盗罪アルノミト信ス凡ソ住居侵入罪ハ單純ニ人ノ住居ニ侵入スルコト及其故意アルニ依リテ成立シ始メヨリ竊盗ヲ爲スノ目的ヲ以テ住居ニ侵入スルハ即チ竊盗ナル犯罪行爲實行ノ進行中ニ在ルモノニシテ其場合ニ於ケル侵入ハ飽クマテ竊盗ナル犯罪ノ一部ニ屬シ住居侵入罪ニ於ケル侵入トハ全然其觀念ヲ異ニス若シ然ラストセンカ竊盗ノ目的ヲ以テ住居ニ侵入シタル際家人ノ覺醒スル所

トナリ目的ヲ遂ケスシテ犯人カ直ニ立去リタル場合ニ於テハ之ヲ住居侵入罪ナリト爲ササル可ラサルニ至リ竊盗未遂ト住居侵入トノ區別ヲ爲スニ苦マスンハアラス其不當ナルコト贅説ヲ要セス

原判決ハ擬律錯誤ノ失當アリト云フニ在レトモ◎家宅侵入ノ行爲カ盗罪ノ要素ヲ爲スモノナランカ其行爲ハ盗罪中ニ包容セラレ別ニ犯罪ヲ爲ササル可シト雖モ盗罪ヲ犯スニハ必スシモ家宅ニ侵入スルヲ要セス家宅ニ侵入スルハ盗罪遂行ノ手段ニ外ナラサレハ盗罪ノ既遂タルト未遂タルトヲ問ハス別ニ家宅侵入罪ヲ構成スルコト論ヲ竢タス故ニ原院カ本件家宅侵入ノ行爲ト竊盗行爲トヲ牽連ノ一罪ナリト認メタルハ正當ニシテ本論旨モ亦理由ナシ

◉賭博及賭場開張事件

明治四十五年(れ)第八五五號
明治四十五年五月二十三日宣告　（棄却）

判決要旨

一、賭博開張罪ハ利益ヲ得ルノ目的ヲ以テ賭博ヲ爲サシムヘキ場所ヲ開設セルニ因リテ成立ス現ニ賭博者ヲ招集シ又ハ現ニ利益ヲ得タルヤ否ヤハ之ヲ問フノ要ナシ

第一審　德島地方裁判所　　第二審　廣島控訴院
被告人　川島彦一　　辯護人　林　增之丞

判決

賭博開張罪ノ構成要件

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第二點賭博場開張罪ノ成立要件ノ一トシテ賭博ニ充ツヘキ場所ヲ開キ賭博者團ヲ招集シ財物ヲ徴收スルコトヲ計ルコトヲ必要トス然ルニ原判決ニ於テハ單ニ「被告ハ肩書ノ住宅ニ於テ中略大阪堂島米穀取引所ニ於ケル相場ノ昂低ニヨリ先キノ申込値段ト右昂低シタル相場トノ差額ヲ得喪スヘキ方法ノ賭博場ヲ開張シ手數料ヲ徴シ云云」ノ主旨ヲ記載セルノミニシテ如何ナル賭博團ヲ被告カ其肩書住宅ヘ招集シ自ラ興業主トナリ如何ナル人ヨリ手數料ヲトリタルヤニ付テハ更ニ何等ノ判示ヲ爲サス判示理由後段ニ「被告ハ自ラ對手トナリ原審共同被告生島藤吉小山光四郎米津喜太郎大久保忠三郎松岡龜三郎川人頼俊福田甚之丞等ト賭博ヲ爲シタリ云云」ノ主旨カ記載セラレアルモ之ハ被告ト賭博ヲ爲シタル相手方ヲ判示シタルニ止マルモノニシテ從テ被告カ如何ナル賭博者團ヲ招集シ自宅ニ於テ賭事ヲ爲サシメタルヤ明ナラス即チ賭博場開張トナルヘキ被告ニ所爲アリシヤ否ヤヲ明ニセサル原判決ハ素ヨリ理由不備ノ不法ノ判決ニシテ破毀ヲ免カレスト云フニ在レトモ○賭博開張罪ハ利益ヲ得ルノ目的ヲ以テ賭博ヲ爲サシムヘキ場所ヲ開設セルニ因リテ成立スルモノニシテ賭博者ヲ招集シ又ハ現實ニ利益ヲ取得スルコトハ其構成要件ニアラス故ニ同罪ヲ斷スルニ當リテハ此等ノ事實ヲ判示スルノ要ナキモノトス加之原判決ニハ「被告彦一」ハ明治四十三年一月ヨリ同年八月二十二日迄ノ間肩書住宅ニ於テ云云賭博場ヲ開設シ一枚ニ付金二十五錢乃至三十五錢ノ手數料ヲ徴シ且其間自ラ之レカ相手トナリ原審共同被告生島藤吉小山光四

郎米津喜太郎大久保忠三郎松岡龜三郎川人頼俊福田甚之丞等ト一、二回若クハ數回云云賭博ヲ爲シ」ト判示シアリテ被告カ自己ノ開設シタル賭場ニ同人等ヲ招集シ同人等ヨリ手數料ヲ徴收シタルコトヲ推知シ得ヘキヲ以テ論旨ハ理由ナシ

◉砂糖消費税法違犯事件

明治四十五年(れ)第八七四號
明治四十五年五月二十四日判決（破毀）

判決要旨

一、砂糖消費税法ノ規定ハ糖ノ種類ヲ異ニスル毎ニ申告ヲナサシムル旨趣ナルヲ以テ一ノ種類ヲ指定シテ政府ニ申告シタル者カ他ノ種類ヲ製造スルトキハ更ラニ其ノ申告ヲナサヽル可ラス

一、砂糖製造者カ更ラニ糖密ヲ製造スルトキハ之ヲ申告セサル可ラス

一、政府ニ申告セスシテ種類ノ異ナリタル砂糖。糖密ノ二種ヲ製造シタルトキハ二ケノ法益ヲ侵害スルモノニシテ二罪ヲ搆

成ス

一、砂糖消費税法第八條ノ二ニ規定スル砂糖糖密若クハ糖水以外ノ物品ノ製造ヲ兼營スル者トハ其ノ本業タル砂糖糖密糖水ノ製造ニ付キ政府ニ申告シテ製造ニ從事スル者ト然ラサル者トヲ不問凡テ之レニ包含スルモノト解スルヲ穩當トス

（參照）砂糖、糖密又ハ糖水ヲ製造セムトスル者ハ政府ニ申告スヘシ其ノ製造ヲ廢止セムトスルトキ亦同シ（砂糖消費税法第八條）

第一審　東京地方裁判所　第二審　東京控訴院

被告人　堀田愛治

判決

原判決ハ之ヲ破毀ス。政府ニ申告セスシテ砂糖及糖蜜ヲ製造シタル罪ニ付被告ヲ罰金四十圓ニ處ス。右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ被告ヲ二十日間勞役場ニ留置ス。被告カ菓子製造場ニ於テ其製造ニ係ル砂糖及糖蜜ヲ以テ菓子ヲ製造シタル罪ニ付被告ヲ罰金三百五圓六十錢ニ處ス。右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ被告ヲ百五十日間勞役場ニ留置ス。押收ニ係ル伊丹樽一箇アンペラ二枚砂糖二十七斤糖蜜七十六斤ハ之ヲ沒收ス。公訴裁判費用金三圓ハ被告ノ負擔トス

理由

上告趣意書第一點砂糖ト糖蜜トハ全然別箇ノ物質ニシテ砂糖消費税法ハ此二箇ノ法益ヲ規定シ其第三條ニ於テ此二者製造ノ行爲ヲ認ムル以上ハ二箇ノ犯罪ヲ構成スルコト論ヲ俟タス假令砂糖製造ノ一行爲中ニ於テ二箇ノ物質カ製造セラレタリト雖モ二箇ノ法益ノ侵犯ニシテ税法カ各箇ノ犯罪ニ刑罰ヲ併科スルノ規定（同法第十六條）ナルヲ以テ之ヲ一箇ノ所爲トシテ罰シタルハ不當ナリト云フニ在リ

因テ按スルニ砂糖消費税法施行規則第一條ニ「砂糖糖蜜糖水ヲ製造セムトスル者ハ製造場及製造スヘキ種類ヲ定メ云云所轄税務署ニ申告スヘシ」トアリテ政府ニ申告スルニハ製造スヘキモノノ種類ヲ一定スルコトヲ要スルモノナレハ一ノ種類ヲ指定シテ政府ニ申告シタル者カ他ノ種類ヲ製造スルニハ更ニ其申告ヲ爲ササルヘカラサル筋合ナルヲ以テ砂糖消費税法ノ規定ハ各種類毎ニ申告ヲ爲サシムル趣旨ナルヿ毫モ疑ヲ容ルヘカラス故ニ政府ニ申告セスシテ種類ノ異ナリタル砂糖ト糖蜜トヲ製造スルハ即チ二箇ノ法益ヲ侵害スル者ナルヿ多言ヲ要セサルナリ而シテ原判決ノ認メタル事實ニ依レハ被告ハアンペラノ下ニ伊丹樽ヲ備ヘ置キ右アンペラノ上ニ第二種ニ屬スル砂糖色相和蘭標本第十五號未滿ノ砂糖ヲ載セ其上ヨリ水ヲ注キテ之ヲ洗滌シ該洗滌ニ因リ分離セル糖蜜ヲ伊丹樽ニ集メ以テ第三種ニ屬スル砂糖色相和蘭標本第十八號ノ砂糖八百三十七斤及第二種ノ甲ニ屬スル糖蜜二百九十七斤ヲ製造シタルモノニシテ一箇ノ行爲ヲ以テ砂糖ト糖蜜トヲ製造シタルモノナレハ被告ノ行爲ハ政府ニ申告セスシテ砂糖ヲ製造シタル罪名ト政府ニ申告セスシテ糖蜜ヲ製造シタル罪名トニ觸レ刑法第五十四條第一項前段ニ依リ一ノ重キ刑ニ從ヒ處分スヘキモノト

ス然ラハ本件ハ所論ノ如ク砂糖消費税法第十六條刑法施行法第二十二條ニ依リ刑ヲ併科スヘキモノニアラサルモ原院カ被告ノ行爲ニ對シ刑法第五十四條第一項ノ規定ヲ適用スヘキモノニアラスト爲シ即チ單純ナル一罪トシテ處分シタルハ擬律ノ錯誤ニシテ本論旨ハ結局其理由アルニ歸スルヲ以テ原判決ハ此點ニ於テ破毀ヲ免レス

第二點本案ハ被告愛治カ菓子製造業者ニシテ砂糖ヲ製造シタルモノナルコトハ原判決ノ認ムル所ニシテ砂糖消費税法第八條ノ二ニハ製造行爲ト消費行爲トヲ兼ネ營ム事ヲ禁シタルヲ以テ被告ノ行爲ハ同第八條ノ二ニ違犯シ同第十三條但書ニ該當シ同第十二條ニヨリ消費税五倍ノ罰金ニ處セラレタルモノナリ然ルニ原判決ハ製造者ナル文字ヲ申告ヲナシタル製造者ノミニ限ルト說明シ法文カ兩者ヲ區別セサル趣意明瞭ナルニ拘ハラス無罪ヲ言渡シタルハ失當ナリト云フニ在リ

因テ按スルニ砂糖糖蜜又ハ糖水ヲ製造スル者カ同一ノ場所ニ於テ砂糖糖蜜若クハ糖水ヲ原料トスル砂糖糖蜜若クハ糖水以外ノ物品ノ製造業ヲ兼營スルコトハ砂糖消費税法第八條ノ二ノ禁スル所ニシテ同條ニ所謂砂糖糖蜜又ハ糖水ヲ製造スル者トハ政府ニ申告シタルト否トヲ問ハス汎ク其製造ニ從事スル者ヲ指稱スルモノト云ハサルヘカラス何トナレハ同條ニハ汎ク「砂糖糖蜜又ハ糖水ヲ製造スル者云云」トアリテ犯罪ノ主體ヲ政府ニ申告シテ其製造ニ從事スル者ノミ限定シタル文旨ナキノミナラス同條ノ規定ヲ設ケタル立法ノ精神ハ消費税ヲ納付セシテ砂糖糖蜜又ハ糖水ヲ消費スル脫税行爲ヲ防遏スル在ルモノナルニ之ヲ政府ニ申告シテ其製造ニ從事スル者ノミヲ指稱スルモノト解スルトキハ政府ニ申告セスシテ其製造ニ從事スル者ハ假令同條及第十三條ノ二ノ但

書ニ違反シテ砂糖糖蜜若クハ糖水ヲ原料トスル該品以外ノ物品ヲ製造スルコトアルモ消費税ノ五倍ニ相當スル罰金ニ處セラルルコトナク即チ政府ニ申告シテ其製造ニ從事スル者ノ脫税行爲ニ對シテハ消費税ノ五倍ニ相當スル罰金ニ處スルノ制裁アルモ政府ニ申告セスシテ其製造ニ從事スル者ノ脫税行爲ニ對シテハ其制裁ヲ加フルニ由ナク結局前示立法ノ精神ヲ貫クコト能ハサルニ至ルヘキヲ以テナリ故ニ第八條ノ二ニ所謂砂糖糖蜜又ハ糖水ヲ製造スル者トハ前示ノ如ク政府ニ申告シタルト否トヲ問ハス汎ク其製造ニ從事スル者ヲ指稱スルモノト解セサルヘカラサルヲ以テ原判決ニ認メタル如ク被告カ政府ニ申告セスシテ其居宅ノ菓子製造場ニ於テ砂糖及糖蜜ヲ製造シ其製造シタル砂糖及糖蜜ヲ以テ菓子ヲ製造シタルハ即チ同條ノ規定ニ違反シタルモノニシテ同法第十三條ノ二ノ但書ニ該當シ同條第十二條ニ依リ處分スヘキモノナルニ原院カ之ヲ處罰セサリシハ即チ擬律ノ錯誤ニシテ原判決ハ此點ニ於テモ亦破毀ヲ免レサルモノトス

◉物件毀損事件

明治四十五年(れ)第五九七號　明治四十五年五月二十七日判決　（破毀）

判決要旨

一、刑法第二百六十一條ノ毀棄罪ノ被害者ハ毀棄セラレタル物ノ所有者ニ外ナラサレハ犯人ヲ罰スルニ付キ必要ナル告訴權（即チ訴追條件）ヲ有スル者ハ所有者ニ限ルモノトス

物品毀棄罪ノ被害者及ヒ告訴權者

評説

大審院ハ本判決ヲ以テ物品毀棄罪ノ被害者ハ該物件ノ所有者ニ限ルモノトセリ之レ如何ナル觀念ニ基ク乎甚タ了解ニ苦マサルヲ得ス毀棄セラレタル物件ニ付キ假令所有權ヲ有セストスルモ質權若クハ抵當權ノ如キ物權ヲ有スル者ハ何カ故ニ被害者タルコトヲ得サル乎夫レ所有權ハ物ヲ使用處分スル財産權ナリ質抵當ノ兩物權ハ債權ノ擔保ヲ爲ス財産權ナリ其ノ内容及ヒ効力ニ付キ相異ナキニアラスト雖モ吾人ノ資産ヲ組成スル財産權タルニ至テハ則チ一ナリ而メ犯人カ一ヒ其ノ物件ヲ毀棄スルヤ所有者カ所有權ヲ失フト同時ニ質抵當權者ハ擔保權ヲ喪フニアラスヤ然ラハ則チ所有者ノミ此ノ犯罪ノ被害者トナシ質抵當權者ノ如キ等シク財産權ヲ喪失スル者ヲ被害者ニアラストナシ犯人ヲ訴追スルニ付テノ告訴權ヲ之レニ有セシメサルノ理由何處ニアルカ勿論本件ニ付テノミ考フルトキハ或ハ被害者ヲ以テ所有者ニ求ムルコトヲ得ン然レトモ斯ル判決ヲ抽象的ニ掲ケ漫然顧ミサルニ至テハ其ノ識見ノ鈍劣ナル驚クニ堪ヘタリ

（參照）前三條ニ記載シタル以外ノ物ヲ損壞又ハ傷害シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス（刑法第二百六十一條）

第一審　大阪地方裁判所　第二審　大阪控訴院

被告人　尾崎雄辯護人（渡邊澄也　小川平吉　平松市藏）

判決

原判決ハ之ヲ破毀ス

被告雄ヲ罰金百圓ニ處ス但該罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ五十日間勞役場ニ留置ス

理由

辯護人渡邊澄也同小川平吉平松市藏上告趣意書第一點刑法第二百六十四條ニ所謂告訴トハ被害者ノ告訴ヲ指ハスルモノナルコト勿論ナルヲ以テ同法第二百六十一條ノ所爲アリト雖モ被害者ヨリ告訴ヲ提起セサル以上ハ決シテ處罰スル事ヲ得ス原判決ハ「被告雄ハ云云第三回内國製産博覽會陳列ノ爲メ大阪繪畫會ヘ自筆ノ繪畫三點ヲ出品シ」ト判示シ萩尾九皐ノ告訴狀ニモ亦「第三回内國製産博覽會ニ出品セシ左記繪畫ニ對シ云云六回屏風一雙萩尾九皐六回屏風一雙平井直水絹本高田岸馨」ト記載シ博覽會ニ出品ノ事實竝ニ其被害者タル出品人ヲ明カニスルカ故ニ被告カ損壞シタルモノト認定セラレタル屏風及ヒ軸物ノ所有權ハ其筆者タル出品人ニ屬スルコト明白ナルヲ以テ平井直水高田岸馨ノ出品シタル屏風竝ニ軸物ノ所有權ハ同人等ニ存スルモノトス而シテ平井直水高田岸馨ノ兩名ハ告訴ヲ爲シタル事跡ナキヲ以テ萩尾九皐ノ告訴ヲ以テ平井直水高田岸馨兩名ノ出品ニ係ル屏風軸物損壞ノ所爲ニ其効力ヲ及ホスモノトセハ同人等ノ出品セシ前示物件ノ所有權ハ大阪繪畫會若クハ萩尾九皐ニ移轉シタル事實ヲ說明セサルヘカラス然ルニ原院ノ處置茲ニ出テス平井直水高田岸馨ノ兩名ヨリ適法ノ告訴ナキニ拘ハラス同人等ノ出品ニ係ル屏風及軸物ヲ損壞シタル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シタル原判決ハ理由不備若クハ法則ニ違背シテ公訴ヲ受理シタル不

法アルモノト信スト云フニ在リ

因テ按スルニ刑法第二百六十一條ノ毀棄罪ノ被害者ハ毀棄セラレタル物ノ所有者ニ外ナラサレハ告訴權ヲ有スルモノハ其所有者ニ限レルモノトス而シテ同條ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論スヘキモノナルヲ以テ所有者ノ告訴アルニアラサレハ公訴ヲ受理スヘキモノニアラス原判決ノ認定シタル事實ニ依レハ本件被害物件中平井直水ノ雁ヲ畫ケル屏風及高田岸馨ノ美人ヲ畫ケル絹本軸物ノ所有者ハ其作者タル平井直水高田岸馨ナルコト明白ナリ然レトモ記錄ヲ閲スルニ唯大阪繪畫會主任萩尾九皐ノ告訴アルノミニシテ平井直水高田岸馨ヨリ告訴ヲ爲シタル事跡ナケレハ被告カ同人等ノ繪畫ヲ毀損シタル罪ニ關スル檢事ノ公訴ハ訴追條件ヲ缺如シ受理スヘカラサルモノトス然ルニ原審カ之ヲ受理シテ被告ニ有罪ノ判決ヲ爲シタルハ不法ニシテ本論旨ハ其理由アリ原判決ハ此點ニ於テ破毀ヲ免レサルモノトス

◉詐欺及瀆職並詐欺事件

明治四十五年(れ)第六三六號
明治四十五年六月七日判決（棄却。破毀）

判決要旨

一、帶勳有位ノ者ト雖モ已ニ裁許ヲ得タル以上ハ之ヲ審理スルニ付キ常人ト其ノ手續ヲ異ニスルコトナシ

一、證人無資格者ヲ證人トシテ訊問シタル費用ト雖モ之ヲ有罪

トナリシ被告ニ負擔セシムルヲ妨ケス

一、電報賴信紙ノ端末ニ記載スル發信人ノ氏名ハ受信人ニ傳送スル通信文ニアラス唯電信官署ノ事務取扱ノ爲メニスルニ過キサルヲ以テ之ヲ僞造シタル所爲ハ刑法第百六十七條第一項ニ該當スヘク電信僞造罪ヲ搆成スルモノニアラス

一、證人無資格者ヲ證人トシテ訊問シタリトスルモ更ラニ之ヲ改メテ參考人トシテ訊問スルニ於テハ假令其ノ調書ノ記載事項カ證人トシテノ訊問ト同一ナリシトスルモ其ノ調書ハ罪證タルヲ妨ケス

評說

本件ノ被告池田正誠ハ長崎控訴院判事ニシテ帶勳有位ノ顯達ナルニ拘ラス利慾ノ爲メニ神心ヲ奪ハレ言フモ忌マシキ詐欺及ヒ瀆職ノ醜行ヲ敢テシ一時世人ノ耳目ヲ驚カシタル有名ナル長崎疑獄ナリトス今ヤ彼レ刑定マリテ鐵窓ノ下ニ懲膺セラル應報ノ理正ニ然ラサルヘカラスト雖モ人生非業ノ圖ル可ラサル嘆惜ニ

帶勳有位者ニ對スル審問○電報用紙ニナシタル發信人ノ僞署證人無資格者ニ對スル參考人訊問

堪ヘサルナリ然レトモ吾人ハ罪惡ヲ敢テスル一判事ヲ罰スルヲ惜マス唯在職三十有五年勳位幷ニ備ハリテ而モ一般民衆ノ師表タルベキ者カ利慾ノ爲メニ積年ノ勳功ヲ一朝ニ失墜シ延テ我カ司直ノ尊嚴ヲ侵傷スルノ意味ニ於テ吾人ハ萬石ノ涙ヲ以テ之ヲ痛惜セサルヲ得ス

（參照）發信人ハ其ノ居所氏名ヲ賴信紙ノ端末ニ記載スヘシ但シ其ノ記載ナキモノト雖電信局所ニ於テ差支ナシト認ムルトキハ之ヲ受付發送スルコトアルヘシ（電報規則第二十六條）

行使ノ目的ヲ以テ他人ノ印章若クハ署名ヲ僞造シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス（刑法第百六十七條第一項）

（參照）國庫ノ收入金又ハ仕拂金ニ一錢未滿ノ端數アルトキハ之ヲ切捨ツ國稅ノ課稅標準額ニ付テモ亦同シ（明治四十年法律第三十一號第一條）

第一審　長崎地方裁判所　第二審　長崎控訴院

被告人　池田正誠　外二名　辯護人　卜部喜太郎

判決

被告綱吉ノ上告ハ之ヲ棄却ス。原判決中被告正誠及ヒ晋六ニ關スル部分ハ之ヲ破毀ス。被告正誠ヲ懲役八年ニ處シ金五百圓ヲ追徵ス。被告晋六ヲ懲役一年ニ處ス。押收物件ハ差出人ニ還付ズ

公訴裁判費用中金八十九圓二錢ハ被告正誠金十三圓三十七錢五厘ハ被告晋六ノ各負擔トシ金百四十二圓六十錢五厘ハ被告正誠ニ於テ相被告綱吉ト連帶負擔シ金十七圓五十九錢ハ被告正誠ニ於テ第一審ノ相被告佐渡秀孝左渡秀茂左渡秀光ト連帶負擔シ金十三圓三十七錢五厘ハ被告正誠晋六ノ連帶負擔トス

理由

被告正誠上告趣意書ノ要旨第一點原判決ハ憲法ヲ無視シ法律ノ精神ヲ誤解シタル不法ノ裁判ナリ（二）法律格言ニ曰ク法律ハ名譽及順序ヲ保護スト被告ハ奉公三十五年正五位勳四等堂堂タル控訴院判事ナリ蹇蹇匪躬ノ忠誠ヲ挺テ現在奉職中ノモノナリ現行犯ニ非ス又告訴告發ヲ受ケタルコトナシ勿論不臣罪ニ非サル也是ヲ以テ訴追セラレタリトセンカ先以テ刑事訴訟法第六十九條ノ仁慈法ニ從ヒ召喚狀ヲ受クヘキニ之カ法典ノ澤ニ浴セス直ニ囹圄ニ投セラル勳位ヲ輕蔑シ名譽ヲ保護セス實ニ苛酷ノ取扱ナリ又官吏服務規律アリ裁判所構成法アリテ本屬長官及直近監督官アリ以テ夫夫監督權下部下ヲ取締リ官規ヲ振肅シ秩序ヲ保護シ順序ヲ擾亂スルノ憂ナカシム然ルニ何等監督權ヲ以テ一應ノ諭告ヲ爲サス霹靂處分ヲ爲スハ平和常態ヲ攪擾スルニ非スヤ實ニ仁慈ノ法律ニ違背スルモノト信ス（二）保釋ヲ請求スル六度之ヲ許可セス有位帶勳在官者ヲ强盜ト同視シ逃亡湮滅者ト誣ヒ長繫獄苦楚ヲ嘗メシメ之ヲ顧慮セサルハ人權ヲ蹂躪シタル一種ノ拷訊ニシテ殘忍ノ處分ナリト信ス（三）抑モ本件ノ被害者タルモノハ各自由任意ニ己ノ財產ヲ處分シタルモノニシテ孰レモ自ラ被害即被欺罔者ノ觀念ナキモノ也然ルニ之ヲ驅リ立テテ財產權ニ對スル被害アリトシ强テ其位置ニ据付ケ犯罪事實ヲ構造スルハ平地ニ驚波ヲ起シ平和ヲ攪擾スルモノニシテ最治安ヲ保ツヲ主トスル仁慈ノ法律ニ違背シ殘忍ノ取扱タルモノトス（四）凡搜查權ノ發動ハ特種ノ事情ヲ除クノ外先以テ告訴告發等ノ犯罪報告ニ因リ著手スルヲ普通ノ順序トス本件ハ總テ財產權ニ對スル侵害犯罪ナルニ付先被害者ノ告訴ヲ待ツテ穩當トスルノミナラス或ハ四年或ハ三年ノ長キ社會犯

帶勳有位者ニ對スル審問○電報用紙ニナシタル發信人ノ僞署證人無資者ニ對スル參考人訊問

罪視セス無事ニ經過セシ平穩狀態ヲ顧ミス爬羅剔抉的訐直主義ヲ執行シ加之起訴ノ當初ニ檢事正ハ被告ニ對シ自裁ヲ勸告セリ被告ニ對スル感情ノ一端斯ノ如シ其猛烈ナル餘力何邊マテ波及セシヤ實ニ悚然タラサルヲ得ス殘忍苛酷ニ非スシテ何ソヤ(五)凡犯罪ノ證憑十分ナルヤ否ハ固ヨリ事實ノ判斷ナリト雖モ何等ノ確證ニ基カス證憑十分ノ名ヲ藉リ陷擠ノ意復讎ノ念ヲ以テ羅織セシハ苛酷ノ處斷タルヲ免レサルモノトス(六)被告ハ官吏服務規律第一條ニ遵ヒ天皇陛下及天皇陛下ノ政府ニ對シ忠順勤勉ヲ主トシ三十有五年間其職務ニ盡瘁シ其義務ニ違背タルコトナク未タ曾テ嚴信用ヲ失墜シタルコトナシ因テ國家ニ功績ヲ立テ勳勞ヲ顯ハシタルモノト認メラレ其褒賞トシテ位勳ヲ表彰シ國家ハ忠誠ヲ保證スルモノト信ス故ニ此榮譽ハ當ニ保護セラルヘキ特權ヲ有スルモノトス今之ニ對シ犯罪訴追スルニハ最モ顯著明確ナル證據ニ基キ須ラク愼重ノ態度ニ出テサルヘカラス叨ニ讒誣者ノ構陷ヲ妄信シ決シテ嫌疑檢擧スルヲ容ササルハ勿論ナリ然ルニ何等ノ確ナクシテ犯罪取扱ヲ爲セシハ世人ヲシテ啻ニ忠誠者タルコトヲ疑惑セシメ位勳ニ對スル尊敬心ヲ麻痺喪失セシムルノ惡風ヲ馴致セシムルノミナラス實ニ恐ルヘキハ天皇大權ノ一ナル勳章榮典授與權ヲ輕蔑侮辱スルニ相當シ眞ニ是大逆無道ト論セサル可ラス如是ノ不法カ本件ノ基礎ト爲リ其上ニ築造確定セラレタル本案判決ニシテ其經過事跡亦如前述原判決ハ存在ヲ許スヘカラス當ニ破毀セラルヘキ者ト信スト云フニ在レトモ○訴訟記錄ヲ閱スルニ被告ハ召喚狀ヲ待タスシテ任意ニ豫審判事ノ訊問ニ應シ訊問後勾留狀ニ因リ勾留セラレタルモノナレハ豫審判事ノ處分ハ不法ニ非ス其他ハ要スルニ保釋不許可ノ決定ヲ攻擊シ起訴前ニ於ケル長官ノ處置又ハ檢事ノ行動ヲ論難ス

ルニ過キスシテ上告適法ノ理由ト爲スニ足ラス若シ夫レ犯罪ヲ羅織シタルモノト云フニ至テハ其理由ナキコト第二點ノ下ニ說明スル所ニ依リ了解スヘシ

第四點裁判所ノ不法ニ原因シ生シタル費用ハ被告ヲシテ負擔セシムヘカラサルハ固ヨリ當然ナリ本件證人玉井美知穗ハ刑ノ執行猶豫中ノモノニ付證人ノ資格ナキ者ナリ其調書ハ不法無效ノ調書ニ付斷罪ノ資料ニ供シ得ヘカラサルコトヲ被告ノ申立ニ因リ之ヲ覺知シ後日ニ至リ更ニ參考人トシテ形式訊問ヲ爲シタリ右證人トシテノ費用ハ全ク裁判所ノ過誤ニ座ス斯費用ヲ被告ニ課スルハ費用負擔ノ法理ニ反スルモノナリ何故ニ負擔セシメタルヤ其理由ヲ明示セサルハ理由不備ノ裁判ナリト云フニ在レトモ○刑事訴訟法第二百一條第一項ニハ被告人有罪トナリタルトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔スヘキ言渡ヲ爲スヘシトアルノミナレハ證人タル資格ナキ者ヲ證人トシテ訊問シタルトキト雖モ其訟費用ハ之ヲ有罪トナリタル被告人ニ負擔セシムルコトヲ得ルヲ以テ同條ノ規定ヲ適用シテ所論ノ訴訟費用ヲ被告ニ負擔セシメタル原判決ハ理由不備ニアラス論旨ハ理由ナシ

第九點原審ハ大審院ノ法律統一權ヲ輕蔑侮辱シタル不法ノ裁判ヲ爲シタルモノ也明治四十三年一月三十一日宣告(れ)第一九七九號判決ニ曰ク若シ夫レ所論電報規則第二十六條ニ依リ賴信紙ノ端末ニ記載スル發信人ノ氏名ノ如キハ通信文ニ屬スルモノニアラスシテ單ニ電信官署ニ於ケル事務取扱ノ用ニ供スルニ過キサレハ本件ハ刑法第百六十七條ヲ適用スヘキ場合ニ該當セサルコト明ナリト上告人等平生大ニ此判示ヲ尊重シテ每ニ云爲行動毫モ失遺ナキヲ期シ原審第六事件ニ付テモ

帶勳有位者ニ對スル審問○電報用紙ニナシタル發信人ノ僞署證人無資者ニ對スル參考人訊問

亦友誼知友間ノ出來事正ニ此判旨ニ順ヒ聊カ不法ノ心得ナク即チ法律ニ牴觸スル意思活動ナク純然犯意ナク推移シ來リシモノナリ然ルニ原判決ハ是等ノ尊重スヘキ判例アルコトヲ熟知シナガラ故意ニ之ヲ遵守セス專ラ上告人ヲ陷阱スル爲メ强テ上告人ノ罪狀ヲ醜惡ニ表裝スル爲メ犯罪手段ト押付ケ全ク貴院ノ統一權ヲ尊敬セス天下人心ヲシテ適從スル所ニ彷徨セシム是レ當ニ吾皇ノ仁政ニ佛戾スルノミナラス惹テ裁判尊敬ノ念ヲ去ラシメ法律ヲ輕蔑スル惡風習ヲ馴致スルニ至リ誠ニ不容易國家ノ興廢ニ關スル一大事決シテ忽緒ニ付スヘカラサルモノトス故ニ原判決ハ上告人カ貴院ノ判旨ヲ遵守シタル行動ヲ不法ナリトスルモノニ付キ大審院ノ統一權ヲ蔑視シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ◎電報規則第二十六條ニ依リ賴信紙ノ端末ニ記載スル發信人ノ氏名ノ如キハ受信人ニ傳送セラルヘキ通信文ノ一部ヲ構成スルモノニ非スシテ單ニ電信官署ニ於ケル事務取扱ノ用ニ供スルモノニ過キサレハ右發信人ノ氏名ヲ僞署シタルモノハ刑法第百六十七條第一項ニ該當シ所論本院判決ノ趣旨亦此ニ外ナラス左レハ本件第六事實中被告カ電報賴信紙ノ欄外發信人居所氏名欄ニ服部慶太郎ノ氏名ヲ記入シ以テ同人ノ署名ヲ僞造シタル所爲ヲ以テ刑法第百六十七條第一項ニ問擬シタル原判決ハ本院ノ判例ニ適合スル正當ノ裁判ナルヲ以テ論旨ハ理由ナシ

第十點凡國庫ノ出納金ハ厘位切捨テ錢位ニ留ムヿヲ會計法規ノ規定スル所ナリ然ルニ原判決ニ於テ公訴裁判費用ニ厘位ヲ附セシハ如何ナル理由ナルヤ該費用ハ國庫ノ立替ヘタル債權ニ對シ納付辨濟ノ義務ヲ命セシモノトセハ宜シク其法規ニ從ヒ厘位切捨即チ辨濟ノ義務ナキモノト爲ササルヘカラス然ルニ厘位辨濟ヲ命セシハ直接證人等ニ辨濟納付セシムルノ判旨ナルヤ法律上ノ理由

明白トラス即チ厘位切捨法ヲ適用セサル理由ヲ明示セサル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ

因テ按スルニ被告人有罪トナリタルトキ刑事訴訟法第二百一條第一項ニ依リ訴訟費用ノ全部又ハ一部ヲ負擔スヘキ言渡ヲ爲スハ證人鑑定人等ニ給與シタル旅費日當等國庫ノ支拂金ヲ辨償セシムルニ在リテ其辨償金タルヤ國庫ノ收入ニ屬ス然レトモ明治四十年法律第三十一號第一條ニ國庫ノ收入金又ハ仕拂金ニ一錢未滿ノ端數アルトキハ之ヲ切捨ツトアルハ現ニ收納又ハ仕拂ヲ爲ス際適用スヘキ計算法ヲ定ムルモノナルヲ以テ辨償ノ責任ヲ定ムルニ過キサル訴訟費用ノ言渡ヲ爲スニ當リ之ヲ適用スルヲ要セサルナリ左レハ原院カ被告ニ訴訟費用負擔ノ言渡ヲ爲スニ當リ一錢未滿ノ端數ヲ切捨テスシテ右會計法規ヲ適用セサル理由ヲ明示セサルハ當然ニシテ論旨ハ理由ナシ

第六十二點原判決ニ採用セシ玉井美知穗參考調書ハ不法ノ調書ナリ如何トナレハ其調書ニ參考人ハ曩ニ當職ノ取調ニ對シ證人トシテ申立テ居ル事實ハ相違ナキヤ其調書ハ斯樣ノ申立ト爲リ居ルカ事實相違ノ點アレハ云云此時明治四十四年七月二十五日附訊問調書全部ヲ讀聞ケタルニ相違ナキ旨申立テタリトアリ其證人調書ハ同人カ當時刑ノ執行猶豫中ノモノニ付公權停止セラレ證人ノ資格ナキモノニ付該調書ハ無效不法ナリ法律上其存在ヲ認ムヘカラサルモノナレハナリ然ルニ其不法ナル調書ヲ基礎トシテ其上ニ築上ケ不法ヨリ胚胎產出シタル參考調書ナレハ所謂無ヨリ有ヲ生スル理ナク基礎ノ弱キ所ニ於テ其建築物ハ崩ル物在ラサレハ物ノ生スル。コトナシトノ三原則ニ從ヒ不法ノモノタルヤ明ナリ原判決ハ恰モ該調書ヲ證人調書ト誤認シ參考人ヲ證人ト誤認シタル場合ト撰ム所ナシ即實體上證明ノ效力ナキモノヲ以テ形式上證憑トシ列記シタルモノナリ故ニ原

帶勳有位者ニ對スル審問○電報用紙ニナシタル發信人ノ僞署證人無資格者ニ對スル參考人訊問

判決ハ不法無效ノ調書ヲ採用セシ不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ◎證人トシテノ訊問調書ニシテ無效ナルコト論旨ノ如クナリトスルモ更ニ新タニ參考人トシテ訊問シタル調書ハ無效ニアラス假令其内容ニ於テ證人トシテ訊問シタル調書ノ記載事項ニ基キ訊問ヲ爲シタル記事アルニモセヨ其調書ノ效力ニ影響ヲ及ホササルヲ以テ論旨ハ理由ナシ

◎文書僞造變造行使詐欺事件

明治四十五年(れ)第八二二號
明治四十五年五月二十一日宣告（却棄）

判決要旨

一、數多ノ共同被告人アル場合ニ於テ便宜上各被告人ノ審理ヲ分離スルト否トハ裁判所ノ職權ニ屬スルモノナレハ第二回公判ニ於テ最終ノ陳述ヲ爲サシメタル共同被告人ノ一人ヲ第三回公判ニ出廷セシメサリシトテ違法ト云フヲ得ス

第一審　熊本地方裁判所
第二審　長崎控訴院
被告人　木村松次郎外一名
辯護人　井本常治　小島重太郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

辯護人井本常治同小島重太郎上告趣意書第一點原裁判ハ刑事訴訟法ニ違背シタル不法アリ共同被告人ハ互ニ關係ヲ有スルヲ以テ共同被告人中一人ニ付キ辯論未濟ニテ辯論ヲ繼續セシムルトキハ他ノ共同被告人ヲモ出廷セシメサルヘカラス（刑事訴訟法第百八十二條末項）然ルニ本件ニ於テハ第三回ノ公判明治四十五年三月十一日ノ公判ニハ他ノ被告人ヲ出廷セシムルコトナク木村松次郎ノミヲ出廷セシメタルハ不法ナリト思料スト云ヒ」第二點被告人ヲシテ最終ノ供述ヲ爲サシムルニハ共同被告人ノ各辯論ヲ終リタル後ニテ公判ノ最終ニ至リ供述ヲ爲サシムヘキモノナリ然ルニ木村松次郎以外ノ被告人タル上告人守田又五郎ニハ原院第二回ノ公判ニ於テ最終ノ供述ヲ爲サシメ第三回ノ公判ニハ列席セシメサルナリ故ニ本件ニ於ケル辯論終了後ニ於ケル最終ノ供述ヲ爲サシメサリシモノト云ハサルヘカラス故ニ刑事訴訟法ニ違背スル不法アリト思料スト云フニ在レトモ◎數多ノ共同被告人アル場合ニ於テ便宜上各被告人ノ審理ヲ分離スルト否トハ元來裁判所ノ職權ニ屬スルモノト謂フヘク原審公判始末書ニ依レハ被告守田又五郎ニ關スル辯論ハ第二回公判ニ於テ終結シ其際同人ヲシテ最終ノ陳述ヲ爲サシメタルコト明白ニシテ第三回公判ニ未タ辯論ヲ終結セサル被告木村松次郎ノミヲ出廷セシメ被告守田又五郎ヲ列席セシメサリシハ右職權ノ行使ニ外ナラサレハ原院ノ公判手續ハ所論ノ如キ不法アルモノト謂フヲ得ス

◎横領文書變造詐欺横領二事件

明治四十五年(れ)第三二七號
明治四十五年五月二十三日宣告（破毀）

判決要旨

共同被告人ト公判審理ノ分離刑事訴訟法第二百四十一條第二項ノ取調

一、刑事訴訟法第二百四十一條第二項ニ依リ受命判事カ事件ノ取調ヲ爲ス場合ニ於テ事件ノ眞相ヲ分明ナラシムルニ必要ナル限リ又犯人ノ個性ヲ審明スル爲メニハ犯罪構成事實ノ範圍外ニ渉リ事實ノ訊問ヲ爲スヲ妨ケサルノミナラス一ノ犯罪ニ付キ擬律ヲ爲スニ必要ナル範圍内ニ於テノミ事實ノ訊問ヲ限極スルコトモ亦タ之ヲ爲シ得ルモノトス

（參照）被告事件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシムヘシ（刑事訴訟法第二百四十一條第三項）

第一審　神戸地方裁判所　第二審　大阪控訴院

被告人　長澤庄太郎　外三名

辯護人　（磯山鐵太郎　高木金太郎　廣岡宇一郎　岡本一雄）

判決

原判決中被告庄太郎ニ關スル部分ハ之ヲ破毀シ。被告庄太郎ヲ懲役三年ニ處ス。但未決勾留日數百三十八日ヲ本刑ニ算入ス（以下略ス）

理由

上告第三點原判決第一事實ニ對スル豫據理由ニ被告（上告人）ニ對スル受命判事ノ第三回訊問調

書ノ記事ヲ採用シアリ右ノ記事ハ第一審裁判所受命判事カ公訴第一事實ニ付上告人ヲ訊問シ供述ヲ筆錄シタルモノナリ然ルニ公訴第一事實ハ豫審終結決定以來常ニ輕罪事件トシテ遇セラレタルモノニシテ刑事訴訟法第二百四十一條ノ規定ニ依リ重罪事件ナリトノ前提ヲ要件トシ指定セラレ其取調ノ職務ヲ帶ヒタル受命判事ハ其重罪ナリトシタル事件ニ付取調ヲ爲シ得ルニ止マリ裁判所カ重罪事件ナリトセサル公訴第一事實ニ關シテハ之ヲ取調フルノ權限ヲ有セサルヤ明カナリ從テ第一審裁判所受命判事カ第一事實ニ付上告人ヲ訊問シタル前記第三回訊問調書ノ記事ハ專擅的處置ニ基クモノニシテ之ヲ罪證ト爲スコトヲ得サルモノナリト信ス即チ原判決ハ無效ナル調書ノ記事ニ採證セラレタル失當アリト云フニ在レトモ○刑事訴訟法二百四十一條第二項ニ依リ受命判事カ事件ノ取調ヲ爲スニハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得ルカ故ニ事件ノ眞相ヲ分明ナラシムルニ必要ナリトスル限リ犯罪構成事實ノ範圍外ニ渉リテ事實ノ訊問ヲ爲スコトヲ得ヘク又犯人ノ個性ヲ審明スル爲メ犯罪構成事實ノ範圍外ニ於ケル事實ノ訊問ヲ爲スヲ妨ケサルノミナラス一ノ犯罪事實ニ對シ擬律ヲ爲スニ必要ナル範圍内ニ於テ事實關係ヲ訊問スルカ如キハ受命判事ノ當然ノ職務ニ屬ス故ニ公判裁判所ニ於テ交互ニ刑法第四十七條ニ該當スル併合罪ノ關係ヲ有スル數箇ノ犯罪ニ付キ公訴ヲ受理シ辯論中其中幾箇ノ犯罪ヲ重罪ナリトシ刑事訴訟法第二百四十一條第二項ニ依リ受命判事ヲシテ事件ノ取調ヲ爲サシムル場合ニ受命判事カ擬律ノ基本タル事實ヲ分明ナラシメンカ爲メ其重罪タル犯行ニ對スル處罰法條以外ニ尙刑法第四十七條ノ適用ヲ受クヘキ所以ヲ明白ナラシムル方法トシテ之ニ關スル事實關係ヲ訊問スルヲ得ヘキハ固ヨリ疑ヲ容レス記錄

ヲ査スルニ第一審神戸地方裁判所ハ豫審終結決定ニ依リ被告庄太郎ニ對スル第一乃至第六ノ犯罪事實ニ付キ公訴ヲ受理シ其辯論中檢事ノ請求ニ依リ第五第六ノ犯罪事實ヲ重罪ナリトシ受命判事ヲシテ取調ヲ爲サシメタルモノニシテ右第五第六ノ犯罪事實ハ第一ノ犯罪事實及其他ト共ニ刑法第四十七條ニ該當スル併合罪ノ關係ヲ有スルコトハ豫審終結決定ノ事實ノ判示及法律ノ適用ニ徵シ極メテ明白ナルヲ以テ受命判事カ右第一犯罪事實ニ關シ被告庄太郎ヲ訊問シタルハ違法ニアラス從テ原判決カ被告庄太郎ニ對スル受命判事ノ第三回訊問調書ヲ罪證ニ供シタルハ毫モ違法ニアラス論旨ハ理由ナシ

◉傷害脅迫事件

明治四十五年(れ)第六七一號
明治四十五年五月二十三日宣告　(棄却)

判決要旨

一、刑事訴訟法第二百二十六條ハ被告人出頭セサル場合ニ證據調ヲ禁シタル規定ニ非サルヲ以テ被告人カ公判期日ニ出頭セサルモ既ニ決定シタル證人訊問ヲ爲スヲ妨ケス

(參照)呼出ヲ受ケタル被告人又ハ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ其代人公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ檢事ノ請求スル所ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ(刑事訴訟法第二百二十六條第一項)

第一審　根室地方裁判所
被告人　黑澤丑五郎

第二審　函館控訴院
辯護人　澤田薫

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

辯護人澤田薫上告趣意書第一點原判決ハ第一審公判始末書ノ證人川目タキ供述ノ記事ヲ引用シテ罪證ニ供シタリ今記錄ヲ査閲スルニ右證人ノ訊問セラレタルハ第一審第二回ノ公判ニシテ而シテ同公判ニハ被告人竝ニ辯護人共ニ出廷セサリシコト同公判始末書ニ其旨ノ記事アルニ依リテ明カナリ按スルニ被告人出廷セサルトキハ闕席判決ヲ爲シ得ヘキコトハ法律ノ規定スル所ナリト雖モ被告人及辯護人出廷セサルニ拘ハラス裁判所ハ單ニ證人訊問ノ爲メニノミ公判ヲ開廷スルコトヲ得ヘキコトハ刑事訴訟法上其規定ノ存スルヲ見サルナリ左レハ第一審裁判所ニ於ケル第二回公判開廷ノ手續ハ違法ニシテ從テ同法廷ニ於ケル同證人ノ供述ハ證言證據ノ效力ナキモノナルヲ以テ原判決ハ採證ニ違法アリ破毀ヲ免レサルモノナリト云ヒ」第二點闕席ノ審理手續ニ於テハ格別對席ノ審理手續ニ在リテハ口頭辯論主義及直接審理主義ノ原則上公判ノ證人ハ被告人ノ面前ニ於テ之ヲ訊問スルヲ原則トシ唯刑事訴訟法第百九十七條第一項ニ規定スル場合ニ限リ被告人ノ在ラサル場所ニ於テ訊問スルコトヲ得ルモノトス然ルニ本件第一審裁判所ニ於ケル公判手續ハ闕席手續ニ依リテ進行シタルモノニアラサルニ不拘被告人ノ在廷セサル法廷ニ於テ證人川目タキヲ訊問シ被告人ノ缺席ト證人訊問

タル違法アルモノニシテ同證人ノ證言ハ其效力アルコトナク原判決ハ其採證ニ違法アルモノナリト云フニ在レトモ○刑事訴訟法第二百二十六條ハ被告事件ニ付闕席判決ヲ爲スニハ事實ノ陳述及法律ノ適用等ニ付檢事ノ請求スル所ヲ聽クヘシトノ趣旨ニ外ナラスシテ被告人出頭セサル場合ニ證據調ヲ爲スコトヲ禁シタル規定ニ非ス被告人ノ公判期日ニ出頭シタル場合ハ無論出頭セサル場合ト雖モ裁判所ハ既ニ決定シタル證人ノ訊問ヲ告ケラルヘキ謂ハレナキヲ以テ裁判所カ被告人ノ出頭セサル場合ニ證據調ヲ爲スモ違法ニ非ス所揭第一審公判始末書ヲ査スルニ被告ハ第一回公判ニ出廷シ審問ヲ受ケ次回公判期日ノ告知ヲ受ケナカラ該期日ニ出廷セサルニ依リ第一審裁判所ハ前回決定ノ證據調ヲ爲シ第三回公判ニ被告人ト辯護人出廷シタルヲ以テ前回取調ヘタル所揭證人ノ供述ヲ讀聞カセ意見ヲ問ヒタルモノナレハ審理手續上何等違法ノ點ナシ故ニ原院カ其供述ヲ採テ事實認定ノ材料ト爲シタルハ正當ニシテ第一第二論旨共ニ其理由ナシ

●誣告事件 明治四十五年(れ)第四六四號 明治四十五年四月十二日宣告 (第棄)

判決要旨

一、懲戒處分ヲ受ケシムル爲メノ誣告ハ必スシモ訴追權アル本屬長官ニ申告スルヲ要セス監督權アル上官ニ對シテ之ヲ爲スニ於テハ本罪ヲ構成スヘシ

第一審 千葉地方裁判所 第二審 東京控訴院

被誣告人 萩原昇太郎 辯護人 鮫澤總明

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

決件

按スルニ區裁判所書記ノ本屬長官ハ司大臣ナルコト關係法規ニ照シ明カナル所ナルヲ以テ從テ區裁判ノ監督判事ハ區裁判所書記ニ對シテ本屬長官ナリトノ論旨ハ其當ヲ得ス而シテ懲戒處分ヲ受ケシムル爲メノ誣告罪ハ必スシモ訴追權アル本屬長官ニ對シテ之ヲ爲スヲ要セス監督權アル上官ニ對シテ之ヲ爲スヲ以テ足レリトスルヲ以テ苟モ區裁判所書記ヲシテ懲戒處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ虛僞ノ申告ヲ爲スニ於テハ該申告ハ其書記所屬ノ區裁判所ノ監督判事ニ對シテ之ヲ爲シタル場合ハ勿論其區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ長ニ對シテ之ヲ爲シタル場合ニ於テモ亦誣告罪ヲ構成スルモノナルコト疑ヲ容ルヘカラス左レハ原判決ニ於テ被告カ千葉區裁判所八幡出張所主任書記清宮周藏ヲシテ懲戒處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ千葉地方裁判所長ニ對シ虛僞ノ申告ヲ爲シタル本件第二ノ所爲ヲ誣告罪ニ問擬シ仍ホ第一犯罪行爲トノ關係ニ於テ併合罪ノ規定ヲ適用シタルハ相當ニシテ論旨ハ理由ナシ

●國稅徵收法違反事件 明治四十五年(れ)第五二八號 明治四十五年四月十九日宣告 (棄却)

判決要旨

誣告罪ノ成立國稅徵收法第三十二條ノ適用

一、虚僞ノ移轉登記ヲ爲シ以テ土地ノ差押處分ヲ免レントシタル行爲ハ國稅徵收法第三十二條ニ所謂財産ノ藏匿脫漏ニ該當ス

（參照）滯納者又ハ滯納者ノ財産ヲ占有スル者其ノ財産ヲ藏匿脫漏シ又ハ虚僞ノ契約ヲ爲シタルトキハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス（國稅徵收法第三十二條第一項）

第一審　高知地方裁判所　　第二審　大阪控訴院

被告人　安岡卯吉外二名　　辯護人　横山續太郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第三點原判決第三ハ「被告卯吉及原審相被告樋口壽定ハ共謀シ被告卯吉ハ同月二十七日其所有ニ係ル同郡山上村前田字野口四十四番山林一畝歩外五筆ヲ代金百二十圓ニテ壽定ニ賣却スル旨ノ虚僞ノ賣渡證書ヲ作成シ代人吉井榮次ヲシテ壽定ト共ニ赤岡區裁判所ニ出頭セシメ右證書ニ基キ所有權移轉登記申請ヲ爲シ同所登記官吏ヲシテ登記簿ニ其旨ノ不實ノ記載ヲ爲サシメ之ヲ同所ニ備付ケシメテ行使シ以テ壽定ノ所有物ノ如ク裝ヒ之ヲ藏匿シ」ト判示シ即チ右土地ニ對シ虚僞ノ所有權移轉登記ヲ爲シ之ヲ藏匿シタルモノナリトセラル然レトモ所謂藏匿トハ物ノ所在ヲ變更シ其發見ヲ比較的困難ナラシムル所爲ヲ云フ本件不動産ノ所有名義ヲ假裝シタルカ如キハ動産物

ヲ他所ニ轉シテ藏置スルト同一ニ論スルコト能ハスシテ到底其所在ヲ移シ之ヲ晦マスノ途ナク從テ不動産ニ付テハ所謂藏匿アリ得ヘカラスト信ス前掲事實ハ寧ロ國稅徵收法第三十二條第一項ノ虚僞ノ契約ヲ爲シタルトキトアル場合ニ該當ストナスヲ正當ト思料ス然ルニ原院ハ之ヲ以テ財産ノ藏匿ナリトセラレタルハ法律ヲ誤解セル失當アリト云フニ在レトモ○所論被告等ノ所爲ハ即チ不動産所有權ノ所在ヲ晦マシ以テ其差押處分ヲ免レントシタル者ナレハ所論法條ニ所謂財産ノ藏匿脫漏ニ該當スルコト論ヲ竢タサルヲ以テ本論旨ハ理由ナシ

●詐欺幷信用毀損及脅迫事件　明治四十五年(れ)第九九號　明治四十五年四月一日判決　（棄却）

判決要旨

一、文書ハ權利義務ニ關スル事實證明ニ關スルト又公權ニ關スルト私權ニ關スルトヲ不問所有權ノ目的タル有體動産ニシテ刑法上ノ財物中ニ包含ス

一、貴族院議員ノ互選ハ之ヲ他人ニ委任シテ選擧セシムルヲ許ササレハ之ヲ委任シタル委任狀ハ法律上代理權ヲ發生スルコトナシト雖モ少クモ其ノ委任シタル事實ヲ證明スルノ用

委任狀ヲ騙取シタル者ノ處分

ニ供シ得ラルルヲ以テ此ノ委任狀モ亦タ刑法上一ノ財物タルヲ失ハス從テ之ヲ詐取シタル所爲ハ詐欺取財罪ヲ構成ス

第一審　宮崎地方裁判所　第二審　長崎控訴院

被告人　北岡汎愛　外三名　辯護人（林尾越桑三郎　長雄　鵜澤總明）

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

按スルニ刑法ニ所謂財物トハ所有權ノ目的ト爲スヲ得ヘキ有體物ヲ指稱スルコト當院判例ノ夙ニ認ムル所ナリ文書ハ其公權ニ關スルモノナルトニ論ナク又其權利義務ニ關スルモノナルト事實證明ニ關スルモノナルトヲ問ハス所有權ノ目的ト爲リ得ヘキ有體物ナレハ刑法上ノ財物中ニ包含セラルルモノトス原判決ノ認定シタル事實ニ依レハ被告等ハ明治四十四年六月宮崎縣内ニ於テ行ハルヘキ貴族院多額納稅者議員選擧ニ際シ詐欺ノ手段ヲ以テ互選資格者ヨリ貴族院議員ニ選擧スル事ヲ委任スル旨ヲ記載シ被選擧人及被委任者ノ氏名ヲ後日記入シ得ヘキ空所ヲ存スル委任狀ヲ谷仲吉米良重吉及山村長兵衛ヨリ騙取セントシテ遂ケサリシモノニシテ貴族院多額納稅者議員互選規則ニ依レハ互選人ハ他人ニ委任シテ該議員ノ選擧ヲ爲スコトヲ得サルモノナレハ該委任狀ハ法律上代理權限ヲ發生シ能ハサルモノナリト雖モ尚事實證明ノ用ニ供シ得

ラルヘキ文書ニシテ法律上其所有ヲ禁止セラレタルモノニアラサルヲ以テ所有權ノ目的タルニ妨ケナケレハ刑法上ノ財物ニ外ナラス又上叙ノ理由ナルニ依リ本件委任狀カ公權行使ノ委任ヲ目的トスルノ故ヲ以テ之ヲ財物ニアラスト謂フヲ得ス既ニ該委任狀ニシテ財物ナル以上ハ被告等カ之ヲ騙取セントシテ遂ケサリシ所爲ハ刑法第二百四十六條第一項第二百五十條ニ該當スル詐欺未遂罪ヲ構成スルヤ洵ニ明ナレハ原審カ之ヲ該法條ニ問擬シテ處斷シタルハ正當ニシテ不法ニアラス

◉關稅法違犯事件

明治四十五年（れ）第二三六號　明治四十五年四月九日宣告　（棄却）

判決要旨

一、貨物ノ輸入トハ貨物ヲ船舶ヨリ我領土ヘ陸揚スルヲ謂ヒ貨物ヲ積載シタル船舶カ我港内ニ入ルモ未タ陸揚ヲ爲ササルトキハ之ヲ稱シテ貨物ノ輸入アリタルモノト云フヲ得ス

一、新舊兩法比照ノ結果舊法ヲ適用スヘキ場合ニハ附加刑タル沒收又ハ之ニ代ルヘキ追徵ノ處分モ亦舊法ニ從フヘキモノトス

輸入ノ意義○追徵又ハ沒收○稅法犯則者ト追徵○改正關稅法第八十三條ノ意義

一、舊關稅法第八十三條ニ所謂犯則者ヲシテ連帶シテ納附セシムトアルハ各犯則者間ニ連帶關係ヲ有セシムル法意ニ非スシテ各犯則者ヲシテ獨立シテ同條所定ノ價格全部ヲ納付セシムル法意ナリトス

（參照）本法ニ依リ沒收スヘキ貨物ハ犯則當時ノ所有者ノ所有ニ屬スル間ハ之ヲ沒收シ既ニ之ヲ讓渡若ハ消費シタルトキハ其ノ價格ニ相當スル金額ヲ犯則者ヨリ徵收ス（關稅法舊第八十三條）

一、關稅法第八十三條ニ因ル追徵ノ言渡ハ犯則當時ノ貨物所有者ニ對シテノミ爲スヘキモノニ非スシテ其貨物ニ關スル各犯則者ニ對シテ之ヲ爲スヘキ法意ナリトス

（參照）本法ニ依リ沒收スヘキ貨物カ犯則者以外ノ者ニ屬シ又ハ消費其ノ他ノ事由ニ因リ沒收スルコト能ハサルトキハ其價額ヨリ關稅及消費稅ニ相當スル金額ヲ控除シタル金額ヲ犯則者ヨリ追徵ス（改正關稅法第八十三條第一項）

第一審　熊本地方裁判所　第二審　長崎控訴院

被告人　畑壽三外十名

辯護人　丸毛叢通　花井卓藏　高木益太郎　井本常治

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

判旨第三點貨物ノ輸入ハ貨物ヲ船舶ヨリ我國內ニ陸揚スルヲ云ヒ貨物ヲ積載シタル船舶カ我港內ニ入ルモ未タ陸揚ヲ爲ササルトキハ之ヲ以テ貨物ノ輸入アリタル者ト云フヲ得サルヲ以テ三五郎等カ韓國ニ於テ砂糖ヲ購入シ之ヲ八代又ハ松橋等ニ回漕シタル事實ハ未タ以テ關稅ヲ逋脫シタル密輸入ノ行爲ト云フヘカラサルハ勿論原判決ハ被告等カ右砂糖ノ關稅逋脫品タル情ヲ知リテ買受ノ周旋ヲ爲シ若クハ之ヲ買受ケタリト云フニ在ラスシテ既ニ說明スル如ク韓國ヨリ回漕シ來リタル砂糖ナルコトヲ知リツツ之ヲ買受ケ又ハ相被告ヲシテ之ヲ買取ラシメ共ニ密ニ陸揚シテ密輸入ヲ爲シ以テ關稅ノ逋脫ヲ遂ケタル事實若クハ其情ヲ知リテ右陸揚ノ行爲ヲ幇助シタル事實ヲ認定シタルモノナレハ被告等ノ行爲タルヤ關稅逋脫ノ正犯若クハ從犯ニシテ關稅逋脫品ノ故買若クハ牙保ニ非サルヲ以テ關稅法第七十五條ノ二ヲ適用セス同條ノ一ヲ適用シタル原判決ハ正當ナリ

判旨第四點關稅法第八十三條ノ舊規定ニ「之ヲ讓渡若クハ消費シタルトキハ其價格ニ相當スル金額ヲ犯則者ヨリ追徵ス」トアリシヲ改正セラレタル同條ノ現行規定ニハ「沒收スルコト能ハサルトキハ其價格ヨリ關稅及消費稅ニ相當スル金額ヲ控除シタル金額ヲ犯則者ヨリ追徵ス」トアルヲ以テ之ヲ比較スレハ舊規定ニ所謂「其價格ニ相當スル金額」トハ貨物ノ到著價格ニ關稅及消費稅ニ相當スル金額ヲ加算シタル金額ヲ云フコト明ナリ而シテ新舊兩法比照ノ結果舊法ヲ適用スヘキ場合ニハ附加刑タル沒收又ハ之ニ代ルヘキ追徵ノ處分モ亦舊法ニ從フヘキモノナレハ原院カ論旨所揭ノ如ク說明ヲ下シ關稅消費稅ヲ到著價格ニ加算シタル金額ノ追徵ヲ命シタルハ正當ナリ

輸入ノ意義○追徵又ハ沒收○稅法犯則者ノ追徵○改正關稅法第八十三條ノ意義

判旨第五點關稅法第八十三條ハ舊規定ハ數多ノ犯則者アル場合ニハ犯則者ヲシテ連帶シテ納付セシムヘク規定セサルカ故ニ各犯則者間ニ連帶債務者ノ關係ヲ有セシムル法意ニアラスシテ各犯則者ヲシテ各獨立シテ同條所定ノ價格全部ヲ納付セシムル法意ナリトス而シテ若シ犯則者中ノ或者カ其全部若クハ幾部ヲ納付シタル時ハ納付濟ノ部分ニ付テハ更ニ追徵ヲ爲シ得サルハ勿論ナレハ原院カ論旨所揭ノ如ク言渡ヲ爲シタルハ右關稅法第八十三條ノ法意ニ從ヒ上告人タル被告等各自ニ價格全部ノ追徵ヲ命シタル主旨ナリト解釋スルヲ相當トス

判旨第七點關稅法第八十三條ニハ犯則者ヨリ追徵ストアリテ追徵ノ言渡ハ犯則當時ノ貨物ノ所有者ニ對シテノミ爲スヘキモノニ非スシテ其貨物ニ關スル各犯則者ニ對シテ之ヲ爲スヘキ法意ナリトス而シテ被告小市ノ犯則ニ關スル貨物ノ讓渡セラレタル事實ハ第五事實中ニ之ヲ明示シ被告壽三ノ犯則ニ關スル貨物ノ讓渡セラレタル事實ハ第四及第五事實中ニ之ヲ明示シ被告彌平ノ犯則ニ關スル貨物ノ讓渡若クハ消費セラレタル事實ハ第八第九第十及第十一事實中ニ之ヲ明示スルヲ以テ原判決ハ不法アルコトナシ

◉傷害事件 明治四十五年(れ)第三八六號 明治四十五年四月五日宣告 (棄却)

判決要旨

一、犯罪ノ場所ハ犯罪ノ構成要件ニ非サルカ故ニ縱令犯罪ノ場

所ニ關スル證據ノ摘示ニ失當ノ點アリトスルモ犯罪ノ構成要件タル判示事實ノ認定ニ何等ノ影響ナキモノナレハ之ヲ以テ破毀ノ理由ト爲スニ足ラス

第一審　高知地方裁判所　被告人　矢野六次

第二審　大阪控訴院　辯護人　片寄伴之助

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

辯護人片寄之伴助上告趣意書第一點原判決ハ北川作彌ノ司法警察官聽取書ヲ證據トシテ援用シ其說明中同人カ十一月三日古市町駐車場ニテ客待中皆ト一緒ニ天長節ノ祝ニ一杯飲マウト云フコトニナリ同所ニテ飲酒シ犯罪モ同所ニテ起リシ樣陳述セシコトノ記載アリ然ルニ同聽取書ニハ始メ古市町駐車場ニテ祝杯ヲ擧ケヨト話セシモ別ニ獻立セサリシカ晩方ニ至リ矢野六次宅ニテ祝杯ヲ擧ケシ旨ノ記載アリテ判決書ノ摘示ト場所ヲ異ニセリ左レハ原判決ハ北川作彌ノ申立テサル虛無ノ事實ヲ以テ證據資料ニ供シタルモノニシテ不法ノ判決ナリト云ヒ」第二點原判決ニハ前同樣中平石太郎ノ司法警察官ノ聽取書ヲ證據トシ其聽取書中ニ（明治四十四年十一月三日須崎町古市町

ノ私設人力車駐車場ニテ矢野六次北川作彌外數名ト天長節ノ祝宴ヲ飲始メ云云）ト申立テシ樣記載アリ然ルニ同人ノ聽取書ニハ明カニ午後六時頃南古市町矢野六次方ニ酒宴スルコトヲ聞キ私等四人モ祝ニ一杯飲ムコトトナリ矢野方ヘ持チ行キシ旨ノ記載アリテ全ク判決書ノ夫レト相違セリ即チ石太郎ノ申立テサル虛無ノ事實ヲ證據ニ採用シタルモノニシテ違法アリト思料スト云フニ在リ依テ所論ノ各聽取書ヲ閲スルニ何レモ當日會飲セシ場所即チ本件犯罪ノ場所ハ矢野六次宅ナリシ旨ノ供述記載アルヲ以テ之ニ符合セサル原判決ノ證據摘示ハ固ヨリ失當タルヲ免レス然レトモ犯罪ノ場所ハ犯罪ノ構成要件ニ非サルカ故ニ犯罪ノ場所ニ關スル證據ノ摘示ニシテ右ノ如ク失當ハ點アルモ之カ爲メニ本件犯罪ノ構成要件タル判示事實ノ認定ニ何等ノ影響ナキヲ以テ原判決ヲ破毀スヘキ理由ト爲スニ足ラス故ニ論旨ハ何レモ理由ナシ

◉詐欺未遂事件

明治四十四年(れ)第一八八四號
明治四十四年十一月十四日宣告（棄却）

判決要旨

一、勸業銀行ヨリ債權竝ニ割增金ヲ騙取スル目的ヲ以テ除權判決ヲ得タルトキハ之ト同時ニ其所有者ニ對シ刑法第二百四十六條第二項ノ詐欺罪ヲ構成スヘキモノナルヲ以テ該判決

前事發覺シ其目的ヲ遂ケサル場合ニ於テハ詐欺未遂罪ヲ以テ論スヘキモノトス

（參照）人ヲ欺罔シテ財物ヲ騙取シタル者ハ十年以下ノ懲役ニ處ス」前項ノ方法ヲ以テ財産上不法ノ利益ヲ得又ハ他人ナシテ之ヲ得セシメタル者亦同シ（刑法第二百四十六條）

第一審　東京地方裁判所　第二審　東京控訴院

被告人　山口正雄　辯護人　上原鹿造

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

原判決ノ認定セシ事實ニ據レハ被告ハ勸業銀行ヨリ判示ノ債券竝ニ割增金ヲ騙取スル目的ヲ以テ東京區裁判所ニ對シ該債券粉失ニ基ク公示催告ノ申立ヲ爲シ除權判決ノ宣告ヲ得因ヲ以テ右銀行ヨリ判示ノ物件等ヲ騙取セントシテ遂ケサリシモノナリト云フニ在レハ右被告ノ行爲カ詐欺取財未遂罪ヲ構成スヘキコト勿論ナルヲ以テ原審ニ於テ判示ノ如ク被告ヲ有罪ニ處分シタリシハ相當ナリ何トナレハ抑モ粉失證券ニ對スル區裁判所ノ除權判決即チ失效宣言ノ效力ハ其判決アルト同時ニ確定シ其粉失セシモノトシテ公示セラレタル證券ハ全然無效トナリ之レカ現實ノ所有者ハ爾後其所有ニ係ル證券ヲ使用シテ自己ノ權利ヲ主張スルコトヲ得サル結果ヲ來タスモノナルカ故ニ若シ被告ニ於テ豫期ノ如ク除權判決ヲ得タリトセハ其瞬間ニ於テ被告ハ其公示ニ係ル證券ノ所

有者タル資格ヲ享有シ之レカ義務者タル銀行ニ對シ眞正ノ所有者カ有シタル權利ト同一ナル權利ヲ行使シ得ヘキカ故ニ被告ハ右除權判決ヲ得ルト同時ニ其眞正所有者ニ對シ刑法第二百四十六條第二項ノ詐欺罪ヲ構成ス可キ筋合ナルヲ以テ判示ノ如ク被告ニ於テ右判決ヲ得ルニ必要ナル手段即公示催告ノ申立ヲ爲シタル以上該行爲ハ明ニ右犯罪構成事實ノ一部ニ著手シタルモノナルヲ以テ未タ除權判決ヲ得サルニ先タチ事發覺シテ其目的ヲ遂ケサリシ本案被告ノ所爲ハ詐欺未遂罪ヲ以テ論スヘキモノナルコト勿論ナレハナリ而シテ右被告ノ所爲ハ判示ノ如ク公示催告ヲ申立タル紛失債券ノ眞正所有者ニ對スル詐欺未遂罪ナルニ拘ハラス原告ニ於テ本案被告ノ行爲ヲ勸業銀行ニ對スル詐欺未遂罪トシテ處分シタリシハ被害者ニ關スル法律上ノ見解ヲ誤リタルモノナルモ元來詐欺罪ナルモノハ人ヲ欺罔シ財物ヲ騙取シ若クハ不法ニ財產上ノ利益ヲ取得スルニ因リ構成セラルルモノニシテ其被害者ノ甲タルトト乙タルトハ本罪ヲ組成スル上ニ於テ何等關係ヲ有スヘキモノニアラサルカ故ニ前顯ノ瑕瑾ハ未タ以テ原判決ヲ破毀スルノ理由ト爲スニ足ラサルモノトス左レハ本論旨ハ理由ナシ

◉溢水教唆及溢水事件

明治四十四年(れ)第一三四一號
明治四十四年十一月十六日宣告（棄却）

判決要旨

一二人ニ對シ同一ノ堤防破壞ノ行爲ヲ教唆スルモ一箇ノ法益

ヲ侵害スルモノニ非ス

第一審　浦和地方裁判所
被告人　田中佐吉外十名

第二審　東京控訴院
辯護人　花井卓藏

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

原判決ニ認ムル如ク同一ノ堤防破壞ノ行爲ヲ二人ニ對シテ教唆スルモ二箇ノ法益ヲ侵害スルモノハニアラサルカ故ニ原判決ハ所論ノ如キ不法ナシ

◉府縣會議員選擧法違犯事件

明治四十五年(れ)第六九一號
明治四十五年五月九日宣告（棄却）

判決要旨

一、刑事訴訟法第二百二十六條ニ「檢事ノ請求スル所ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ」トアルハ檢事ノ請求ヲ以テ闕席審理手續ノ要件ト爲シ其請求アルニ非サレハ闕席審理ヲ開始スルヲ得ストノ旨趣ニ非ス裁判所カ闕席判決ヲ爲スニハ被告事件ノ二人ニ對スル同一行爲ノ教唆ト法益侵害ノ箇數○刑事訴訟法第二百二十六條ノ法意

陳述其他科刑等ニ付キ檢事ノ請求スル所ヲ聽クコトヲ要ストノ法意ナリト解スヘキモノトス

（參照）呼出ヲ受ケタル被告人又ハ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ其代人公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ檢事ノ請求スル所ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ（刑事訴訟法第二百二十六條第一項）第二百

第一審　仙臺地方裁判所石巻支部　第二審　宮城控訴院

被告人　高橋鐵牛　外一名　辯護人　鈴木俊輔　布施辰治

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

按スルニ刑事訴訟法第二百二十六條ニ「檢事ノ請求スル所ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ」トアルハ檢事ノ請求ヲ以テ闕席審理手續ノ要件ト爲シ其請求アルニ非サレハ闕席審理ヲ開始スルヲ得スト云ハ趣旨ニ非ス裁判所ハ其職權ヲ以テ闕席審理ヲ開始シ得ヘシト雖モ闕席判決ヲ爲スニハ被告事件ノ陳述其他科刑等ニ付キ檢事ノ請求スル所ヲ聽クコトヲ要スルトノ法意ナリト解スルヲ相當トス故ニ第一審ニ於ケル共同被告人今野儀三郎ニ對スル闕席審理カ所論ノ如ク檢事ノ請求ナクシテ行ハレタリトスルモ檢事カ被告事件ヲ陳述シ且ツ事實上及法律上ノ意見ヲ陳ヘ被告ニ對シテ科刑ヲ要求シタル事跡公判始末書ニ徵シテ明確ナルヲ以テ其手續ハ違法ニ非サルノミナラス共同被告ノ一人ニ付キ公判手續上違法アリトスルモ其違法ハ他ノ共同被告人ノ公同手續ニ何等影響ヲ及ホス

ヘキニ非ス故ニ所論ノ如ク第一審ニ於ケル共同被告人今野儀三郎ニ對スル公判手續ニ違法アリトスルモ他ノ共同被告人伊藤清藏ニ對スル公判手續ニ違法ヲ來スコトナケレハ其公判ハ適法ニシテ右伊藤清藏ノ同公判ニ於ケル供述ヲ錄取セル公判始末書ノ記載ヲ援用シタル原判決ハ違法ニ非ス論旨ハ理由ナシ

◉恐喝取財事件

明治四十五年(れ)第四七五號　明治四十五年四月十五日宣告　（棄却）

判決要旨

一、刑法第百五十五條ニ所謂公務所又ハ公務員ノ作ルヘキ文書トハ公務所又ハ公務員カ其名義ヲ以テ其權限内ニ於テ所定ノ形式ニ從ヒ作成スヘキ文書ニシテ其權限カ法令ニ因ルト内規又ハ慣例ニ因ルトハ之ヲ問フコトナク唯タ其職務執行ノ範圍内ニ於テ作成セラルルヲ要スルノミ

（參照）行使ノ目的ヲ以テ公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ公務所又ハ公務員ノ作ル可キ文書若クハ圖畫ヲ僞造シ又ハ僞造シタル公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ公務所又ハ公務員ノ作ル可キ文書若クハ圖畫ヲ僞造シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス（刑法第百五十五條第一項）

第一審　廣島地方裁判所尼道支部　第二審　廣島控訴院

被告人　水越勘十郎　辯護人　横山勝太郎

公務所又ハ公務員ノ作ルヘキ文書ノ意義

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

因テ按スルニ刑法第百五十五條ニ所謂公務所又ハ公務員ノ作ルヘキ文書トハ公務所又ハ公務員カ其名義ヲ以テ其權限内ニ於テ所定ノ形式ニ從ヒ作成スヘキ文書ニシテ其權限カ法令ニ因ルト内規又ハ慣例ニ因ルトハ之ヲ問フコトナク汎ク其職務執行ノ範圍内ニ於テ作成セラルルコトヲ要スルノミ而シテ其僞造文書タルニハ一般ニ人ヲシテ公務所又ハ公務員カ權限内ニ於テ作成シタル文書ナリト信セシムル程度ニ於テ形式外觀ヲ具有スルヲ以テ足ルモノトス原判決ヲ按スルニ被告ハ尾道區裁判所ノ名義ヲ使用シテ被告ニ宛タル貴殿ト中迫藤右衛門ト畑賣買又ハ代價米取引ノ件外事實至急通知相成度旨ノ八月四日附通知書ト題スル文書ヲ僞造シタリト云フニ在リテ右通知書ハ固ヨリ異例ノ文書ニ屬スト雖モ裁判所ハ絶對ニ如上ノ文書ヲ作成スルコトナシトセス蓋シ裁判所ハ繫屬セル民事又ハ刑事ノ訴訟事件若クハ諸般ノ非訟事件ニ關シ利害關係人ニ對シテ直接ニ申告又ハ書類ノ提出等ヲ促スカ爲メニ通知書ヲ作成スルコトハ法令若クハ内規ノ認ムル場合ニ非ストスルモ慣例上職務ノ執行ニ必要ナル範圍ニ於テ適法ノ行爲ナレハナリ故ニ前掲僞造文書ハ區裁判所ノ名義ヲ使用シ當該裁判所ニ繫屬セル或種ノ事件ニ付キ被告ニ申告ヲ促ス書類ノ體裁ヲ有スルヲ以テ裁判所ノ職權内ニ於テ相當ノ形式ヲ以テ作成スル文書ナリト謂ハサルヘカラス然ラハ原判決ニ於テ前示被告ノ行爲ヲ認メテ之ヲ刑法第百五十五條ニ問擬シタルハ正當ニシテ所論ノ如キ理由ノ不備若クハ擬律ノ錯誤アルコトナシ

●騷擾事件

明治四十五年(れ)第九四四號
明治四十五年六月四日判決（棄却）

判決要旨

一、多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲナシタル以上ハ騷擾罪ハ茲ニ成立スルモノニシテ其ノ間必スシモ共同目的ノ存スルコトヲ要セス

説明

騷擾罪ノ成立。騷擾罪ハ多數ノ人衆合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲スニ依テ成立ス左ニ之ヲ分析スヘシ

(一)多數ノ人一場ニ聚合スルコトヲ要ス　幾人ノ人數ヲ以テ多數トナスヤハ豫メ一定ノ標準ヲ示スコト難シ時ト場所トニ依リ且ツ又タ犯罪當時ノ四圍ノ事情ニ依リ判事ノ判斷ニ任スルノ外ナシ

(二)暴行又ハ脅迫ノ所爲アルヲ要ス　刑法上普通暴行トハ人ノ身體ニ對シ不法ニ腕力ヲ使用スルヲ意味スレトモ、茲ニ云フ暴行ハ其ノ意義之レニ止マラス農作物其ノ他ノ物件ヲ破壞スル行爲ノ如キ苟モ敵意ヲ挿ミ腕力ヲ使用シテ不穩ノ擧動ニ出ル凡テノ行爲ヲ包含ス脅迫ト云フトキハ人ノ身體又ハ財産ニ對シ

ニ成産シ内合ヨカ七驚ヲノ
シスヲテ亂ナリ其條擾掠紐
テ他殺別罪キ云ノニ罪成纏
殺ナ傷罪ハニヘ一規トスナ
人シ又ヲ其シハヲ定内ルク
放驚ハ爲ノモ或目スル唯
火擾燒サ暴アハ的ル罪妨或
ノ罪毀ヲモ動ラ多トノ一トケノ
如ハストノスス數スス政ハスス事
キ只ルル雖纏トノルル府似項
暴暴ニモ積雖人ニヲテ
行行於驚中モ命ア頻非
脅又テ擾人犯財ラ履ナ
迫ハハ罪ヲ行産スシルモ
以脅驚ニ殺ノヲン二邦ノ
外迫擾在傷目亡ハ邦ノ
ノノ罪テシ的滅成土ナ
行手ノハ財是シ立ヲリ
爲段外然産ニ或セ僭内
ハヲ此ラヲ存ハスス竊亂
之以ノスス燒セ官反シ罪
レテ點若毀サ驚之三トス
ニ世ニシスルニ驚朝云
但間付本ル場喧擾意フ
合ヲキ罪ノ合闘罪ヲトス
セ驚殺ノ所ヲシハ案キ
サスハ犯爲云テ其亂ハ
レノ放人ハフ官ノスス犯
ハ所火カ内ノ人ノ如
ナ爲等他亂ノ人ノ罪ノ
リ云犯ノノノ云ノ犯ノ
フ罪身内ノ中第ノ本
モヲ驚容ノ程何七ノ罪
ノ搏財ニ場度レ十

第一審 殺人 大阪地方裁判所 赤井吉蔵

第二審 放火 大阪控訴院

本件上告ハ之ヲ棄却ス

判決理由

驚擾罰ノ成立

成別スル見テ刑顧私又驚セヘサ三スノ危
セアル恰勢法リ恨タ擾スキル犯ル意害
スルル者モヲ第ヲヲ本行聚ハモ意ヲニノ
トル場アル本助百暴竊罪爲合本ノア要從來
ノ合ル罪ケ六行スヲヲノ罪ナヲ物シハル
意ニヲヲタ條又カ搏突目ニシヘ
ニ其要組ルノハ爲成發的要然要ニノメキ
アノスル成者規脅メセシハスラ對ンヲ
ラ處ルスス三定迫又シクク祭ルハ シトス場
スカルル附ニノタニルル禮犯驚犯テスス言
故ヲ如ニ和ヨ所或ハ場其意擾意行ルシ
ニ規シハ隨ル爲ル必合ノハ罪ハレ行テ
例定トヨ行トヲ者スニ他必ニ犯サ爲被
ヘシ雖ノシキナハシ於平スス付罪ル害
ハタモ内タハスス公モテ穏シ特成ヤ云者
祭ルル然部ル一ニ益犯モナモニ立明アノ
禮ニラニ者首於事人尚ル多之ノ明カ故精
ノ止スス於ニ魁テ業ニ本事乗ヲ要素ナニ神
爲マ法テ對二ハノ共罪項聚說ニリ此ヲ
メリ文首シ他本爲同ヲニ合明ノ畏
ニ斯ノ魁各人罪メノ搏存ハスス竊亂行
集ル規及刑ヲヲ等目成スス所ルテ爲ニ
合階定ヒ罰指搏各的スルル初ノ何行怖
シ級ハ指ノ揮成自アルモヨ要ハシ爲セ
ノ驚揮程ススス目ルヲ聚リナレ暴メ
ルル組擾者度ルル的ヲ効合之シ犯行被
多織犯卒ヲ者ヲヲ要ケ後ヲト罪ト害
糸ナ人先規及妨異セスス或抱雖ニ異者
カケ中者定ヒケスス ルル持モ付ナヲ
別レニ又スス他ス ト故 動スス唯リシ
ニハ如ハルル人 ニ行右ニ 撹ルル茲ニ敵必テ
如本斯附カニ モ或 ノコニ モ之必テ
斯罪階和故率 多ルル 爲トヨ注ヲ スス强テ
階ヲ級隨ニ先 乗者 メヲヲ意要 ニ犯人
級搏ノ行一シ 相ハ ニ要スセ 對人

被告上告趣意書第一點總テ騷擾罪ニハ共同ノ目的ヲ以テ多數人カ同時ニ同一ノ場所ニ聚合シ暴行又ハ脅迫ヲ爲スヲ以テ成立スルモノナルハ一般ニ異論ナキ所ナリ從テ騷擾罪ニハ共同目的ノ存在ヲ必要トス然ルニ今原判決理由ノ部ヲ見ルニ「中略部略總代湊角太郎カ村社ノ合祀其他ニ關シ部落民一同ヲ同部落西光寺ニ招集シタル席上ニ於テ左ノ紛擾中小鮎漁獲權歩一税等話題ニ上リ是レ畢竟同年二月迄村長ノ職ニ在リタル玉田良雄ノ處置其宜シキヲ得サルカ爲メニシテ寧ロ同人ニ迫リ之カ解釋ヲ促スヘシト主張スルモノアリテ之カ動機トナリ被告ハ勿論北組ニ屬スル部落民一同其他小鮎……數百名ノモノ大擧シテ云云」ト記載セリ從テ原判決ニ依リテ之ヲ見ルニ被告及其他ノモノカ集合シタル原因ハ總代湊角太郎ノ招集ニ基ケル者ニシテ被告等部落民ノ自發的目的ノ爲メニアラサルヲ認メタルヤ明カナリ而シテ被告其他ノ部落民ノ玉田良雄方ニ押寄セタルハ畢竟該席上ニ於ケル歩一税等ニ關スル話題其動機ヲ爲シタルハ原判決ニ依リ明カナリト雖モ之唯多衆押寄ノ動機ヲ作リタリト云フニ過キスシテ被告其他ノ押寄行爲ハ同一目的ノ爲メニ出テタルモノナルコトヲ説明シタルモノト云フヲ得ス被告等ノ押寄行爲ハ素ヨリ小鮎漁獲權等ノ問題ニ出テタルコトハ判決ヲ離レテ事件全體ヨリ綜合シテ之ヲ想像シ得可シト雖モ之唯其目的ヲ推測シタルニ過キス然ラハ原判決ハ即チ擾擾罪ニ必要ナル共同目的ノ存在ヲ指摘セサル違法アルモノニシテ要スルニ原判決ハ理由不備ノ違法アリト云ハサルヘカラスト云フニ在レトモ○苟モ多衆聚合シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタルトキハ刑法第百六條ノ騷擾罪ハ成立スルモノニシテ共同目的ノ有無ハ該犯罪ノ成立ニ何等ノ影響アルモノニアラス故ニ原判決ニ多衆聚合シテ暴行ヲ爲シタル事實ヲ明示アル

以上ハ共同目的ノ有無ニ付キ何等ノ判示ナキモ理由不備ノ違法アリト云フヲ得サルヲ以テ本論旨ハ上告ノ理由ナシ

◉殺人强盜事件（棄却）

明治四十五年（れ）第一〇〇〇號
明治四十五年六月十一日宣告

判決要旨

一、證據調ヲ爲スヘキ受命判事ノ員數ハ法律ノ限定スル所ニ非サルヲ以テ裁判所ハ便宜ニ從ヒ數名ノ受命判事ヲ任スルコトヲ得ルモノトス

一、數名ノ受命判事アル場合ニ於テ其受命判事カ共同シテ其任務ヲ行フヘキヤ又ハ各分擔シテ其任務ヲ行フヘキヤハ取調事項ノ性質及ヒ時ノ宜シキニ從ヒテ定ムヘキモノトス

一、受命判事カ臨檢ニ際シ必要ナル證人ヲ訊問スルカ如キハ自ラ其證據調ノ決定中ニ包含スル事項ナルヲ以テ之ヲ爲スモ違法ニ非ス

（數名ノ受命判事ノ任命及其任務執行○臨檢地ニ於ケル必要ナル證人訊問）

第一審　松山地方裁判所　　第二審　廣島控訴院

被告人　森貞淺吉外一名　　辯護人　今村力三郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

被告兩名辯護人今村力三郎上告趣意書第一點本件第一審第五回公判ニ於テ職權ヲ以テ犯罪ノ場所ニ臨檢スヘキ決定ヲ爲シ受命判事トシテ西原久保兩判事ヲ指命セリ法律ハ明文ヲ以テ受命判事ノ員數ヲ制限セサルモ數人ノ判事カ一團ト爲リテ裁判事務ニ從事スルハ必ス法律ニ依リテ組織セラレタル單一ナル機關ト爲リタル場合ナラサルヘカラス同一ノ事項ニ關シ二人ノ受命判事ヲ命スルモ此二人ハ法律ニ依リ組織セラレタル機關ニアラサルヲ以テ單一ナル意思ヲ發表スル能ハス結局二人各自ノ行動ニ出テ國家裁判權ノ行使ヲ二途ニ出テシムルノ結果ヲ生ス故ニ同一事項ニ付二人ノ受命判事ヲ命シタルハ違法ナリト云ヒ」第二點前項所論ノ受命判事西原判事ハ八幡濱警察署ニ於テ證人天德粂藏吉平善吉ノ兩人ヲ訊問セリ然レトモ此二人ノ證人ハ裁判所ニ於テ決定シタルモノニアラサルヲ以テ受命判事ノ權限外ノ行爲ナリト云ヒ」第三點同一事項ニ關シ二人ノ受命判事ヲ命スルノ不法ナルコトハ第一點所論ノ如シ然レトモ假リニ二人ノ受命判事ヲ命スルヲ以テ適法ナリトセハ此二人カ常ニ共同シテ事ニ當ラサルヘカラス果シテ然ラハ八幡濱警察署ニ於テ西原判事カ單獨ニ證人訊問ヲ爲シタルハ不法ナリ以上ノ如ク第一審裁判所ハ重要ナル訴訟手續ニ違背セ

ル不法アルモノナルニ原院カ控訴ヲ棄却シタルハ不當ナリト云フニ在レトモ○證據取調ヲ爲スヘキ受命判事ノ員數ハ法律ノ限定スル所ニアラサルヲ以テ裁判所ハ便宜ニ從ヒ數名ノ受命判事ヲ任スルコトヲ得ヘク而シテ其受命判事カ共同シテ其任務ヲ行フヘキヤ又ハ各分擔シテ單獨ニテ之ヲ行フヘキヤハ是亦取調事項ノ性質及ヒ時ノ宜シキニ從ヒテ定ムヘキモノトス又受命判事カ臨檢ニ際シ必要ナル證人ヲ訊問スルカ如キハ自ラ其證據調ノ決定中ニ包含スル事項ニシテ其訊問ノ違法ニアラサルコトハ本院判例ノ屢々說明シタル所ナルヲ以テ第一審裁判所ノ訴訟手續ハ違法ト云フヲ得ス本論旨ハ何レモ其ノ理由ナシ

●詐欺幷附帶私訴事件

明治四十五年(れ)第九一七號　明治四十五年六月十七日判決　(被毀)

判決要旨

一、刑法第二百四十七條ニ所謂第三者トハ他人ノ事務ヲ處理スル者トヲ除キ其ノ以外ノ者ヲ總稱ス

一、隔地者間ニ米穀ノ賣買ヲナシタルトキハ目的タル米穀ノ分量及ヒ品質ヲ持定シ之ヲ運送取扱人ニ交附シタル時所有權ハ已ニ買主ニ移轉スルモノニシテ賣主又ハ貨物引換證ノ所

刑法第二百四十七條ノ適用○横領罪ノ成立

持人ハ唯該米穀ノ上ニ引渡差止權又ハ擔保權ヲ有スルニ過キス從テ運送人カ貨物引換證ヲ受取ラスシテ之ヲ買主ニ引渡シ賣渡人又ハ貨物引換證ノ所持人ヲシテ引渡差止權又ハ擔保權ヲ喪失セシメタリトスルモ之ニ對シ横領罪ヲ構成スヘキモノニアラス

一、横領罪ニハ常ニ背任罪ヲ包容スルヲ以テ一ノ行爲ニ對シ横領罪ト背任罪トカ互ニ兩立スヘキモノニアラス從テ一ノ行爲ヲ横領罪及ヒ背任罪ノ罪者ニ觸ルヽモノト認メタル裁判ハ破毀ヲ免カレス

一、被害者タル會社ノ社員カ犯人ト親族ナレハトテ之レニ刑法第二百四十四條同第二百五十一條ヲ適用シ其ノ刑ヲ免除スヘキニアラス

（參照）他人ノ爲メ其事務ヲ處理スル者自己若クハ第三者ノ利益ヲ圖リ又ハ本人ニ損害ヲ加フル目的ヲ以テ其任務ニ背キタル行爲ヲ爲シ本人ニ財産上ノ損害ヲ加ヘタルトキハ五年以下ノ懲役又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス（刑法第二百四十七條）

（參照）直系血族、配偶者及ヒ同居ノ親族又ハ家族ノ間ニ於テ第二百三十五條ノ罪及ヒ其未遂罪ヲ犯シタル者ハ其刑ヲ免除シ其他ノ親族又ハ家族ニ係ルトキハ告訴ヲ俟テ其罪ヲ論ス（刑法第二百四十四條第一項）

本章ノ罪ニハ第二百四十二條、第二百四十四條及ヒ第二百四十五條ノ規定ヲ準用ス（刑法第二百五十一條）

第一審　大阪地方裁判所　第二審　大阪控訴院

公訴私訴上告人　林相太郎外一名　辯護人　菅多村桂一郎　原喬　高木益太郎　塚崎直義

公訴上告人　谷口定次郎

私訴被上告人　寺岡音松外一名

判決

原公訴判決ヲ破毀ス、被告相太郎同千造ヲ各懲役六月ニ處ス、被告定次郎ヲ懲役三月ニ處ス、押收物件ハ差出人ニ還付ス、訴訟費用ハ被告三名ノ連帶負擔トス、被告相太郎千造ノ私訴上告ハ之ヲ棄却ス、私訴上告費用ハ私訴上告人ノ負擔トス

理由

(一)刑法第二百四十七條ニ所謂第三者トハ他人ノ事務ヲ處理スル者ト其事務ヲ處理セシムル者トヲ除キ其以外ノ者ヲ指稱シタルモノナレハ背任罪ノ主體タル其犯人ノ利益ヲ圖リタル場合ト雖モ其共犯人ニシテ他人ノ事務ヲ處理スル者ニ非ス又其事務ヲ處理セシムル者ニ非サルトキハ第三者ニ該

刑法第二百四十七條ノ適用○横領罪ノ成立

當ス

(二)按スルニ原院ハ被告千造カ貨物引換證ヲ入手セスシテ本件米穀ヲ荷受人タル被告相太郎ニ引渡シタル行爲ヲ以テ各荷送人カ貨物引換證ニ基キ米穀ノ上ニ有スル權利ヲ喪失シタルモノト爲シ之ヲ横領罪ニ問擬シタルモ本件米穀ハ各荷送人ニ於テ荷受人タル被告相太郎ニ賣渡シタルモノナレハ各荷送人ニ於テ米穀ヲ特定シ之ヲ運送取扱人ニ交付シタルトキ既ニ買主タル被告相太郎ノ所有ニ歸シ荷送人若クハ貨物引換證ノ所持人ハ只該米穀ノ上ニ引渡差止權若クハ擔保權ヲ有スルノミ故ニ入桝組運送合資會社ノ社員トシテ該米穀ヲ占有スル被告千造ニ於テ之ヲ其所有者タル被告相太郎ニ交付スルモ荷送人若クハ貨物引換證ノ所持人ヲシテ引渡差止權若クハ擔保權ヲ喪失セシムルニ止マリ他人ノ所有物ヲ横領シタルモノニアラサレハ横領罪ヲ構成スルコトナシ

(三)横領罪ニハ常ニ背任行爲ヲ包容スルヲ以テ一箇ノ行爲ニ對シ横領罪ト背任罪ノ兩立シ得ヘキモノニ非ス然ルニ原院カ一箇ノ行爲ニシテ横領及ヒ背任ノ罪名ニ觸ルルモノト認メタルハ不法ナルノミナラス本件被告等ノ行爲カ横領罪ヲ構成セサルコトハ第五點ニ對シ説明スルカ如クナルヲ以テ本論旨ハ理由アリ

(四)入桝組合資會社ハ法人ナルヲ以テ同會社ニ損害ヲ加ヘタル以上ハ同會社ノ社員カ被告ノ直系親族ナレハトテ刑法第二百四十四條同第二百五十一條ヲ適用シ其刑ヲ免除スヘキモノニアラス

◉横領事件

明治四十五年(れ)第九三四號
明治四十五年五月三十一日判決（破毀）

判決要旨

一、被告カ村税金二百三十九圓四拾九錢ヲ費消シタル事實ヲ陳述シタル旨掲ケアル公判始末書ヲ以テ被告カ村税金二百三十九圓四拾九錢九厘ヲ横領シタル事實ヲ認定シタルハ虚無ノ證據ヲ以テ罪證ニ供シタル違法ノ裁判タルヲ免カレス

説明

壹圓ヲ横領シタル證據ハ貳圓ヲ横領シタル事實ヲ斷スルノ罪證タル能ハサルト同時ニ貳圓ヲ横領シタル證據ハ未タ一圓ヲ横領シタル事實ヲ斷スルノ罪證タルコト能ハス此ノ理ヲ推シテ考フルトキハ事實ニ吻合セサル證據ハ其ノ不一致ノ度如何ニ輕微ナリト雖トモ未タ本罪ヲ斷スルノ證據タルヲ得サルナリ本件ニ於ケル被告ノ陳述ト裁判所ノ認定スル事實トハ其ノ差僅カニ金錢ニ於テ九厘ニ過キサルモ苟モ此ノ差アル以上ハ則チ事實ニ添ハサル不適法ノ證據ト云ハサルヲ得ス是レ本判決ノ生スル所以也

第一審　廣島地方裁判所
第二審　廣島控訴院

被告人　松浦四市郎

辯護人　花井卓藏
渡邊澄也

判決

歸趨ノ不一致

原判決ヲ破毀シ事件ヲ大阪控訴院ニ移ス

理由

辯護人法學博士花井卓藏辯護人渡邊澄也上告趣意書第一點原判決ハ被告ハ羽和泉村收入役在職中其職務上保管セル村税金合計二百三十九圓四十九錢九厘ヲ横領シタルモノナリト認定シ之レカ證據トシテ「被告ハ當公廷ニ於テ判示事實ト同趣旨ノ供述ヲ爲シタリ」ト説明セリ依テ原院公判始末書ヲ閲スルニ被告ハ村税金合計二百三十九圓四十九錢ヲ費消シタル事實ヲ陳述シタル旨ノ記載存スルモ九厘横領ノ所爲ニ付キテハ之レヲ認メタル事跡存スルコトナシ然ルニ前示ノ如ク被告ハ判示事實ト同趣旨ノ供述ヲ爲シタルモノトシテ罪證ニ供シタル原判決ハ虚無ノ證據ヲ採テ斷罪ノ資料ニ供シタル不法アルモノト信スト云フニ在リ

依テ原判決ヲ見ルニ其事實理由ノ部ニ「被告ハ云云其職務上保管セル村税金合計二百三十九圓四十九錢九厘ヲ云云横領シタルモノナリ」ト判示シ其證據理由ノ部ニ於テ「被告ハ當公廷ニ於テ判示事實ト同趣旨ノ供述ヲ爲シタリ」ト説明セリ然ルニ原院公判始末書ヲ査スルニ被告ニ於テ村税金二百三十九圓四十九錢ヲ費消シタル事實ヲ陳述シタルコトノ記載アルモ右金額ヲ超過シタル金額即チ原院判示ノ如キ金員ヲ費消シタル事實ヲ陳述シタル廉ナシ然ラハ即チ原判決ハ此點ニ於テ虚無ノ證據ヲ罪證ニ供シタル不法アルモノニシテ破毀ヲ免レサルモノトス既ニ此點ニ於テ原判決ヲ破毀スル以上ハ他ノ上告論旨ニ對シ説明スルノ要ナシ右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ依リ主文ノ如ク判決ス

◉新聞紙法違犯及名譽毀損事件

明治四十五年(れ)第九一〇號
明治四十五年五月三十一日判決（棄却）

判決要旨

一、新聞紙ニ記載セラレタル者ヨリ正誤書又ハ辯駁書ノ掲載方ノ請求ヲ受ケタルトキハ其ノ之ヲ受ケタル日ヨリ最初ニ發行スル新聞又ハ遲クトモ第三回目發行ノ紙上ニ其ノ全文ヲ掲ケ終ルコトヲ要ス

一、正誤書又ハ辯駁書ヲ新聞紙ニ登載スルモ其ノ次回又ハ三回ノ紙上ニ掲載シ始ムルニ止マリ其ノ終了ヲ第三回ノ發行以後ニ延ストキハ新聞紙法違犯ノ制裁ヲ免レス

（參照）新聞紙ニ掲載シタル事項ノ錯誤ニ付其ノ事項ニ關スル本人又ハ直接關係者ヨリ正誤又ハ正誤書、辯駁書ノ掲載ヲ請求シタルトキハ其ノ請求ヲ受ケタル後次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤ヲ爲シ又ハ正誤書、辯駁書ノ全文ヲ掲載スヘシ（新聞紙法第十七條第一項）

第一審　札幌地方裁判所

被告人　齋藤德義

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

被告上告趣意書原判決ハ被告カ明治四十三年十月八日發行旭川每日新聞第三百七十號以下ニ於テ上川支廳ノ批收ト題シ掲載シタル記事ニ對シ告訴人廣瀨環カ同月三十日附ヲ以テ之カ正誤辯駁ヲ爲シ其全文ノ掲載ヲ請求シタルニ其翌十一月一日發行第三百八十二號以下同月十一日ニ亘リ之ヲ掲載シタルハ新聞紙法第十七條ニ違反シタルモノナリトセラレタルモ新聞紙法第十七條新聞紙ニ掲載シタル事項ノ錯誤ニ付其請求ヲ受ケタル後次回又ハ第三回發行ノ紙上ニ於テ正誤ヲ爲シ又ハ正誤辯駁書ノ全文ヲ掲載スヘシトアルモ幵ハ次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ其正誤又ハ辯駁書ヲ掲載シ始ムレハ足ルモノニシテ第三回ノ發行新聞紙ニ完載スルコトヲ要スルモノニアラスト解セサルヘカラス若シ其辯駁書ニシテ非常ニ長文ニ亘リ其發行スル新聞紙ノ頁數以上ニ亘ル辯駁書ナリトセハ之ヲ第三回發行ニ於テ其全文ヲ掲載セントスルモ不可能ノ事實ナレハナリ然ルニ原審カ被告カ其第三回發行ニ於テ全文ヲ掲載セサリシ事實ヲ捉ヘ新聞紙法第十七條ニ問擬シタルハ法條ノ解釋ヲ誤リタルモノト信スト云フニ在リ◎依テ新聞紙法第十七條第一項ヲ見ルニ「新聞紙掲載シタル事項ノ錯誤ニ付其事項ニ關スル本人又ハ直接關係者ヨリ正誤又ハ正誤書辯駁書ノ掲載ヲ請求シタルトキハ其請求ヲ受ケタル後次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤ヲ爲シ又ハ正誤書辯駁書ノ全文ヲ掲載スヘシ」トアルヲ以テ若シ夫レ新聞紙所載事項ノ錯誤ニ關シ右法條所定ノ者ヨリ正誤書辯駁書等ノ掲載方請求アリタル場合ニハ其之ヲ受ケタル後又ハ遲クトモ第三回發行ノ新聞紙上ニ

其正誤書辯駁書等ノ記事全部ノ掲載ヲ完了スヘク所論ノ如ク次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ其正誤書辯駁書等ヲ掲載シ始ムルヲ以テ足レリト爲スヘキモノニアラサルコト右法文上一點ノ疑ナキ所ナリ而シテ若シ正誤書辯駁書等ノ全文ヲ掲載スルニハ其發行ニ係ル新聞紙所定ノ頁數以上ヲ要スル場合ニハ其頁數ヲ增加シテ之ニ掲載スル等即チ其掲載ノ方法ハ容易ニ之ヲ求ムルコトヲ得ヘク從テ其掲載ハ前示ノ如キ場合ニ於テモ所論ノ如ク決シテ不能ノ事ニアラサルナリ今原判決ヲ見ルニ被告ハ明治四十三年十月三十日本件正誤辯駁書全部ノ掲載方ヲ求メラレ而シテ同年十一月一日同二日同六日同八日同十日及同十一日各發行ノ新聞紙上ニ之ヲ分載シタル事實ニシテ即チ右全文掲載ノ請求ヲ受ケタル後次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ右全文ノ掲載ヲ了シタルモノニアラサレハ右ハ前記條項ノ規定ニ違反シタルモノナルヲ以テ之ヲ同條項ニ問擬シタル原判決ハ相當ニシテ論旨ハ理由ナシ

◉國稅徵取法違犯幷附帶私訴事件　明治四十五年(れ)第一〇四二號　明治四十五年六月十四日判決　(棄却)

判決要旨

一、債權ノ讓渡カ債務ノ辨濟ニ代ヘ卽チ代物辨濟トシテ行レタルトキト雖モ其ノ之ヲ讓渡スル目的カ稅金ノ徵收ヲ免カルヽニアルトキハ國稅徵收法第三十二條ニ所謂財產ヲ脫漏シ

脫稅罰ノ成立

タルモノニ該當ス

（參照）滯納者又ハ滯納者ノ財産ヲ占有スル者其ノ財産ヲ藏匿脫漏シ又ハ虛僞ノ契約ヲ爲シタルトキハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス（國稅徵收法第三十二條第一項）

第一審　福岡地方裁判所久留米支部　第二審　長崎控訴院

公訴上告人　吉武才太郎

私訴上告人　大川稅務署

右指定代表者　下田熊雄

私訴被上告人　重富一

判決

私訴上告費用ハ私訴上告人ノ負擔トス

理由

上告第四點國稅徵收法第三十二條第一項ニ謂フ所ノ財産脫漏トハ賣買贈與等ノ行爲ニ因リテ資産ノ減少ヲ來スヲ指稱シ貸借金ノ辨濟ノ如キ債務履行ニ關スル行爲ハ之ヲ包含セスト信ス商法第千五十條ニハ破産宣告ヲ受ケタル債務者カ（中略）債權者ニ損害ヲ被ラシムル意思ヲ以テ貸方財産ノ全部若クハ一部ヲ（中略）脫漏シ（中略）タルトキハ詐欺破産ノ刑ニ處スト規定シ而シテ次ノ第千五十一條ニハ支拂停止ヲ爲シタル後支拂又ハ擔保ヲ爲シテ或債權者ニ利ヲ與ヘ財團ニ損害ヲ加ヘタルトキ（第三）過怠破産ノ刑ニ處スル旨ヲ規定セリサスレハ商法ノ用語例ニ於テハ支拂ハ脫漏テフ文字中ニ包含セサルコトヲ推知スヘシ商法ノ用語例ヲ以テ直ニ國稅徵收法ノ用語ヲ解釋ス

ヘキニアラスト雖モ此場合ハ自ラ相類セル場合ニシテ別段解釋ヲ異ニスヘキ必要ヲ見サレハ國稅徵收法第三十二條等一項ノ所謂脫漏ニハ債務ノ辨濟ハ包含セスト解スルヲ得ヘク又一面國稅徵收法第十五條ノ規定ヲ見レハ滯納者カ財産ノ差押ヲ免ルル爲メ故意ニ其財産ヲ讓渡シ讓受人其情ヲ知リ讓受ケタル場合ニ於テ政府ハ其行爲ノ取消ヲ求ムルコトヲ得トアリ此規定ハ財産脫漏ノ場合ニ於ケル取消權ヲ規定セルモノニ外ナラサレハ「滯納者カ財産ノ差押ヲ免ルル爲メ故意ニ其財産ヲ讓渡シ」ハ財産脫漏ノ註解ト見ルモ亦不可ナシト信ス要スルニ商法破産ノ場合ニハ支拂ヲ罰スル場合アルモ國稅徵收法ニハ之ヲ罰セス（舊刑法第三百八十八條モ亦同シ）ト思料ス然ルニ原判決ハ債務ノ辨濟トシテ債權ヲ讓渡シタリト認メナカラ之ヲ財産脫漏トシ國稅徵收法等三十二條第一項ヲ適用シ有罪ヲ言渡シタルハ擬律錯誤ノ違法アルモノナリト云フニ在レトモ國稅徵收法第三十二條第一項ハ納稅者カ其財産ヲ藏匿脫漏シ又ハ虛僞ノ契約ヲ爲シ以テ國庫ニ損害ヲ加ヘ又ハ加ヘントスルモノヲ處罰スル趣旨ナレハ國稅滯納者ニシテ苟クモ稅金ノ徵收ヲ免ルルノ目的ヲ以テ債務ノ辨濟ニ代ヘ債權ヲ讓渡シタルコト判示ノ如キ場合ニ於テハ其行爲タルヤ同條ニ所謂財産ヲ脫漏シタルモノニ該當スルヲ以テ論旨ハ理由ナシ

◎文書僞造行使横領幷賍物故買事件

（明治四十五年（れ）第一〇二三號　明治四十五年六月十三日判決　（破毀））

判決要旨

一、刑事裁判ニ於テ被告ニ讀聞スヘキ證憑書類トハ必スシモ裁

書類證據及ヒ物件證據

判所ノ作成シタルモノヽミニ限ラス當該事件ノ證據トシテ特ニ作成セラレタルモノナルトキハ訴訟關係人ノ提出ニ係ルモノト雖モ凡テ之レニ包含ス

一、參考人ノ訊問調書ヲ證人ノ訊問調書トシテ罪證ニ供スルハ違法ナリト雖モ證人ノ訊問調書ヲ參考人ノ訊問調書トシテ罪證ニ供スルモ之ヲ以テ上告ノ理由トナスヲ得ス

說明

書類證據及ヒ物件證據、罪證ヲ別テ二トナス一ヲ書類證據ト云ヒ他ヲ物件證據ト稱ス書類證據及ヒ物件證據トハ犯罪事實ヲ證明スルヲ目的トシテ作成セラレタル凡テノ文書ヲ云フ裁判所ノ作成ニ係ルトヲ不問サルナリ凡テ證據ナリ文書カ犯罪ノ直チニ罪證タルモノヲ云フ例ヘハ殺人罪ニ供シ

タル物件ハ其ノ文字ノ羅列ニヨリ事實ヲ直寫スルモノナルヲ以テ之レニ記載セラレタル事實カ犯罪ノ直チニ罪證タルモノヲ云フ例ヘハ殺人罪ニ供シタル劍銃ノ如キ是ナリ

凡ソ犯罪ノ證據タルヘキ物及ヒ事實カ自由ノ本然ノ性質ヨリ云フトキハ其ノ物トハ本來ノ二者ニ過キス

若シ物及ヒ事實カ自由ニ携帶シ得ルモノナラハ別ニ書類證據トシテ云ヒ他ヲ物件證據ト云フトキハ其ノ物トハ本來ノ二者ニ過キス

動產ノ如キ其ノ運搬ニ困難ナル動產ノ如キハ之ヲ携帶スルコトヲ能ハス物モ亦タ不

ス

ル

ノ

要ナ

キ

ナ

リ

然レトモ事實ハ之ヲ實形的ニ捕捉スルコトヲ能ハス物モ亦タ不

ス

ル

ノ

ナ

リ

他

運搬ニ困難ナル動產ノ如キハ之ヲ携帶スルコトヲ難シ於茲乎實

地ニ臨檢シ文書ニ依リテ其ノ實情ヲ直寫シ依リテ以テ罪證ヲ爲ササルヲ可ラス直チニ雖

ト

モ

携帶ニ輕便ナル動產物ノ如キハ文書ニ依リテ之ヲ直寫スルノ要ナク直チニ

之

ヲ

以テ罪證ニ供スルコトヲ得ヘシ書類證據物件證據ハ無效ニ歸スルニ付キ若シ法式

存

ス

レ

ハ物件證據トハ云フトキハ其ノ物件ハ書類證據ト云フトキハ其ノ書類ハ物件證據ニ

在

ラ

ハ書類夫レ自體カ證據タルノ差アリ依リテ左ノ結果ヲ生ス

第一證據ヲ採集スルニ付キ若シ法式ニ反スルトキハ其ノ物件證據ハ無效ニ

キ

ハ凡テ證據ヲ採集スルノ訊問調書ハ不得ト雖モ物件證據ハ違法ノ訊問

人參考人ノ訊問調書ハ不得ト雖モ物件證據ハ即チ殺人ニ供シタル劍銃ノ如キモノニ在テ

ハ之ヲ採集スルノ手續違法ナルモ又ハ職權ナキ者之ヲ採集シタリトスルモ之レ他ナシ文書ハ職權アル者カ嚴密ナ

書ハ罪證タルヲ效力ヲ失墮スルニ於テ始メテ其ノ記載事項ノ眞正ヲ維持スルコトヲ得ヘ

カ爲メ罪證タル效力ヲ失墮スルニ於テ始メテ其ノ記載事項ノ眞正ヲ維持スルコトヲ得ヘ

ク法式ニ違背シテ作成スルニ於テハ措信ノ基礎ヲ失シ從テ罪證タルノ效ナケレハナリ反之テ物件證據ニ在テハ其ノ之ヲ採集スル手續ノ適否ニヨリ證據力ニ厚薄ノ差ヲ生スルコトナシ何トナレハ物件證據ハ物夫レ自體カ罪證タル資格ヲ具有スルモノニシテ之ヲ採集スル手續ノ適否ノ如キハ未タ此ノ證據力ヲ左右スルニ足ラサレハ且ツ果シテ然ラハ採證手續ニ不法アルノ故ヲ以テ裁判ノ不當ヲ攻擊センニハ獨リ書類證據ノ場合ニ限リ物件證據ニ對シテハ之ヲ主張スルヲ得サルナリ

第一審　佐賀地方裁判所

被告人　澁谷文太外一名

判決

第二審　長崎控訴院

音羽耕逸

辯護人　近藤孝義

被告文太ノ上告ハ之ヲ棄却ス、被告光次郎ヲ重禁錮一年ニ處ス、未決勾留日數百日ヲ本刑ニ算入ス、押收物件ハ差出人ニ還付ス、公訴裁判費用ノ內野田爲輔ノ訊問ニ依リ生シタル金七圓ノ內二圓ハ被告光次郎ニ於テ第一審ノ共同被告江口作二相浦次郎

第二書類證據ハ書記之ヲ朗讀シテ被告ノ辯明ヲ求メ物件證據ハ之ヲ被告ニ示シテ辯解ヲ爲シムルノ之レ證據ノ性質ヨリ生スル當然ノ結果ニシテ別ニ說明ヲ要セス若シ裁判所カ書類證據ニ屬スヘキモノヲ讀聞セスシテ單ニ被告ニ示シ辯解ヲ爲サシムルニ於テハ之レ裁判ノ方法ヲ誤ルモノニシテ破毀ヲ免カレサルナリ

ト連帶負擔スヘシ

理由

上告第五點原判決ハ被告文太ノ判示第一事實ヲ認ムルノ資料トシテ江口作二山田吟治等詐欺橫領金ニ關スル僞造帳簿調査ト題スル書類ノ記載ヲ證據トセラレタレトモ右謂査書ハ全ク作成又ハ提出者ノ署名捺印若クハ認證文字ヲ存セス果シテ何人ノ作成又ハ提出ニ係ルモノナリヤヲ知ルヲ得サレハ如此文書ハ少クトモ文書自體ノミヲ以テシテハ全然證據力ヲ缺如セシモノト謂ハサルヘカラス然ルニ原判決ハ之ヲ斷罪ノ資トナシタルハ採證法則ニ背戻セルノミナラス(以上論旨上段)元來如上ノ書類ハ裁判所カ被告事件ニ關シ作成シタル訴訟記錄ニアラサレハ假令之ヲ採證スルニ當リテモ須ク其書類ヲ被告ニ展示シテ證據調ヲ爲スヘキモノナルニ原院カ本件記錄ト同シク單ニ之ヲ讀聞クルニ止メタルハ此點ヨリ論スルモ亦採證法則上ノ不法アリ(以上論旨下段)ト云フニ在レトモ◎所論ノ調書ハ株式會社佐賀米穀取引所理事長石丸勝一ノ提出書ニ附屬スル書類ナルコトハ同提出書ニ其旨ノ記載アルニ依テ明瞭ナレハ前段論旨ハ謂ハレナシ又刑事訴訟法ニ所謂證憑書類トハ裁判所ノ作成シタルモノノミニアラス當該刑事被告事件ノ證據トシテ特ニ作成セラレタルモノナルトキハ訴訟關係人ノ提出シタルモノト雖モ證憑書類タルコト論ヲ俟タス而シテ所論ノ僞造帳簿ハ證據物件ナルモ同帳簿調査書ハ本件刑事被告事件ニ關シ作成シタル文書ニシテ證憑書類ナレハ原院カ之ヲ朗讀セシメタルハ正當ナルノミナラス假リニ之ヲ證據物件ナリトスルモ原判決ノ如ク其內容ヲ證據トシテ援用スル場合ニ在テハ之カ朗讀ニ依テ證據調ノ目的ヲ達シ得ルモノナ

ルヲ以テ必スシモ之ヲ被告人ニ示スノ要ナキコトハ本院判例ノ認示スル所ナレハ後段論旨モ亦理由ナシ

上告第七點原判決ハ其證據理由中ニ「野田爲輔ニ對スル(云云)豫審調書中ノ供述記載」「井上磯吉ニ對スル(云云)豫審調書中ノ供述記載」ト說示シ之ヲ被告等ノ罪證ニ供セラレタリ然レトモ此記載ノミヲ以テシテハ判文上被供述者ハ如何ナル資格ニ於テ其供述ヲ爲シタルナノナルヤ即チ證人トシテノ供述ナルヤ參考人トシテノ供述ナルヤ將タ又牽聯事件ノ被告人トシテノ供述ナルヤヲ知ルヲ得サレハ其信憑力ノ等差ヲ識別スルニ由ナシ御院ニ於テハ從來屢次事實參考人ノ供述ヲ判文上證人ノ供述トシテ罪證ニ供シタル判決ヲ不法トシテ破毀セラレタリ（御院刑事判決錄明治四十二年第一四八九頁同四十年第一三四頁同三十年第十卷第二八頁判決要旨參照）然ラハ則チ判文上供述者ノ資格ノ明確ナラサルモノハ全ク其信憑力ヲ區別スルヲ得サルニ歸スルヲ以テ漫然之ヲ被告ノ罪證ニ供スルハ更ニ其不法ノ甚シキモノト爲ササルヲ得ス原判決ハ採證法則ニ違背セルノ不法アルヲ免レスト云フニ在リ

按スルニ參考人ノ供述ハ證人ノ供述ニ比シ證據トシテノ效力薄弱ナルカ故ニ參考人ノ供述ヲ證人ノ供述トシテ斷罪ノ資料ニ供スルノ不法ナルコトハ論ヲ俟タサルモ判文上特ニ證人某ノ豫審調書ナルコトヲ明示セサルモ同調書ニ依リ同某ノ證人ナルコト明瞭ナル場合ニ於テハ證人ノ豫審調書トシテ罪證ニ供シタルモノト認ムルヲ相當トスルノミナラス證人ノ豫審調書ハ之ヲ參考人ノ豫審調書トシテ罪證ニ供シタリトスルモ事實ノ認定ニ對シ何等ノ影響ヲ及ホスモノニアラサレハ之ヲ

攻擊シテ上告理由ト爲スコトヲ得ス而シテ所論野田爲輔及井上磯吉ハ共ニ證人トシテ訊問シタルモノナルコトハ其豫審調書ニ明記スル所ナルヲ以テ本論旨モ亦理由ナシ

◉詐欺事件（破毀）

明治四十五年(れ)第八二一號　明治四十五年五月三十日判決

判決要旨

一、證人ノ陳述ヲ罪證ニ供スルニ當リ單ニ陳述ノ狀態トノミ記載シ如何ナル狀態ナルヤヲ明示セサル判決ハ證據ノ內容ヲ明示セサル違法ノ裁判ナリトス

第一審　東京地方裁判所　第二審　東京控訴院

被告人　田丸瀧次郎外二名　辯護人　塚崎直義　高木益太郎

判決

原判決中被告財郎同卯藏ニ關スル部分ヲ破毀シ本件ヲ宮城控訴院ニ移ス

理由

被告財次郎辯護人塚崎直義上告趣意書第一點原判決ハ證人增山鐵太郎カ原審公廷ニ於テ證人トシテ陳述シタル狀態ヲ罪證ニ供シタリ然レトモ單ニ證人トシテ陳述シタル狀態ト云フノミニテ如何

ナル狀態ナルヤヲ明示セス漫然之ヲ罪證ニ供シタルハ違法ニシテ原判決ハ此點ニ於テ破毀セラルヘキモノトスト云ヒ」被告卯藏辯護人高木益太郎上告趣意書第一點ハ被告財次郎辯護人塚崎直義上告趣意書第一點ト同一趣意ナリ

因テ按スルニ犯罪事實ヲ認ムル徵憑ハ判事ノ判斷ニ屬シ刑事訴訟法上何等制限的規定アルコトナケレハ事實裁判所ハ或ル陳述ヨリ推理シ因テ得タル心證事項ヲ他ノ證憑ト綜合考覈シ罪トナルヘキ事實ヲ確定スルノ妨ケトナルコトナシ然レトモ原判決ニ摘示スル如ク單ニ證人增山鐵太郎ハ第二審ニ於ケル證人トシテ陳述シタル狀態トノミ記載シ之ヲ斷罪ノ資料トスルモ右陳述ノ內容ヲ揭記シ之ニ因テ其狀態ノ如何ヲ自明ナラシムルカ然ラサレハ其陳述ニ因リ外形ニ顯ハレタル狀態ノ如何ヲ明示スルニ非サレハ果シテ如何ナル狀態ヲ採用シタルモノナルヤ不明ニ歸シ從テ原判決ハ結局證據內容ノ明示ヲ缺ク所アルヲ以テ其採證ニ違法アル失當ノ裁判ニシテ本論旨ハ理由アリ原判決ハ破毀ヲ免レサルモノトス旣ニ此點ニ於テ原判決ヲ破毀スル以上ハ被告財次郎及卯藏辯護人ノ他ノ論旨ニ對シ說明ヲ爲スノ要ナシ

◉文書僞造行使詐欺事件

明治四十五年(れ)第九六五號
明治四十五年六月十七日判決（棄却）

判決要旨

一、同村又ハ同町內ニ同氏名ヲ有スル者數人アル場合ニ於テ其

ノ何人ナルカヲ特定セスシテ漠然其ノ氏名ヲ冒用シ僞造シタル手形ト雖モ之ヲ以テ詐欺取附ノ手段トナスニ於テハ文書僞造罪ヲ構成ス

第一審　靜岡地方裁判所
被告人　石井庄作

第二審　東京控訴院
辯護人　橫山勝太郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第四點原判文第一事實ノ末段ニハ「…同月中同所ニ於テ行使ノ目的ヲ以テ間瀨庄太郎振出名義ノ金一萬三千圓ノ約束手形（押第十七號）ヲ僞造シ同月末頃靜岡市新谷町旅人宿八木屋ニ於テ被告ハ德藏ニ對シ右荷物代金ノ爲メ振出サレタルモノトシテ前示僞造ノ手形ヲ示シ…」ト說示シ以テ刑法第百六十二條第百六十三條ニ問擬シタリ仍テ本件記錄ヲ調査スルニ愛知縣龜崎町大字龜崎ニ於テ間瀨庄太郎ナル者五人アリ其內同所九百五十一番戶ノ間瀨庄太郎ハ明治四十二年三月十四日死亡シタル事實ニシテ前示僞造手形ニシテ若シ右死亡シタル二人ノ內孰レカノ氏名ヲ冒用シタルモノトモハ法律上手形僞造罪ハ成立スルモノニ非ス又若シ生存者三人中ノ間瀨庄太郎ノ署名ヲ濫用シタルモノトセハ孰レノ間瀨庄太郎ヲ指スカ原判決上明瞭ナラス此點ニ於テ原判決ハ理由不備ナル違法アリト信スト云フニ在レトモ○同町村ト若クハ同區域內ニ同姓名ノ者數人アル

場合ニ於テ之ヲ特定セスシテ單ニ其氏名ヲ冒用シ手形ヲ僞造シ之ヲ以テ詐欺ノ手段ト爲シタル時ト雖該僞造手形ハ人ヲ欺罔スルニ足ルヲ以テ文書僞造罪ノ成立スヘキハ論ナキ所ナリトス原判決ニ依レハ被告ハ遠江國御前崎沖ニ於ケル難破船ニ積載セル生糸生蠟石油等ヲ賣却シ多大ノ利益ヲ得ルヲ名トシ石橋德藏ヨリ金員ヲ騙取セントシ同人ヲシテ右荷物ノ存在ト其賣約濟ナル事實ヲ信セシムル爲メ被告肩書居宅ニ於テ間瀬庄太郎振出名義ノ金一萬三千圓ノ約束手形ヲ僞造シ德藏ニ對シ右荷物代金ノ爲メ振出セシモノトシテ之ヲ示シタル事實ナレハ所論ノ如ク龜崎町字龜崎間瀬庄太郎ト稱スルモノ數名アルヲ原判決ハ其孰レノ間瀬庄太郎ナリヤヲ特定セサリトスルモ該僞造手形カ詐欺ノ手段タリシコト明ナルヲ以テ特ニ之ヲ判示セサルモ生存スル一名ノ間瀬庄太郎ニ關スル手形ヲ僞造シタルモノトノ事實ヲ認定シタルコト疑ヲ容レス故ニ手形僞造罪ノ事實理由ニ欠クル所ナシ從テ論旨ハ理由ナシ

◉瀆職事件　明治四十五年(れ)第一〇八四號　明治四十五年六月十八日宣告（棄却）

判決要旨

一、數人共同シテ賄賂ヲ收受シタル場合ニ於テ各被告ヨリ之ヲ追徵センニハ共犯人各自ノ分配額如何ニ拘ラス平等ニ分割シテ負擔セシム

第一審　千葉地方裁判所　　第二審　宮城控訴院

被告人　神直三郎　　辯護人（花井卓藏　田澤三郎　宅磯清吉）

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第二點原判決ハ第二事實ニ於テ被告直三郎及大島七之助ノ收受シタル金千圓ニ對スル兩名ノ費消額ヲ明示セサルノミナラス各自其半額ヲ費消シタル證據ヲ說明スルコトナク被告ヨリ金五百圓ヲ追徵スルノ言渡ヲ爲シタルハ法則ニ背反スル不法アルモノト信スト云フニ在レトモ○數人共同シテ賄賂ヲ收受シタル事件ニ於テ費消シタル賄賂ヲ追徵スル場合ニハ共犯人各自ノ分配額如何ニ拘ハラス常ニ平等ニ分割シテ負擔セシムヘキコトハ本院判例ノ示ス所ナルヲ以キ本論旨ハ理由ナシ

◉文書僞造行使詐欺事件　明治四十五年(れ)第八四七號　明治四十五年五月三十日判決（棄却）

判決要旨

一、刑法第百五十九條第一項ノ所謂他人ノ署名ヲ使用シテ文書ヲ僞造シタル者トハ其ノ使用スル署名カ本人ノ氏名ヲ顯シ

タルモノナルト商號若クハ通稱ヲ顯シタルモノタルト將タ又タ本人ノ自筆ニ成ルト又ハ他人ヲシテ代筆セシメタルト若クハ印刷ニ依リ表出シタルモノナルトヲ問ハス苟モ他人ノ名義ヲ使用シテ虚僞ノ文書ヲ作成スルニ於テハ同條ノ犯罪ヲ構成ス

（參照）行使ノ目的ヲ以テ他人ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ僞造シ又ハ僞造シタル他人ノ印章若クハ署名ヲ使用シテ權利、義務又ハ事實證明ニ關スル文書若クハ圖畫ヲ僞造シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス（刑法第百五十一條第一項）

第一審　大阪地方裁判所　第二審　名古屋控訴院

被告人　齋尾安喜　外二名

辯護人　上村高木益太郎豐　塚崎直義　伊藤光彦

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第二點原判決ハ上告人等相謀リ豐田商店ナル記名アル帳簿ニ虚僞ノ記載ヲ爲シ之レヲ行使シタル所爲ヲ認メ刑法第百五十九條第一項第百六十一條ニ該當スル犯罪ナリト斷定セリ然レトモ刑

法第百五十九條第一項ヲ見ルニ明カニ「他人ノ印章若クハ署名ヲ使用シ」ト規定シアリ而シテ署名ト稱スルハ自署セル氏名ヲ意味スルコトハ一點ノ疑ナキ所ナルヲ以テ特ニ記名ヲ使用スルモ署名ヲ使用スルト同一ニ論スヘキ規定ノ存セサル限リハ（商法中署名スヘキ場合ノ件參照）單ニ他人ノ記名アルモノヲ使用シテ文書ヲ僞造スルコトアルモ刑法第百五十九條第三項ノ罪ヲ構成スルコトアルハ格別同條第一項ノ罪ヲ構成スルコトナシト云ハサルヘカラス然ルニ原判決ハ前示ノ如ク之レニ對シテ刑法第百五十九條第一項ヲ適用處斷シタルハ違法ニシテ破毀ヲ免カレサルモノトスト云フニ在レトモ原判決ノ認ムル事實ニ依レハ被告等相謀リ豐田商店ノ記名アル賣買元簿ニ權利義務ニ關スル虚構ノ事實ヲ記入シタルモノニシテ凡ソ作成者タル他人ノ記名ヲ使用シテ文書ヲ僞造シタル行爲ハ即チ刑法第百五十九條第一項ニ所謂他人ノ署名ヲ使用シテ文書ヲ僞造シタルモノニ該當シ記名カ本人ノ氏名ヲ顯ハスモノナルト商號若クハ通稱ヲ顯ハスモノナルトヲ問フコトナク又本人ノ自筆ニ成ルト本人カ他人ヲシテ代筆セシメタルト若クハ印刷ニ因リ表出シタルトヲ論スルコトナク苟モ之レヲ使用シテ文書ヲ僞造スルニ於テハ同條項ノ文書僞造罪ハ成立ス蓋シ同條項ノ規定ハ他人ノ直正ナル記名ヲ使用シテ文書ヲ僞造スルヲ處罰スルヲ趣旨トシテ記名カ本人ノ自筆ニ成ル場合ニ限リタルモノニアラサルナリ故ニ論旨ハ理由ナシ

◉文書僞造詐欺事件

明治四十五年（れ）第八一六號
明治四十五年五月三十一日宣告（棄却）

判決要旨

詐欺取財罪ノ認定

一、騙取シタル金額カ判文上明瞭ナラストルモ騙取シタル事實明瞭ナルニ於テハ詐欺罪ノ目的物タル財物ノ明示ニ缺クル所ナシ

第一審　千葉地方裁判所八日市場支部　第二審　東京控訴院

被告人　椿富太郎　外二名　辯護人　牛込龍藏　花井卓藏　渡邊澄也　永屋茂市

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

被告彦曹辯護人法學博士花井卓藏辯護人渡邊澄也同永屋茂市上告趣意書第一點原判決ハ第一事實ノ前段ニ於テ「被告富太郎ハ其父椿善右衛門カ寶田巖ヨリ云云有體動產ノ差押ヲ受クルヤ云云被告彦曹ハ眞正ノ債權ナルカ如ク裝ヒ云云元利金合計金五千六百五十八圓七十六錢八厘ニ付キ佐原區裁判所執達吏山本博涉ニ配當要求ノ申立ヲ爲シ競賣賣得金配當ニ際シ云云同債權者ニ前示債權中金八圓一錢六厘ノ配當ヲ得セシメタル外其殘額ヲ右執達吏ヨリ同年四月十三日配當金名義ノ下ニ受取リテ騙取シ」ト判示シ被告ノ騙取シタル金員ハ競賣賣得金ヨリ寶田巖ノ受領シタル金八圓一錢六厘ヲ控除シタル殘額ナリト認定セルモ該强制執行事件ニ於ケル競賣賣得金ノ數額ヲ說示セ

ルカ故ニ被告ノ騙取シタル金圓ノ幾何ナルヤヲ知ルニ由ナキモノトス乃チ原判決ハ爰點ニ於テ詐欺取財ノ目的タル物件ヲ明示セサルモノニシテ理由不備ノ不法アルモノト信スト云ヒ」第二點原判決ハ第二事實ノ後段ニ於テ競賣賣得金配當ニ際シ明治四十四年三月一日常次郎ノ債權額金八十四圓二錢（金八十四圓二錢ハ鈴木常次郎ノ債權額ニシテ競賣賣得金中配當スヘキ金額ハ八十六圓六十七錢ナルコト原判決援用ノ證據タル豫第四號證記錄中ノ配當表ニ徵シ明カナリ）中金九十五錢ノ配當ヲ得セシメタル外其殘額ヲ執達吏南圓治ヨリ配當名義ノ下ニ受取リテ之ヲ騙取シタルモノト認定セルモ競賣賣得金ノ數額ヲ明示セサルカ故ニ被告ノ騙取シタル金圓ノ幾何ナルヤヲ知ルニ由ナキモノトス乃チ原判決ハ此點ニ於テ前點ト同シク理由不備ノ不法アルモノト信スト云フニ在レトモ◎原判決第一事實ノ前段ニ寶田巖ノ債權額二百四圓餘ニ對シ金八圓一錢六厘ノ配當アリタルコトヲ判示シ第二事實ノ後段ニ鈴木常次郎ノ債權額金八十四圓二錢ニ對シ金九十五錢ノ配當アリタルコトヲ判示シアル以上ハ被告等ノ要求ニ係ル第一事實前段ノ金五千六百五十八圓七十六錢八厘ノ債權額幷ニ第二事實後段ノ金五千七百八十九圓八十八錢ノ債權額ニ對シ幾何ノ配當アリタルカ即チ被告等カ幾何ノ金圓ヲ騙取シタルカハ算數上知リ得ヘキ事實ニ屬スルヲ以テ其數額ノ明記ナキモ理由不備ノ判決ナリト云フヲ得サルノミナラス假リニ騙取金圓ノ數額ハ判文上明瞭ナラストスルモ件本ノ如ク競賣賣得金ノ幾部ヲ騙取シタル事實明瞭ナル以上ハ犯罪ノ目的物タル財物ノ明示ニ缺クル所ナキヲ以テ本論旨ハ上告ノ理由ナシ

◉恐喝事件

明治四十五年(れ)第五〇九號
昭和四十五年四月十五日宣告

(棄却)

判決要旨

一、刑法第二百四十九條第一項及ヒ第二項ハ同一罪質ニシテ又同一罪名ヲ成スモノナレハ一箇ノ行爲ニシテ同時ニ同條第二項及ヒ第一項ニ觸ルル場合ニハ單ニ一個ノ罪名ニ觸ルル恐喝罪ヲ構成スルモノトス

(參照) 人ヲ恐喝シテ財物ヲ交付セシメタル者ハ十年以下ノ懲役ニ處ス」前項ノ方法ヲ以テ財産上不法ノ利益ヲ得又ハ他人ヲシテ之ヲ得セシメタル者亦同シ(刑法第二百四十九條)

第一審　名古屋地方裁判所岡崎支部　第二審　名古屋控訴院

被告人　神谷忠右衛門　辯護人　中村丁詮

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

被告上告趣意書(一)原審ハ第一審判決ヲ認容シ被告人ノ控訴ヲ棄却シ法律ヲ適用スルニ當リ刑法第二百四十九條第一項ヲ適用シタリ然ルニ被告人ノ所爲ハ淺井末吉ヲ恐喝シ其買受ケタル不動産ヲ原價ヲ以テ被告人ニ賣渡サシメントシタルニアルヲ以テ無價ニテ之ヲ交付セシムルモノニ非ス

故ニ原審ノ確定シタル事實ニ依レハ原價即チ安價ニ之ヲ買受ケントシタルモノナルヲ以テ財産上不法ニ利益ヲ得ントシタルニ外ナラス依テ刑法第二百四十九條第二項ヲ適用スヘキ筈ナルニ之ニ同條第一項ヲ適用シタルハ擬律ニ錯誤アルモノト云ハサルヲ得ス詳言スレハ同條第一項ハ恐喝ニヨリ無價ニテ財物ヲ交付セシメタルモノヲ罰スル法條ニテ本件ノ如ク或ル代價ヲ支拂ヒ安價ニ物件ヲ賣却セシムルカ如キハ不法ノ利益ヲ得ントセルニ過キサルヲ以テ第一項ヲ適用スヘキモノニ非ス之レ本件上告ヲ爲スニ至リタル次第ナリト云フニ在ルモ◉刑法第二百四十九條第一項及第二項ハ同一罪質ニシテ又同一罪名ヲ成スモノナレハ第二百四十九條ハ一箇ノ罪名ニ關スル規定ニ外ナラス故ニ同一ノ被害者ニ對スル一箇ノ行爲ニシテ同時ニ其第二項及第一項ニ觸ルル場合ニハ固ヨリ二箇ノ罪名ニ觸ルルモノトシテ同法第五十四條第一項前段ノ適用ヲ受クルコトナク單ニ一箇ノ罪名ニ觸ルル恐喝罪ヲ構成スルモノトス從テ同法第二百四十九條第一項ニ適合スル場合ニ第二項ニ適用スルモ又之ニ反シ第二項ニ適合スル場合ニ第一項ヲ適用スルモ苟モ第二百四十九條ヲ適用セル以上ハ其法律適用ハ正當ニシテ論スルニ擬律ノ錯誤ヲ以テスヘキニアラス原判決事實認定ノ趣旨ニ依レハ所論ノ如ク被告ハ人ヲ恐喝シ原價即チ安價ヲ以テ不動産ヲ賣渡サシメントシ實行ニ著手シタルモ之ヲ遂ケサルモノナリ故ニ恐喝手段ヲ施シテ不動産賣渡ノ承諾ヲ爲サシメントスル點ヨリ觀察スレハ同條第二項ニ適合シ更ニ進ンテ不動産ノ交付ヲ受ケントスル點ヨリ觀察スレハ第一項ニ適合スト雖モ本來第一項及第二項ハ別異ニアラスシテ一箇ノ罪名タルニ過キサルコト前ニ說示スル所ノ如キカ故ニ原判決モ第一審判決モ右第二百四十九條ヲ適用セル以上ハ其法律適

用ハ正當ニシテ本論旨ハ理由ナシ

◉横領事件

明治四十五年(れ)第七七一號
明治四十五年五月二十七日宣告（棄却）

判決要旨

一、刑法施行法第二十九條ニ所謂短期一年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪トハ現ニ犯人ニ科スヘキ法定刑ノ短期カ一年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ヲ謂フモノナレハ罪質ハ短期一年以上ノ懲役ニ該ルモ刑法第六十五條第二項ニ依リ短期一月以上ノ懲役ニ處スヘキ場合ニ在リテハ之ヲ他ノ法律ノ適用ニ付キ舊刑法ノ重罪ト看做スヘキモノニ非ス

（參照）身分ニ因リ特ニ刑ノ輕重アルトキハ其身分ナキ者ニハ通常ノ刑ヲ科ス（刑法第六十五條第二項）
死刑、無期又ハ短期一年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ハ他ノ法律ノ適用ニ付テハ舊刑法ノ重罪ト看做ス（刑法施行法第二十九條）

一、府縣ノ技手ハ其上官タル土木課長ノ命ニ依リ土木ニ關スル事務ニ從事スヘキ職責ヲ有スルモノナルヲ以テ縣ノ土木課

長ヨリ縣立病院ヲ取毀チタル古材木ノ保管ヲ命セラレタル以上ハ職務上之ヲ保管スヘキモノトス

第一審　鳥取地方裁判所
被告人　加藤忠五郎　外一名

第二審　廣島控訴院
辯護人　後藤德太郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

被告宇之助辯護人後藤德太郎上告趣意書一、原判決ハ被告ノ罪證トシテ原審ニ於ケル相被告加藤忠五郎ノ供述ヲ援用スレトモ同人ノ罪案ハ刑法第六十五條第一項第三百五十三條ニ當リ刑法施行法第二十九條ニ依リ重罪ノ罪質ヲ有スルモノナルコト原判決説示ノ如クナルニ拘ハラス刑事訴訟法第二百五十八條第二百三十七條ニ定ムル下調ヲ經サリシコト本件記錄ノ示ス如クニシテ原判決ハ此重要ナル準備手續ヲ缺ケル公判審理ノ下ニ述ヘラレタル右供述ヲ證據材料トナセルモノナルヲ以テ固ヨリ不法ノ判決ナリト云ハサルヲ得ス此點ニ付テハ貴院カ明治四十二年(れ)第二一九九號刑事上告事件ニ付明治四十三年二月二十四日言渡シタル判決理由中ニ於テ「裁判所カ重罪事件ヲ開廷スルニ當リ下調ノ手續ヲ履踐セサルトキハ其公判手續ハ無效ニ歸スルモノトス從チ之ニ基キタル被告ノ陳述ハ適法ノ證據力ヲ有セス」ト説明スルニ依リテ明カニシテ其證據力ヲ有セサル

刑法施行法第二十九條ノ注意○府縣技手ノ職責

點ニ於テハ當該被告ニ對スルト其他ノ相被告ニ對スルトニ依テ異ル所ナケレバ右判決ノ示ス所ハ本件判決ノ違法ナルコトヲ論證スルニ足ルモノト云ハサルヲ得ス而シテ右加藤忠五郎ノ罪案カ前示ノ法條ニ該ルモノナル事ハ右ノ如クナレトモ其科刑ハ刑法第六十五條第二項ニ依リ通常ノ刑ヲ科セラルヘキモノナルヲ以テ重罪事件トシテノ取扱ヲ爲スコトヲ要セサルヤノ疑ナキニ非サレトモ刑事訴訟法ニ所謂重罪輕罪トハ各犯罪ノ客觀的要素ヲ標準トシテ區別スヘキモノニシテ犯罪ノ一身ニ止マル主觀的ノ輕減ヲ以テシテハ其罪質ヲ變セスト爲スハ殆ント定說ノ歸スル所ニシテ右加藤忠五郎ノ罪案ノ如キモ刑法第六十五條第二項ニ依リ刑法第二百五十三條ノ規定セル業務上ノ横領罪ノ實行正犯タル事ハ右叙說スル所ノ如クナルヲ以テ偶〻第六十五條第二項ニ依リ其刑ヲ通常ノ刑ニ輕減スト雖モ其罪質ヲ變シテ輕罪ナリトナシ重罪ノ取扱ヲ爲スコトヲ要セスト爲スヲ得サルハ尙從來從犯ニ付テハ縱令其刑ヲ輕減セラルルモ尙總テ重罪ノ取扱ヲ爲セルト均シクセサルヘカラス果シテ然ラハ右加藤忠五郎ノ供述ハ下調手續ヲ經タル公判ニ於テセルモノナラサルヲ以テ適法ノ證據力ヲ有セサルコト明白ニシテ之ヲ援用セル原判決ハ違法ナリト信スト云フニ在リ

因テ按スルニ刑法施行法第二十九條ニ所謂「短期一年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪」トハ現ニ犯人ニ科スヘキ法定刑ノ短期カ一年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ヲ謂フモノト解スヘキヲ以テ本件公訴事實（即豫審終結決定書記載ノ事實）ノ如ク被告忠五郎ノ罪質ハ短期一年以上ノ懲役ニ該ルモ刑法第六十五條第二項ノ規定ニ依リ短期一月以上（五年以下）ノ懲役ニ處スヘキ場合ニ在リテハ他ノ法律ノ適用ニ付キ之ヲ舊刑法ノ重罪ト看做スヘキモノニアラス故ニ原審ニ於テ被告忠

五郎ニ對シ重罪下調ノ手續ヲ爲サヽリシハ正當ニシテ不法ニアラス本論旨ハ其根底ニ於テ理由ナシ

◉強盜殺人事件

明治四十五年（れ）第九七八號　明治四十五年六月十四日宣告　（棄却）

判決要旨

一、檢證調書ハ之ヲ作成スヘキ期間ニ制限ナキヲ以テ必スシモ檢證終了ノ卽日之ヲ作成スルヲ要セス故ニ第一審檢證處分ニ付キ翌日ノ檢證ト併セ其翌日ニ之カ調書ヲ作成シタレハトテ之ヲ以テ該調書ヲ違法無效ノモノト爲スヲ得ス

一、檢證圖面カ單ニ檢證調書ノ記載ヲ明瞭ナラシムルカ爲メニ作成セラレタルモノニ過キスシテ檢證ノ顚末カ該圖面ヲ要セス調書ノ記載自體ニ依リ明確ナル場合ニ於テ既ニ檢證調書ヲ被告ニ讀聞ケ檢證ノ結果ヲ被告ニ告知シ辯解ノ機會ヲ與ヘタル以上ハ別ニ圖面ヲ被告ニ示サヽルモ檢證ニ關スル

檢證調書ノ作成期間○檢證圖面ヲ示ササル證據調

證據決定ハ適法ニ施行セラレタルモノト云フヲ得ヘシ

第一審　靜岡地方裁判所　第二審　東京控訴院

被告人　正木政治　辯護人　高木益太郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第九點原判決ハ本件ノ罪證トシテ第一審裁判所ノ檢證調書ヲ採用セラレタリ然レトモ同調書ハ明治四十四年三月十日午前十一時三十分ニ檢證ヲ始メ同日午後四時三十分ニ終リタルニ拘ハラス其翌日ノ檢證トヲ併セテ同月十二日ニ作成セラレタルモノナルヲ以テ違法ナルモノト云ハサルヘカラス何トナレハ檢證調書ハ公判始末書ニ於ケルカ如ク三日內ニ整頓スヘキ規定ナキ以上ハ即日之ヲ作成スヘキ筋合ナルヲ以テ後日之ヲ作成スル如キハ無效ノモノトセサルヘカラス然ルニ原判決ハ斯ル違法ノ調書ヲ罪證ニ供シタルヲ以テ此點ニ於テ破毀ヲ免レスト云フニ在レトモ○檢證調書ハ公判始末書ノ如ク之ヲ作成スヘキ期間ニ制限ナキヲ以テ所論ノ如ク必スシモ檢證終了ノ即日之ヲ作成スルヲ要セス唯遲滯ナク作成スルヲ以テ相當トスヘキノミ然レハ三月十日ニ行ハレタル第一審檢證處分ニ付キ翌日ノ檢證ト併セ翌十二日ニ之カ調書ヲ作成シタレハトテ之ヲ以テ該調書ヲ違法無效ノモノト爲スヲ得サルカ故ニ之ヲ罪證ニ供セル原判決亦破毀セラルヘキ違法アルコトナシ

上告第十二點原審公判始末書ヲ閱スルニ原院ハ其證據決定ニ基キ檢證ヲ爲シ檢證調書ハ公廷ニ於テ被告ニ讀聞ケタル旨記載アルモ檢證圖面ハ之ヲ示シタル旨記載アルコトナシ然ラハ原院ハ證據決定ヲ適法ニ執行セサルモノナルヲ以テ之ニ因リ成立セル原判決ハ破毀スヘキモノナリトスト云フニ在リ

因テ原審公判始末書ヲ調査スルニ原院ハ右檢證圖面ヲ被告ニ示シタル旨ノ記載ナキコト所論ノ如クナルモ該檢證圖面ヲ檢證調書ニ比照鑑査スルニ右圖面ハ調書記載ヲ明瞭ナラシムルカ爲メニ作成セラレタルモノニ過キスシテ檢證ノ顚末ハ圖面ヲ要セス調書ノ記載自體ニ徵シ明確ナルカ故ニ既ニ檢證調書ヲ被告ニ讀聞ケ檢證ノ結果ヲ被告ニ告知シ辨解ノ機會ヲ與ヘタル以上ハ檢證ニ關スル證據決定ハ適法ニ施行セラレタルモノト謂ヒ得ヘキヲ以テ原判決ヲ非難スル理由ト爲スニ足ラヌ

◉僞證教唆并附帶私訴事件

明治四十五年(れ)第一〇四七號
明治四十五年七月八日判決（棄却）

判決要旨

一、私訴ノ裁判ニハ假執行ノ宣言ヲ附ス可ラス

一、審問手續ニ違法ノ點アリテ其ノ公判無効ニ歸スルモ之レニ僞證シ又ハ僞證ヲ教唆シタル者ハ僞證又ハ僞證教唆罪ヲ構成ス

說明

私訴ノ判決ト假執行ノ宣言。假執行ハ判決ノ未タ確實セザル以前ニ判決ノ效力ヲ發動セシムル例外的行爲ナルヲ以テ苟モ之レカ宣言ヲ爲サンニハ特ニ之ヲ許シタル法律ノ明文アルヲ要ス私訴ノ裁判ニ付テハ刑事訴訟法末タ之ヲ許シタル明文ナキヲ假執行ノ宣告ハ私訴ノ判決ニ付キ爲ス可ラサルヲ知ルヘシ僞證罪ノ成立。僞證罪ハ虛僞ノ陳述ヲ以テ裁判ヲ誤マラシムルソ所爲ニアラス

シテ判事ノ推問ニ對シ良心ニ背キ陳述ニ爲スノ所爲ナリ僞證罪カ若シ裁判ヲ誤マラシムルモノトシテ之ヲ罰スルモノナラハ僞證ノ爲メ誤判ノ結果ヲ生スルニアラサレハ之ヲ處罰スルヲ得スト雖モ僞證ハ單ニ判事ノ推問ニ對シ良心ニ背キ

虚僞ノ陳述ヲナスノ罪ナルカ故ニ被告ニ虚僞ノ陳述タニ存セハ其ノ結果誤判ヲ來スト否ト又タ其ノ公判カ手續ニ違法アリシ爲メ無效ニ歸スルト否トヲ不論僞證罪ハ茲ニ完成スルモノトス

僞證罪ノ所謂虚僞ノ陳述トハ良心ニ背クノ陳述ヲ云フ良心ニ背クノ陳述ハ過々眞ノ事實ニ適合スルモ虚僞ノ陳述タルヲ失ハス又タ良心ニ從フノ陳述ハ假ヘ眞ノ事實ニ符合セサルモ尚ホ眞ノ陳述タルヲ失ハス則チ僞證罪ニ關シ被告ノ陳述ノ眞僞ノ因テ分ル、所ハ一ニ其ノ陳述カ被告ノ良心ニ背クト然ラサルトニ在リ若シ夫レ眞僞ヲ分ツノ標準ヲ人ノ良心ニ求メス之ヲ絶對的眞否ニ求メ苟モ眞ノ事實ニ符合セサルヲ以テ恐ク之ヲ虚僞ノ陳述ナリトセンカ今日ニ於ケル吾人々類ハ能力ヲ以テシテハ之レ實ニ難キヲ人ニ攻ムルモノニシテ其ノ不當ナルコト多言ヲ待タスシテ明カナリ元來僞證ノ所謂「僞」ナル文字ノ意義ハ眞實ニ符合セサルヲ意味スルニアラスシテ自己ノ良心ニ背クノ行動ヲ意味スルモノナリ眞實ニ符合セサルノ行爲ハ唯其ノ行爲カ眞實ニ適合セサルト云フニ止マリ虚僞ニアラサルナリ良心ノ感應スル處己ニ茲ニアリトセハ其ノ言行ヤ實ニ公明正大ニシテ天地ニ恥ナシ然レトモ良心已ニ然リト感知スルニ拘ラス故ラニ之ヲ曲言シ其ノ反對ニ陳述スルニ至テハ假令其ノコト却テ眞實ニ符合ストスルモ其ノ陳述ヤ實ニ良心ニ背クノ言行ニシテ人道ノ許サヽル所トス僞證罪ノ所謂「僞」ナルモノ於茲乎始メ之レアリト云フヘシ世ノ俗輩動モスレハ僞證罪ノ本義ヲ知ラス被告ノ爲シタル虚僞ノ陳述カ裁判ニ影響スルナキヲ理由トシテ罪責ノ免脱ヲ計ラントスルモノアレハ余輩ノ常ニ遺憾トスル所ナリ依テ茲ニ一言ス

被告人　竹内幸吉

判決

本件上告ハ之ヲ破毀ス

理由

上告論旨第三點原判決ハ其ノ主文末段ニ於テ民事原告人藤三郎ニ於テ保證金二十圓ヲ立ツルニ於テハ第二項ニ限リ民事原告人とめニ於テ保證金五百圓ヲ立ルニ於テハ第三項ニ限リ假リニ之ヲ執行スルコトヲ得ト宣示セラレタリ然レトモ現行刑事訴訟法中私訴判決ニ假執行ノ宣言ヲ附スル旨ノ規定ノ存スルナク又民事訴訟法第五百三條ヲ適用又ハ準用スルノ規定ダモナシ然ラハ則チ原判決ハ法律ヲ不當ニ適用シタル不法ノ裁判タルヲ免カレスト云フニアリ

因テ按スルニ刑事訴訟法中公訴附帶ノ私訴判決ニ假執行ノ宣言ヲナスコトヲ許容シタル規定ナク又假執行ノ宣言ニ關スル民事訴訟法ノ規定ヲ準用スヘキコトヲ命シタル規定ナシ刑事訴訟法第三百二十三條ハ已ニ確定シタル判決ノ執行ニ關シ民事訴訟法ノ規定ニ從フヘキコトヲ規定シタルニ過キサルヲ以テ私訴判決ニハ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ得サルモノトス然レハ該宣言ヲ爲シタル原審ノ私訴判決ハ不法ニシテ論旨ハ理由アリ原判決中私訴上告人增本藤次郎ニ關スル部分ハ此點

ニ於テ破毀ヲ免レス

上告論旨第四點、被告春吉辯護人山本周輔上告趣意書ハ原院判決カ被告竹内春吉ノ僞證教唆罪ト
シテ認定シタル事實ハ同人カ森本鶴吉山内彌三郎ノ兩名ニ僞證センコトヲ承諾セシメ明治四十四
年三月十六日被告春吉ニ對スル過失致死傷被告事件ニ付證人トシテ神戸地方裁判所刑事部公延ニ
於テ宣誓ヲ爲シタル右兩人ヲシテ虚僞ノ陳述ヲ爲サシメタリト云フニ在リテ正犯森本山内ノ僞證
罪ノ成立ヲ認メ從テ被告春吉ノ教唆罪ヲ認定セルモノナリ然ルニ右被教唆者森本山内兩名ノ僞證
罪ヲ犯セリトノコトハ明治四十四年三月十六日ノ公判即チ原院判決ニ所謂原審(神戸地方裁判所)
ノ第二回以後ノ公判ニ屬スル違法且無效ノ公判審理中ニ生シタル事實ナルコト記錄上明カニシテ
而カモ該公判審理ノ違法且ツ無效ナルコトハ本被告事件ニ對スル前上告ニ於ケル大審院ノ判決ニ
依リ確定セラレタル唯一ノ事實ニ係リ又原院カ其公判審理ヲ違法ナリト認メタルハ刑事訴訟法第
二百十八條ニ基ク檢事ノ陳述ヲ聽カスシテ直ニ被告人乃至證人ヲ訊問シタルモノナルカ故ニ此等
ノ審理手續ハ刑事訴訟法上ノ口頭辯論主義ニ反スル全然無效ノ手續ナリト認メタルモノナルコト
明瞭ナレハ其所謂違法無效ノ審理ニ屬スル證據調ニ於ケル森本山内兩名ノ爲シタル宣誓乃至陳述
ハ法律ニ所謂宣誓シタル證人ノ僞證ニ非サルコト勿論ナルニ自ラ違法ナリトシ且上級裁判所カ全
然無効ト認メタル證據ニ付キ僞證罪ノ成立ヲ認メ從テ被告春吉ニ僞證教唆罪ノ成立ヲ認メタルハ
事實理由ノ齟齬アルノミナラス正犯ノ成立スヘカラサル場合ニ強テ正犯ヲ認メ從テ其教唆犯ノ成
立ヲ認メタル違法ノ裁判ナリトスト云フニ在リ

因テ案スルニ僞證罪ハ法律ニ依リ宣誓シタル證人虚僞ノ陳述ヲ爲スニ因リテ成立スルモノニシテ
刑事被告事件ニ關シ刑事訴訟法ノ規定ニ從ヒ裁判所ニ於テ宣誓シタル證人ハ即チ法律ニ依リ宣誓
シタル證人ナルヲ以テ其證人カ虚僞ノ陳述ヲ爲スニ於テハ僞證罪ヲ構成スルモノトス而シテ偶被
告事件ノ公判手續ニ違法ノ廉アリテ其公判ノ無效ヲ來タスコトアルモ僞證罪ノ成立ヲ妨クルモノ
ニアラス原判決ノ認定シタル事實ニ依レハ被告春吉ハ過失致死傷ノ責任ヲ免レントト欲シ山内彌三
郎及松本鶴吉事森本鶴吉ニ對シ裁判所ニ於テ訊問セラルル時ハ春吉ハ右鶴吉ニ對シ塵埃ヲ海中ニ
捨テヨト命シタル旨虚僞ノ申立ヲ爲シ呉ルヘキ旨懇請シ彌三郎及鶴吉ニ之ヲ承諾セシメ被告春吉
ニ對スル過失致死傷被告事件ニ付證人トシテ神戸地方裁判所刑事第二部公延ニ出頭宣誓ヲ爲シタ
ル右兩人ヲシテ該懇請ノ通リ虚僞ノ陳述ヲ爲サシメタルモノナルヲ以テ縱令同裁判所ノ公判ハ檢
事ノ陳述ヲ聽カスシテ進行シタル違法アリテ無效ニ屬スルモ之ガ爲メ彌三郎及鶴吉ノ僞證罪及被
告春吉ノ僞證教唆罪ノ成立ヲ阻礙スルモノニアラス故ニ原審ニ於テ同裁判所ノ公判ハ檢事ノ陳述
ヲ聽クコトナクシテ爲シタル失當アリト認メナカラ被告ノ所爲ヲ僞證教唆罪ニ問擬シタルハ不法
ニアラス

◉詐欺取財事件

明治四十五年(れ)第一二六六號 明治四十五年七月十六日判決 (棄却)

判決要旨

一、刑法第二百四十八條ノ所謂心神耗弱トハ全然意思能力ヲ喪

刑法第二百四十八條ノ適用

失スルニ至ラサルモ精神ノ健全ヲ缺キ事物ノ判斷ヲ爲スニ充分ナル知能ヲ具ヘサルヲ云フ

一、刑法第二百四十八條ノ犯罪ヲ構成センニハ詐欺又ハ恐喝ニ因ラス單ニ被害者ノ心神耗弱ノ狀態カ利用セラレテ財物ヲ騙取スルニ依テ成立ス

被告人　安達新市外三名

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

刑法第二百四十八條ハ人ノ心神耗弱ニ乘シテ其ノ財物ヲ交付セシメタルモノハ云々ト規定シ其ノ心神耗弱ノ程度ヲ直接法文ニ明示セスト雖モ本罪ヲ詐欺及恐喝ノ罪ノ一章ニ網羅セシ趣意ヨリ見ルモ其ノ所謂心神耗弱トハ欺罔又ハ恐喝ヲ要セスシテ人ニ乘セラルルニ足ルヘキ程度ノモノナラサルヘカラサルコトハ自明ノ法意ナリト信ス果シテ然ラハ當該被害者ノ心神耗弱ノ程度カ本罪ヲ構成スルニ足ルモノナリヤ否ヤハ法律適用ノ範圍ニ屬スヘキモノト信ス然ルニ原審カ認メテ以テ斷罪ノ資料ニナシタル此ノ點ノ證據ニヨレハ巡査渡邊松三郎美田松太郎ノ犯罪報告者ニ吉岡重一

郎ハ性質恐怯ニシテ心神耗弱シ居リ云々トアル點竝ニ重一郎ノ父タル吉岡藤次郎ノ豫審調書中同人ハ普通人ヨリ智慮足ラス至テ魯鈍ナルモノナリトノ陳述トニ過ギサルガ如シ右何レモ人ノ意見ニシテ嚴格ナル意味ニ於ケル證據トナスニ足ラサルノミナラス假リニ然リトスルモ原院カ少クトモ同人カ欺罔又ハ恐喝ヲ要セスシテ容易ニ人ニ乘セラルヘキ心神耗弱ノ程度ニアルモノナルコトヲ他ニ判示セサル以上ハ右證據ノ表明スル處ノミニテハ到底右ニ述ヘタル刑法第二百四十八條ノ適用ヲ受クヘキ心神耗弱者ナリト認ムルニ足ラサルモノトス（實際ニ於テハ重一郎ハ當時居村ノ衛生世話係ナリキ）然ルニ原院カ此ノ程度ニ於テ同條ヲ適用處斷セシハ違法ノ裁判ナリト信スト云フニ在リ

按スルニ刑法第二百四十八條ニ所謂心神耗弱トハ全然意思能力ヲ喪失スルニ至ラサルモ精神ノ健全ヲ缺キ事物ノ判斷ヲ爲スニ充分ナル普通人ノ知能ヲ具ヘサル狀態ヲ謂フモノニシテ同條ノ犯罪成立スルニハ詐欺又ハ恐喝ニ因ラスシテ被害者ノ如上精神狀態カ利用セラルルコトヲ要ス故ニ所揭原判決證據說明中「性質恐怯ニシテ心神耗弱シ云々」若クハ「普通人ヨリ知慮足ラス至テ魯鈍ナル者ナリ云々」トアルハ孰レモ被害者ノ精神狀態カ普通人ト比較スレハ劣等ニシテ事物ノ利害得失ヲ判斷スルニ適當ナル知能ヲ有セス他人ノ爲メニ利用セラルル處アリトノ趣旨ニ歸スヲ以テ原判決カ右證據ニ依リテ刑法第二百四十八條ノ規定ニ該當スヘキ心神耗弱ノ事實ヲ認定セルハ相當ナルノミナラス實驗ニ因リ得タル智識ヲ根柢トセル意見ハ之ヲ證言トシテ採用スルニ毫モ妨アルコトナケレハ論旨ハ理由ナシ

●誣告及僞證事件

明治四十五年(れ)第一三〇三號 大正元年八月六日判決（棄却）

判決要旨

一、人ヲ誣告シ且ツ其被告事件ノ豫審又ハ公判ニ於テ誣告ト同一趣旨ノ僞證ヲナスハ誣告罪ノ外別ニ僞證罪ヲ構成ス、

僞證ノ所爲ハ誣告ノ結果ヲシテ當然誣告ノ所爲ニ包含セラルヽモノトシテ一罪ヲ以テ處斷スヘキモノニ非ス

被告人　野上庄太郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告理由ノ第三點原判決ニ於テ被告ニ對シ第一誣告罪ノ成立ヲ認定シ第二僞證罪ノ成立ヲ認定セラレタリ而シテ其所謂僞證トシテ認メラレタル事實ハ即チ被告カ湊榮次郎ニ對シ誣告ヲ爲シタリト認メラレタル第一事實ノ告訴ニ關シ證人トシテ訊問ヲ受ケタル際右告訴事實ト同趣旨ノ供述ヲ爲シタリト云フニ在レハ是レ全ク前ノ誣告ノ結果トシテ之ヲ見ルヘク敢テ別罪ヲ構成スヘキモノニアラス凡ソ何人モ自己ノ犯罪ヲ自白スヘキ事ヲ强要セラルヘキ責務ナキコトハ蓋シ當然ノ筋合

リ左レハ假リニ判示ノ如ク被告カ既ニ榮次郎ヲ誣告シタルモノナリトセハ其牽連シテ證人ト爲リ該告訴事實ト同趣旨ノ供述ヲ爲シ以テ自己ノ犯罪ヲ隱蔽セントスルハ素ヨリ人情自然ノ結果ニシテ此場合ニ於テ前ノ告訴ハ誣告ニ出テシモノナル事ヲ自白セン事ヲ法律上强要スヘキモノニ非ス從テ斯クノ如キ事情ノ下ニ前ノ誣告ト同一ノ事實ヲ供述スル事ハ單ニ誣告ノ所爲ノ延長ニ過キスシテ更ニ僞證罪ヲ構成スヘキモノニ非サルニ原判決ハ之ヲ別個獨立犯罪トシテ併合罪ノ法條ヲ適用シタルハ擬律錯誤ノ違法アリト思料スト云フニ在リ

按スルニ本件ニ於ケル如ク刑事ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ虛僞ノ事項ヲ構ヘ他人ヲ官ニ申告セル被告ノ行爲ト右申告ノ結果他人カ被告人トシテ取調ヲ受クルニ際シ其證人トシテ宣誓ノ上前揭申告セル事實ト同一趣旨ノ證言即チ虛僞ノ事實ヲ供述シタル被告ノ行爲トハ全然別個ノ行爲ニシテ其侵害スル法益ニ合致スル所アルモ全然同一視スヘキモノニ非スシテ各別個ノ罰條ニ觸ルルモノナルカ故ニ右二個ノ行爲ハ各獨立ノ犯罪ヲ構成スルモノトス從テ原判決カ被告ニ對スル誣告及僞證ノ所爲ヲ以テ別個獨立ノ犯罪ヲ構成スルモノトシ被告ヲ處斷シタルハ相當ニシテ本論旨ハ理由ナシ

●傷害事件

明治四十五年(れ)第一〇一三號 明治四十五年六月二十日判決（破毀）

判決要旨

一、情夫カ意恨ヲ以テ情婦ノ毛髮ヲ切斷シタル所爲ハ暴行罪ヲ

人ノ毛髮ヲ切斷シタル者ノ處分

以テ問擬スヘク傷害罪ヲ以テ問擬スヘキモノニアラス

説明 判文摘示

按スルニ刑法第二百四條ノ傷害罪ハ他人ノ身體ニ對スル暴行ニ因リテ其ノ生活機能ノ毀損即チ健康狀態ノ不良變更ヲ惹起スルコトニ因テ成立スルモノニシテ毛髮鬚髯ノ如キハ毛根ヲ身體ニ寄託シ其ノ外表ニ發生シ以テ其ノ保護裝飾ノ作用ヲ爲スカ故ニ身體ノ一部トシテ法ノ保護スル目的タルコトヲ失ハスト雖モ不法ニ之ヲ截斷シ若クハ剃去スル行爲ハ之ヲ以テ直チニ健康狀態ノ不良變更ヲ來シタルモノト謂フヲ得ス從テ刑法第二百四條ヲ以テ處斷スヘキ傷害罪ニ該當セス唯傷害ノ結果ヲ生セシメサリシモノナレバ刑法第二百八條ノ暴行罪ヲ以テ之ヲ處斷スルヲ相當トス

（參照）暴行ヲ加ヘタル者人ヲ傷害スルニ至ラサルトキハ一年以下ノ懲役若クハ五十圓以下ノ罰金又ハ拘留若クハ科料ニ處ス（刑法第二百八條第一項）

第一審 甲府地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 水上卯一 辯護人 渡邊澄也

右傷害被告事件ニ付明治四十五年四月十九日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ原審辯護人渡邊澄也ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スルコト左ノ如シ

判決

原判決ハ之ヲ破毀ス

被告卯一ヲ懲役三月ニ處ス

但シ三年間刑ノ執行ヲ猶豫ス

押收物件中剃刀ハ之ヲ沒收シ其他ハ所有者ニ還付ス

理由

辯護人渡邊澄也上告趣意書ハ刑法第二百四條ニ所謂傷害トハ身體ニ於ケル生理的狀態ヲ不良ニ變更スルヲ指稱スルカ故ニ身體ノ內部若クハ外部ニ於テ毫モ生理的狀態ヲ變更スルコトナキ頭髮鬚髯ノ切斷ノ如キハ傷害ヲ以テ論スルコトヲ得ス元來人ノ眉毛鬚髯ノ剃去婦女ノ頭髮ノ切斷ノ如キハ其人ニ對スル一種ノ暴行又ハ侮辱ニ外ナラスシテ傷害ニ非サルコト勿論ナルモ此等ノ所爲ヲ不問ニ付スルハ公ノ秩序善良ノ風俗ニ反シ其弊害尠少ナラサルヲ以テ舊刑法ニ於テハ之ヲ以テ毆打創傷ナリト解釋シタル學者アルニ至リシモ素ヨリ正當ナル論斷ニ非ス然ルニ新刑法ニ於テハ傷害罪（第二百四條）ト傷害ニ至ラサル暴行罪（第二百八條）トヲ區別シテ規定スルヲ以テ此等ノ所爲ヲ以テ強イテ傷害罪ヲ構成スルモノト解釋スルノ必要ヲ認メサルモノトシ原判決ハ「被告ハ居村日原キクノト慇懃ヲ通シタル所同人ハ突然他ニ婚嫁スルコトトナリタルヲ以テ被告ハ其無情ヲ憤リ云云所持ノ剃刀ヲ以テ同人ノ頭髮ヲ根元ヨリ切斷シタリ」ト認定セルヲ以テ被告ハ日原キクノ頭髮ヲ切斷シタルニ止マリキクノハ毫モ身體ニ生理的變化ヲ生シタル事實ナケレハ決シテ傷害罪ヲ構成スヘキモノニ非ス然ルニ輙スク刑法第二百四條ヲ問擬シタル原判決ハ擬律錯誤ノ不法ア

人ノ毛頭ヲ切斷シタル者ノ處分

ルモノト信スト云フニ在リ

按スルニ刑法第二百四條ノ傷害罪ハ他人ノ身體ニ對スル暴行ニ因リテ其生活機能ノ毀損即チ健康狀態ノ不良變更ヲ惹起スルコトニ因リテ成立スルモノニシテ毛髮鬚髯ノ如キハ毛根ヲ身體ノ內部ニ寄託シ其外表ニ蔕生シ以テ其保護裝飾ノ作用ヲ爲スカ故ニ身體ノ一部トシテ法ノ保護スル目的タルコトヲ失ハスト雖モ不法ニ之ヲ截斷シ若クハ剃去スル行爲ハ之ヲ以テ直チニ健康狀態ノ不良變更ヲ來シタルモノト謂フヲ得ス從テ刑法第二百四條ヲ以テ處斷スヘキ傷害罪ニ該當セス然レトモ右行爲カ身體ノ一部ニ對スル不法侵害タル暴行ナルコトハ之ヲ爭フノ餘地存セス唯傷害ノ結果ヲ生セシメサリシモノナレハ刑法第二百八條ノ暴行罪ヲ以テ之ヲ處罰スルヲ相當トス原判決ノ認定セル事實ハ寔ニ論旨所揭ノ如クニシテ被告ハ不法ニ剃刀ヲ以テ婦女ノ頭髮ヲ切斷シタリト云フニ在リテ其結果身體ノ健驗狀態ニ不良ノ變更ヲ生セシメタル事實ノ判示ナキ以上ハ被告ノ行爲ハ人ノ身體ヲ傷害シタルモノニ非ス唯人ノ身體ニ對シテ暴行ヲ爲シタルニ過キス故ニ被告ノ行爲ハ刑法第二百八條ヲ以テ問擬スヘキモノトス然ルニ原判決ハ前揭判示事實ヲ認メテ刑法第二百四條ヲ適用シ之ヲ處斷シタルハ擬律錯誤ノ違法アルモノニシテ本論旨ハ理由アリ

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第三百八十六條第二百八十七條ニ從ヒ原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ直チニ判決スヘキモノトス因テ原判決ノ認メタル被告ノ行爲ヲ以テ之ヲ法律ニ照スニ刑法第二百八條第一項ニ該當スル所本件ハ同條第二項ニ依リ告訴ヲ待ツテ其罪ヲ論スヘキ事案ナルヲ以テ右告訴ノ有無ヲ按スルニ記錄中日原（キクノ）ニ對スル司法警察官聽取書ノ末尾（第八丁裏面）ニ

宇一（被告卯一ヲ指ス）ハ眞ニ惡ムヘキモノナレハ相當ノ處分ヲ請求スル旨ノ記載アルニ徵シテ被害者カ當該官ニ對シ告訴ノ意思ヲ表示シタル事實ヲ認ムルニ足ル因テ被告ノ行爲ニ對シテ前示處罰法條ヲ適用シ懲役刑ヲ選擇シテ被告ヲ三月ノ懲役ニ處シ而シテ情狀ニ因リ刑法第二十五條ニ依リ三年間刑ノ執行ヲ猶豫スヘク押收物件中剃刀ハ同法第十九條ニ從ヒ之ヲ沒收シ其他ハ刑事訴訟法第二百二條ニ依リ之ヲ所有者ニ還付スヘキモノトス因テ主文ノ如ク判決ス

檢事林賴三郎干與明治四十五年六月二十日大審院第二刑事部

◉選擧法違犯事件

明治四十五年(れ)第一〇九七號
明治四十五年六月二十日宣告（棄却）

判決要旨

一、縣會議員ノ選擧ニ當選センカ爲メ數十名ノ選擧人ニ金品ヲ供與シ又ハ供與センコトヲ申込ミタル場合ニ於テ其數十名中現ニ分配供與ヲ受ケタル者ト單ニ供與スヘキコトノ申込ヲ受ケタル者トハ孰レモ同一罪名ニ觸ルルモノナレハ判文ニ其ノ氏名ヲ兩樣ニ區別セサレハトテ罪トナルヘキ事實ノ認定ニ缺クル所ナシ

同一罪名ニ觸ルル行爲ノ判示方

第一審　名古屋地方裁判所岡崎支部　第二審　名古屋控訴院

被告人　宇野專一郎　辯護人　中島松次郎

右選擧法違反被告事件ニ付明治四十五年四月十二日名古屋控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スル左ノ如シ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

辯護人中島松次郎上告趣意書第一點原判決ノ旨趣ハ要スルニ被告專一郎ハ明治四十四年九月二十五日擧行ノ愛知縣會議員選擧ニ付キ同縣東加茂郡選出議員ノ候補者トナリ被告專吉義和幸一郎ハ專一郎ノ爲メニ選擧運動ニ從事中反對候補者ト競爭激甚トナリショリ被告等四名ハ同年九月中旬被告專吉ハ其會計主任トナリ同月中旬ヨリ下旬ニ至ル間ニ同事務所ニ於テ數回ニ運動費及買收費トシテ金員ヲ運動者宇井鍵太郎宇井長五郎鈴木柘清澤田梅治加藤東八ニ交付シ而シテ被告四名ハ是等ノ者ヲシテ直接又ハ下運動者近藤桑三郎等ヲ使役セシメテ同郡加茂村阿摺村盛岡村ニ於テ其當時右金ノ内數十圓ヲ選擧有權者河合鈴太郎數十名ニ一票ニ付キ金二十錢乃至一圓ヲ分配供與シ又ハ金員ヲ供與スヘキニ依リ專一郎ヲ投票シ吳レ度旨申込マシメ以テ多數投票ヲ買收シ遂ニ專一郎ハ當選シタルモノナリト云フニ在レドモ其選擧有權者數十名トハ何人ナリヤ又何人ニ對シ金圓ヲ供與スヘク申込ヲ爲シタリヤ之ヲ明示セサルガ故ニ其供與ヲ受ケ若クハ申込ヲ受ケタルモノハ

果シテ選擧有權者ナリヤ否ヤ之ヲ知ルニ由ナシ從テ原判決ハ理由不備ノ不法アリト云フニ在リ

○原判決ノ判示事實ハ洵ニ論旨ニ掲クル所ノ如シ然レトモ被告專一郎カ愛知縣會議員選擧ニ付キ同縣加茂郡選出議員ノ候補者トナリ被告專吉義和幸吉ハ專一郎ノ爲メ運動ニ從事中被告等四名ハ投票買收ノ手段ヲ取ルヘク謀議シ結局運動者ヲシテ選擧有權者河合鈴太郎外數十名ニ一票ニ付金二十錢乃至一圓ヲ分配供與シ又ハ金員ヲ供與スヘキニ依リ專一郎ヲ投票シ吳レ度申込マシメ以テ多數投票ヲ買收シタル事實ノ判示アル以上ハ右數十名ノ氏名ヲ明示セサルモ皆選擧有權者タルコトハ判文上自明ノ事項ニ屬シ又數十名中現ニ分配供與ヲ受ケタル者ト單ニ供與スヘキコトノ申込ヲ受ケタル者トヲ區別シテ其氏名ヲ明示セサルモ該行爲ハ孰レモ府縣制第四十條衆議院議員選擧法第八十七條第一項第一號刑法施行法第十九條第一項第二條第二十條ニ該當スル同一罪名ニ觸ルルモノニ外ナラサルヲ以テ罪トナルヘキ事實ノ認定トシテ缺クル所ナキカ故ニ原判決ニハ所論ノ如キ違法アルコトナシ

◉森林竊盜竝附帶私訴事件

明治四十五年(れ)第一一〇號　明治四十五年六月二十日宣告（棄却）

判決要旨

一、檢證調書ニ證人又ハ被告人ノ訊問供述ヲ錄取スルモ之ヲ供述者ニ讀聞ケ署名セシメサルトキハ其ノ調書ハ無效ニ歸ス

檢證調書一部ノ無效○檢證調書ノ作成時期

ト雖モ單ニ其讀聞ケサル部分ノ無效ナルニ止マリ調書全體ノ無效ヲ來スモノニ非ス

一、檢證處分數日ニ渉ルトキハ檢證調書ハ必スシモ檢證ノ進ムニ從フ時々ニ作成スルコトヲ要セス檢證終了シタル後全部ノ調書ヲ一時ニ作成スルモ不法ニ非ス

第一審　東京地方裁判所
公訴私訴上告人　中澤清平

第二審　東京控訴院
辯護人　高木益太郎

私訴被上告人　國ノ代表者　横瀬傳八郎

右森林竊盜被告事件竝ニ之ニ附帶スル私訴事件ニ付明治四十五年四月二十九日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ公私訴ニ付キ上告ヲ爲シタリ因テ判決スル左ノ如シ

判決

本件公私訴ノ上告ハ共ニ之ヲ棄却ス

私訴上告費用ハ私訴上告人ノ負擔トス

理由

被告辯護人高木益太郎公私訴上告趣意書第一點原判決ニ援用シタル檢證調書ヲ査閲スルニ「明治四十四年十一月二十三日宇都宮地方裁判所書記渡邊木與之助ト共ニ中澤清平中澤鍋藏森林竊盜事件ニ付キ栃木縣安蘇郡飛駒村ニ出張ノ上森林主事介川兼吉及被告兩名竝ニ其他ノ關係人ヲ立會ノシメ檢證ヲ爲ス……豫審判事ハ檢證ニ先チ森林主事介川兼吉ニ對シ昨年中侵伐サレタリト云フ場所ハ何レナリヤヲ尋ネタルニ同人ハ別紙檢證圖面ニ示セル(イ)ヨリ(ロ)(ロ)ヨリ(ハ)(ハ)ヨリ(イ)ニ至ル區域内ヲ指示シ該區域内ニ生立セル樹木ハ全部盜伐サレタルモノナル旨申立テタリ於是豫審判事ハ同樣林主事ニ對シ國有林ト民有林トノ境界ハ何レナリヤヲ尋ネタルニ同人ハ檢證圖面ニ示セル(イ)ヨリ(ロ)ニ至ル直線ヲ指示シ該直線ノ左方ハ安蘇郡飛駒村字西穴切國有林ニシテ其右方ハ即チ足利郡菱村大字菱字穴切民有地ナル旨申立テタリ……依テ其指示シタル境界ナリト云フ場所ヲ檢スルニ云云……豫審判事ハ被告兩名ニ對シ前森林主事介川兼吉ノ指示シタル侵區域ヲ示シ該區域内ノ樹木ハ伐採シタルニ相違ナキヤヲ否ヤ尋ネタルニ被告兩名ハ該區域内ノ樹木ハ全部伐採シタルニ相違ナキモ盜伐シタルニ非ス龜山竹三ヨリ買受ケ伐採シタル旨申立テタル……同月四日……前同所ニ出張森林主事介川兼吉被告兩名其他ノ關係人ヲ立會ハシメ……豫審判事ハ前日ニ引續キ檢證ヲ續行スヘキ旨ヲ告ケ……先ツ證人介川兼吉ニ對シ被告等ノ爲メ盜伐サレタリト云ヲ樹木ノ伐痕ハ何レナルヤヲ尋ネタルニ同人ハ別紙檢證圖面ニ示セル(イ)ヨリ(ロ)(ロ)ヨリ(ハ)(ハ)ヨリ(イ)ニ至ル區域内ニアル一號乃至千四十二號ノ各伐痕ヲ指示シ該伐痕ハ何レモ盜伐サレタルモノナル旨申立テタリ依テ其指示シタル伐痕ヲ檢スルニ云云……豫審判事ハ被告人中澤鍋藏ニ對シ伐採シタル樹木ヲ製炭シタル場所ハ何レナリヤヲ尋ネタルニ同人ハ別紙檢證圖面ニ示

セル(二)ノ場所ニ在ル炭竈ヲ指示シ該炭竈ニ於テ製炭シタル旨申立テタリ依テ之ヲ檢スル云云：右檢證中諸般ノ取締上栃木縣巡査山下吉三郎ヲ立會ハシメタリ」ノ記載アル之ニ由リテ見ルトキハ右檢證ハ森林主事介川兼吉以下ヲ立會ハシメテ之ヲ訊問シ其供述ニ基キテ之ヲ爲シタルモノナル事明ナリ左レハ該檢證調書ヲ作成スルニ當リテ之ヲ右ヲ右供述ヲ爲シタル者ニ讀聞ケ相違ノ有無ヲ問ヒ右調書ニ署名セシメサル可ラサルモノナルニ拘ハラス此手續ヲ爲スコトナカリシヲ以テ右檢證調書ハ法律上全ク無效ノモノナリトス從テ之ヲ援用シタル原判決ハ違法ニシテ破毀ヲ免レサルモノトスト云フニ在リ

因テ按スルニ檢證調書ニ證人又ハ被告人ノ訊問供述ヲ錄取シタルトキハ其部分ノ供述ヲ爲シタル者ニ讀ミ聞ケ署名セシムルコトヲ要ス然レトモ其手續ヲ履踐セサルトキハ其供述ヲ錄取セル部分ノ無效ナルニ止マリ檢證調書全體ノ無效ヲ來スモノニ非ス記錄ヲ查スルニ豫審判事ノ檢證調書ニハ論旨ニ揭クル如キ記載アリテ證人又ハ被告人ニ其訊問供述ノ部分ヲ讀聞ケ署名セシメタル事蹟ナキモ原判決ハ該檢證調書中其供述記載ヲ援用シタルニ非スシテ其他ノ部分ヲ援用シタルモノナレハ採證上違法ノ廉ナク論旨ハ理由ナシ

第三點被告人ノ訊問調書ハ證人被告人ノ供述ヲ聽クニ從テ錄取スヘキモノナルヲ以テ其訊問ト同時ニ作成スルニ非サレハ無效ナリ此理論ヲ檢證調書ニ適用センカ檢證調書ハ判事カ直接見聞シタル事項ヲ見聞スルニ從テ錄取スヘキモノナルヲ以テ檢證ト同時ニ作成スルニ非サレハ無效ナリト云ハサル可ラス今原判決ニ援用セラレタル豫審判事ノ檢證調書ヲ查閱スルニ判事ノ檢證ハ明治四

十四年十一月二十三日ヨリ同月二十五日ニ亘リテ爲サレ而カモ時ニ依リ立會關係ヲ異ニシタルニ拘ラス同調書ハ同二十五日ニ始メテ作成セラレタルモノナルヲ以テ右檢證調書ハ法律上無效ノモノナリトス從テ之ヲ罪證ニ供シタル原判決ハ破毀ヲ免レサルモノトスト云フニ在レトモ◎檢證調書ハ必スシモ檢證ヲ遂クルニ從テ之ヲ作成スルコトヲ要セス檢證數日ニ亘ルトキハ立會人ノ同一ナルト否トニ拘ハラス檢證處分ヲ終了シタル後之ヲ作スルモ不法ニアラサレハ論旨ハ理由ナシ

◉放火教唆詐欺事件

明治四十五年(れ)第九八二號
明治四十五年六月二十一日宣告　(破毀)

判決要旨

一、裁判所カ受命判事ニ於テ檢證ノ必要上隨時證人ヲ訊問スヘキ旨ノ決定ヲ爲シ受命判事カ之レニ基キ證人ノ訊問ヲ爲シタル場合ニ其後ノ公判ニ於テ右訊問調書ヲ顯出シテ之カ取調ヲ爲ササルハ違法ナリ

第一審　廣島地方裁判所　第二審　廣島控訴院
被告人　村上熊助　辯護人　澤田薰　末紫彌次郎

右放火教唆詐欺被告事件ニ付明治四十五年四月十九日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被

告ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スル左ノ如シ

判決

原判決ヲ破毀シ事件ヲ大阪控訴院ニ移ス

理由

辯護人澤田薫同末繁彌次郎上告趣意書第一點記錄ヲ査閲スルニ原審第二回公判ニ於テ裁判所ハ判事石井清美ヲ受命判事トシ職權ヲ以テ受命判事ニ於テ檢證ノ必要上隨時證人ヲ訊問スヘキ旨ノ決定ヲ言渡シ受命判事ハ此決定ニ基キ明治四十四年十月七日檢證ノ現場ニ於テ證人安保俊三ヲ訊問シ訊問調書ヲ作成シ裁判所ニ提出シタリ然ルニ原審其後ノ公判ニ於テハ右安保俊三訊問調書ヲ公判ニ現出シテ之カ取調ヲ爲シタル事跡ノ徵スヘキモノ記錄中ニ存在セス則チ原裁判所ハ其決定シタル證據調ヲ適法ニ履踐セサルモノニシテ訴訟手續上重大ナル違法アリ原判決ハ破毀ヲ免レサルモノナリ（御院明治四十四年(れ)第五二一號同年四月十七日刑事第二部判決參照）ト云フニ在リ

○依テ記錄ヲ査スルニ原院カ受命判事石井清美ニ於テ檢證ノ必要上隨時證人ヲ訊問スヘキ旨ノ決定ヲ言渡シタルコト右受命判事ハ該決定ニ基キ檢證ノ現場ニ於テ證人安保俊三ヲ訊問シ其訊問調書ヲ作成シ原院ニ之ヲ提出シタルコト然ルニ原院其後ノ公判ニ於テ右訊問調書ヲ公判ニ顯出シテ其取調ヲ爲シタル事跡ナキコト等總テ論旨ニ謂フ所ノ如シ然ラハ則チ原院ハ其決定シタル證據調ヲ適法ニ執行セサルモノニシテ即チ原院公判ハ重要ナル證據調ノ手續上違法アルモノナリ從テ右公判ニ基キテ爲シタル原判決モ亦違法ニシテ破毀ヲ免レサルモノトス既ニ此點ヲ以テ原判決ヲ破

毀スル以上ハ自餘ノ論旨ニ對シ逐一說明ヲ與フルノ要ナシ依テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ則リ主文ノ如ク判決ス

◉横領事件

明治四十五年(れ)第二〇二號 明治四十五年六月二十一日判決（破毀）

判決要旨

一、公判始末書ニ當該被告事件ニ檢事ノ立會アリタル旨ノ記載アルモ何人カ檢事トシテ立會タルヤ知ルコトヲ得サルトキハ右公判始末書ハ檢事ノ立會アリタル旨ノ記載ヲ缺クト等シク記載ノ效ナキモノトス

一、訴訟手續ノ遵守ハ公判始末書ニ依リテノミ之ヲ證スルコトヲ得從テ判決書ニヨリ立會檢事ノ何人ナルヤヲ知ルコヲ得ル場合ト雖モ公判始末書ニ於テ之ヲ明カニセサル以上ハ果シテ何人カ檢事トシテ立會タルヤ知ルコトヲ得サルモノトス

公判始末書ニ立會檢事ノ氏名ヲ記載セサル裁判ノ効力

一、何人カ檢事トシテ公判ニ立會タルヤ知ルコトヲ得サル裁判ハ破毀ヲ免カレス

第一審　東京地方裁判所　第二審　東京控訴院

被告人　石川春吉　辯護人　布施辰治

右横領被告事件ニ付明治四十五年四月二十八日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スル左ノ如シ

判決

原判決ヲ破毀シ事件ヲ名古屋控訴院ニ移ス

理由

辯護人布施辰治上告趣意書原判決ニ於テハ檢事中川一介干與ノ上本件ヲ審理シタル旨ノ記載アルモ原審公判始末書ニハ判事裁判長今村恭太郎以下四判事ノ陪席及書記岩佐松太郎ノ立會ヲ以テ公判ヲ開廷シ審理シタル旨ノ記載アリテ原判決ノ説示ノ如ク檢事中川一介ノ列席立會等干與シタル事實ヲ認ムヘキ記載ナシ然ラハ原判決ハ此點ニ於テ刑事訴訟法及ヒ裁判構成法ノ規定ニ背キタル不法アリト信ス又假リニ同公判始末書ノ末尾ニ檢事カ控訴棄却ノ意見ヲ述ヘタリトノ記載アルニ由リテ原審ノ公判ニ檢事ノ干與シタルコトヲ認メ得ヘシトスルモ同記載ニテハ干與シタル檢事ノ何人タルヤヲ知ル能ハサルカ故ニ尚ホ其違法タルヲ免レス結局原判決ハ破毀セラル可キモノト思料スト云フニ在リ◎因テ原審公判始末書ヲ査閲スルニ公判ニ列席セル檢事ノ官氏名ノ記載ヲ欠ケ

ルコト所論ノ如シ但シ公判始末書末尾ニ立會檢事カ事件ニ付キ意見ヲ陳述シタル旨ノ記載アルヲ以テ檢事ノ原審公判ニ干與シタルコトハ之ヲ認ムルヲ得ヘキモ何人カ檢事トシテ立會ヒタルモノナルヤ知ルニ由ナシ勿論原判決ニハ檢事中川一介干與審理セル旨ノ記載アルモ訴訟手續ノ遵守ニ關スル原判決書ノ記載カ正確ナルヤ否ヤハヒトリ公判始末書ニ依リテノミ證明シ得ヘキモノナレハ公判始末書ニ立會檢事ノ何人ナルヤヲ知ルヲ得ヘキ錄取ヲ欠ク以上ハ果シテ右中川檢事カ立會ヒタルモノナルヤ否ヤヲ認識スルニ由ナク結局原判決ハ訴訟手續ノ瑕瑾アル不法ノ裁判ナルヲ以テ之ヲ破毀スヘク上告論旨ハ理由アリトス因テ刑事訴訟法第二百八十六條第二百九十條ニ依リ主文ノ如ク判決ス

檢事板倉松太郎干與明治四十五年六月二十一日大審院第一刑事部

◎公正證書不實記載詐欺事件　明治四十五年(れ)第一一〇八號　明治四十五年六月二十一日宣告　（破毀）

判決要旨

一、告訴狀ノ欄外ニ押捺シアル區裁判所檢事局ノ受付印ハ告訴狀ノ内容ヲ成スルモノニ非ス從テ之ヲ罪證ニ供センニハ右印影自體ヲ被告ニ示スカ否ラサレハ右印文ヲ讀聞ケ被告ヲシテ之カ辯解ヲ爲サシムルコトヲ要ス

告訴狀欄外ニ於ケル受付印ノ採證

第一審　名古屋地方裁判所岡崎支部　第二審　名古屋控訴院

被告人　鈴木次三郎外一名　辯護人　高木益太郎

右公正證書不實記載詐欺被告事件ニ付明治四十五年四月二十日名古屋控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ各被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スル如左

判決

原判決ヲ破毀シ事件ヲ東京控訴院ニ移ス

理由

被告兩名辯護人高木益太郎上告趣意書第三點原判決ハ其證據理由ニ於テ「梅田喜太郎ノ被告兩人ニ對スル告訴狀ノ欄外ニ於ケル豐橋區裁判所檢事局ノ四十四年六月十一日受付ケタル旨ノ記載」ト說示シ之ヲ被告ノ罪證ニ供セラレタリ然ルニ右ノ記載ハ告訴狀タル私文書ト其作成者ヲ異ニスル純然タル一箇ノ公文書タルヲ以テ之ヲ罪證ニ供センニハ原院證據調ニ於テ辯解ヲ爲サシムル爲メ之ヲ被告ニ讀ミ聞ケサルヘカラサル筋合ナリ然ルニ原審公判始末書ヲ閲スルニ單ニ告訴狀ヲ讀ミ聞ケタルノミニシテ同書欄外ニ於テ作成セラレタル公文書タル右ノ記載ヲ讀ミ聞ケタル形跡存在セス果シテ然ラハ原判決ハ採證ノ法則ニ違背スルヲ以テ此點ニ於テ破毀ヲ免レスト云フニ在リ

○依テ訴訟記錄ニ付キ之ヲ調査スルニ原判決ニ所謂梅田喜太郎ノ被告兩名ニ對スル告訴狀ノ欄外ニ於ケル豐橋區裁判所檢事局ノ四十四年六月十二日受付ケタル旨ノ記載ナルモノハ該告訴狀ノ欄外ニ押捺シアル豐橋區裁判所檢事局ノ受付印ニ於ケル印文ヲ指スモノニシテ告訴狀ノ內容ヲ爲ス

モノニ非ス從テ之ヲ罪證ニ供セントセハ公廷ニ於テ該告訴狀若クハ右印影自體ヲ被告ニ示スカ否ラサレハ右印文ヲ讀聞ケ被告ヲシテ之カ辯解ヲ爲サシムルヲ要ス然ルニ原院公判始末書ニ依レハ原院ハ該告訴狀ヲ讀聞ケタルニ止リ其欄外ニ在ル右受付印文ニ付キテハ特ニ之カ證據調ヲ爲シタル事跡ナキカ故ニ之ヲ罪證ニ供シタルハ原判決ハ採證上ノ違法アルヲ以テ論旨ハ結局理由アリ原判決ハ破毀ヲ免レス

右ノ理由ナルヲ以テ爾餘ノ論旨ニ對スル說明ヲ略シ刑事訴訟法第二百八十六條ニ依リ主文ノ如ク判決ス

檢事板倉松太郎干與明治四十五年六月二十一日大審院第一刑事部

◉名譽毀損事件

明治四十五年(れ)第一一一五號　明治四十五年六月二十七日判決　(棄却)

判決要旨

一、代理人ヲ以テ告訴告發ヲナストキハ告訴狀又ハ告發狀ニ委任狀ヲ添ヘ之ヲ爲スヲ通例トスト雖モ必スシモ然ラサル可ラサルモノニアラス告訴告發ヲ受クヘキ當該司法警察官又ハ檢事若クハ事件ノ審判ヲ爲スヘキ裁判所カ之ヲ爲スコトニ付キ授權アルモノト認定スルニ於テハ委任狀ノ有無ニ拘

代理人ヲ以テスル告訴告發○名譽毀損罪ノ成立

ラス之ヲ受理審判スルヲ妨ケス

一、新聞雜誌ノ如キ公刊物ニ他人ノ名譽ヲ毀損スヘキ記事ヲ掲ケタルトキハ右公刊物ヲ公衆ノ閲覽シ得ヘキ狀態ニ措クニ依リテ名譽毀損罪ヲ構成ス必スシモ現ニ公衆ノ閲讀ヲ經ルコトヲ要セス

一、一人ノ名譽ヲ毀損スル爲メ一個又ハ數個ノ事實ヲ日刊新聞紙ニ數日間連載シタリトスルモ犯罪ヲ構成スル處ハ唯一ノ名譽毀犯罪ニ過キス

一、名譽ヲ毀損スヘキ事實ノ連載日數カ第一審ニテハ十七日間ナリト認定シ第二審於テハ十日間ナリト認定スルモ等シク一ケノ名譽毀損罪ニ該當スル事實ヲ判示シタルモノニシテ之ヲ以テ二ケノ審級カ互ニ事實ノ認定ヲ異ニスルモノト云フヲ得ス

第一審　東京地方裁判所　第二審　東京控訴院

被告人　安西榮朗外一名　辯護人　宮島次郎

右名譽毀損被告事件ニ付明治四十五年四月三十日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ各被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スルコト左ノ如シ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

被告兩名上告趣意書親告罪ナルモノハ被害者ノ告訴ヲ待ツテ初メテ公訴ヲ提起セラルヘキモノナリ本件ハ親告罪ニシテ被害者代理人名義ヲ以テ告訴ヲ提起セラレタルモ實質上代理權能ヲ生スヘキ被害者ノ委任行爲ナシ其第一審ニ於テ有罪ノ判決アルヤ初メテ被害者ノ意思決定シテ第二審ニ於テ漸ク其委任狀ヲ往日ノ日附ヲ以テ提出シ以テ初メヨリ代理權能アリタル如ク裝ヒタルニ過キス故ニ若シ控訴審ノ開廷セラルルコト微リセハ本案ハ被害者本人ト交渉ナクシテ親告罪ノ公訴成立セシモノナリ代理行爲ハ本人ノ委任狀ヲ以テ證明スヘキモノニシテ之カ欠缺ヲ補充シ遡及シテ其効力ヲ認ムルコトアルハ特ニ民事訴訟法ノ明定ニノミ適用シ得ヘキモノニシテ告訴就中被害者ノ意思ヲ公訴ノ必要條件トセル親告罪ニ在リテハ初メヨリ委任書類ノ證明ヲ要スルハ論ヲ待タス然ルニ之ナクシテ公訴ヲ提起シタルハ違法ニシテ斯ル公訴ハ裁判所ノ受理スヘキモノニ非ス然ルニ原院カ其公訴不受理ノ申立ヲ棄却シタルハ不當ナリト云ヒ」被告紫朗辯護人宮島次郎上告趣意

代理人ヲ以テスル告訴告發○名譽毀損罪ノ成立

書原審判決ハ當辯護人提出ノ公訴不受理ノ申立ヲ却下セルハ違法ナリ本件告訴ハ明治四十四年六月六日「ロベール、フーク」ノ代理人三浦常太郎ヨリ警視廳ニ提出セラレシカ當時告訴狀ニ委任狀ノ添附ナク該委任狀ハ第一審判決後即チ明治四十五年二月二十日初メテ控訴院ニ提出セラレタルモノナリ本件ハ親告罪ナルカ故ニ適法ノ告訴ナカルヘカラサルハ勿論ニシテ告訴カ代理人ニ依リテ爲サルル場合ハ適法ノ委任アルヲ要ス然ルニ本件ハ起訴前ニ口頭ヲ以テ委任セス又書面ヲ以テノ委任狀提出シアラス由來此ノ如キ場合ハ民事訴訟法ニ於テハ追完シ得ヘキ規定アリト雖モ刑事訴訟法ニ於テハ此規定ナキカ故ニ追完シ得ストスルヲ正シトス事重大ナル人權ニ關スルカ故ニ手續ヲ丁重ナラシムル旨趣ニ出ツ假ニ追完シ得ルトスルモ法律上之ヲ追完シ得ル期間ニ制限アリ民事訴訟法ニ於テ追完ヲ爲シ得ル期間ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結迄ト限定スルカ如シ「民事訴訟法第七十條三項末段」而シテ刑事訴訟法第六十四條ノ規定トノ關係上假ニ追完シ得ルトスルモ起訴前ニ於テ始メテ之ヲ爲シ得ルモノト解スヘシ若シ口頭及書面ニ於テ何等委任ナカリシ場合而シテ事件カ親告罪ニ屬スルトキハ檢事ハ進ンテ口頭ノ委任ヲ徵スルカ又ハ告訴委任狀ヲ提出セシムルナクシテ漫然起訴スヘキモノニ非ス斯ノ如キハ刑事訴訟法第六十四條ニ檢事カ起訴ヲ爲スヘカラサル場合ヲ定メタル事例ノ顯著ナル場合ナリト信ス故ニ當辯護人ハ原審ニ於テ公訴不受理ノ申立ヲ爲シタル次第也然ルニ原審カ之ヲ却下セルハ違法ニシテ破毀セラルヘキモノト思料スト云フニ在リ

按スルニ刑事訴訟法上告訴告發ハ代理人ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ得ル旨ノ規定アルモ（同法第五

十四條）其代理委任ノ證明方法ニ付キ特ニ民事訴訟法第六十四條ノ如キ規定ヲ設クルコトナキヲ以テ記錄ニ備フヘキ代理委任狀ヲ告訴狀若クハ告發狀ニ添附シテ提出セシムルヲ以テ通例ニシテ最モ便宜ノ方法ナリト爲スト雖モ其方法ニ依ラスシテ告訴告發ヲ受クヘキ當該司法警察官又ハ檢事若クハ事件ノ審理ヲ爲スヘキ裁判所カ必要ニ應シ代理人ヲシテ委任狀ヲ呈示セシメ若クハ其面前ニ於テ口頭ノ委任ヲ受ケシムルモ亦代理權限ノ證明方法トシテ違法トナサス然ラハ親告罪事件ト雖モ當該檢事ニシテ書面若クハ口頭ノ委任ニ依リテ該事件ノ告訴ヲ爲スニ付キ代理人カ適法ノ權限ヲ有スルコトヲ確認シタルトキハ記錄ニ代理委任狀ノ添附ナキモ該告訴ヲ以テ適法ノ代理人ニ依ルモノトシテ事件ノ起訴ヲ爲スモ違法ニ非スト謂ハサルヘカラス既ニ適法ノ起訴アリタル以上ハ受訴裁判所ハ相當ノ調査ヲ爲シ告訴カ適法ノ委任ニ依ル代理人ヲ以テ爲サレタル事實ヲ認ムルニ於テハ記錄ニ代理委任狀ノ添附ナキカ爲メニ該事件ノ裁判ヲ爲スコトヲ妨ケラルコトナシ蓋シ代理委任ノ關係ハ當事者間ニ在テハ委任契約ニ因リテ直ニ成立スヘク委任狀ハ第三者ニ對スル右委任關係ノ存在ヲ證明スル具ニ過キサレハ告訴告發ニ付キ適法ノ代理委任アリタルヤ否ヤハ當事者間ニ於ケル委任關係ノ存否ニ依リテ之ヲ決スヘク其事實ノ證明ハ規定ノ存セサル限リニ適宜ニ之ヲ爲スコトヲ妨ケサレハナリ記錄ヲ按スルニ本件告訴狀ハ「ロベール、フーク」ノ代理人辯護士三浦常太郎ノ提出ニ係リ委任狀ノ添附ナシト雖モ當該司法警察官ニ於テ之ヲ受理シ搜査處分ヲ爲シタル後事件ヲ檢事ニ送致シ而シテ檢事ハ重ネテ搜査處分ヲ遂ケ起訴ノ手續ヲ爲シタル事迹ニ徵スレハ各當該官ハ代理委任ヲ閲覽シ右告訴ヲ以テ適法ノ委任ニ因ル代理人ノ爲シタルモノト

確信シタル事實ヲ認ムルニ足ル而シテ代理人カ告訴狀提出ノ當時ヨリ適法ノ委任狀ヲ有セルコトハ代理人ハ原審ニ告訴狀ト同一ノ日附アル委任狀一通ヲ提出シ右ハ告訴狀ニ添附スルコトヲ遺脫シタル旨上申シタル事實ニ徵シテ明確ナレハ本件告訴ニ付キ適法ノ代理委任ナク從テ適法ノ告訴ナクシテ親告罪ヲ起訴シタル違法アリト論スヘカラス故ニ原審カ被告辯護人ノ爲シタル公訴不受理ノ申立ヲ却下シタルハ相當ニシテ論旨ハ理由ナシ

第二點原判決ニ於テ被告ハ久彌ト共謀シ明治四十四年五月二十八日發行朝野新聞第一萬千九百七十三號ヨリ同年六月六日發行同第一萬千九百八十一號マテノ紙上ニ亘リ「ロベール、フーク」ニ關スル事實ヲ摘示シタル記事ヲ連載シ以テ同人ノ名譽ヲ毀損シタルモノナル旨判示セラレタリ然レトモ新聞紙ニヨル名譽毀損罪ハ單ニ名譽毀損ノ事實ヲ新聞紙ニ掲載スルヲ以テ成立スルモノニ非ス少クトモ第三者ノ一人カ之ヲ閲讀シテ掲載事實ヲ知ルヲ必要トスルコトハ言ヲ俟タサル所ナリ然ルニ原判決ハ右新聞ヲ公布シタル事實ハ勿論他人カ當該記事ヲ閲讀シタル事實ヲ認定セスシテ輙ク名譽毀損罪ノ成立ヲ認メ刑法第二百三十條ニ問擬シタルハ事實理由不備ノ失當アリト云ハサルヘカラスト云フニ在レトモ○新聞紙雜誌ノ如キ公刊ノ文書ニ依リテ他人ノ名譽ヲ毀損スル罪ハ名譽毀損ノ記事ヲ掲載發行シ公衆ノ閲讀シ得ヘキ狀態ニ措クニ因リテ成立シ右記事カ公衆ノ閲讀ヲ經タルコトヲ必要トセス故ニ原判決ニ於テ被告等カ「ローベル、フーク」ノ名譽ヲ毀損スヘキ事實ヲ新聞紙ニ連載發行シタル旨ヲ判示セル以上ハ新聞紙ハ性質上當然頒布セラレテ公衆ニ閲讀セラルヘキモノナレハ右記事ヲ掲載シタル新聞紙カ頒布セラレテ公衆ノ閲讀ニ供セラレタル事

實ノ說示ナキモ理由不備ノ不法アルモノニ非ス

第四點本件第一審判決ニ於テハ被告カ「ロベール」ノ名譽ヲ毀損スヘキ記事ヲ明治四十四年五月二十六日發行朝野新聞第一萬千九百七號ヨリ同年六月十七日發行同第一萬千九百九十二號ニ至ル迄ノ間紙上ニ掲載セル旨判示シタルニ原判決ニ於テハ被告ハ同記事ヲ明治四十四年五月二十八日登行朝野新聞第一萬千九百七十三號ヨリ同年六月六日發行同第一萬千九百八十一號迄ノ紙上ニ掲載シタリト判示シ事實ノ認定第一審判決ト異ナルヲ以テ之ヲ取消スヘキモノナルニ拘ハラス反テ被告ノ控訴ヲ理由ナシトシテ棄却シタルハ違法ナルモノトスト云フニ在レトモ○毎日發行スル新聞紙上ニ包括的ニ一人ノ名譽ヲ毀損スヘキ一箇若クハ數箇ノ事實ヲ掲載シ之ヲ發行シタルトキハ一箇ノ名譽毀損罪成立スルニ過キサレハ第一審裁判所ニ於テ十七日間ニ亘リテ新聞紙ニ名譽毀損ノ記事ヲ連載發行シタル事實ヲ認メ第二審裁判所ニ於テハ十日間ニ亘リテ新聞紙ニ同一ノ記事ヲ連載發行シタル事實ヲ認ムルモ等シク一箇ノ名譽毀損罪ニ該當スル事實ヲ判示シタルモノニシテ掲載日數ノ多少ハ犯罪ノ構成ニ何等消長ヲ來スコトナケレハ其事實ノ判示ニ異同アルモ之ヲ以テ事實認定ヲ異ニスト云フ可ラス故ニ原判決ニ於テ所論第一審判決ヲ認容シテ被告ノ控訴ヲ棄却シタルハ相當ナリ

◉文書偽造詐欺ノ件

明治四十五年(れ)第一一四六號
明治四十五年六月二十五日宣告

判決要旨

刑法第五十四條第一項ノ適用

一、效力ヲ異ニスル二個ノ偽造證書ヲ同時ニ行使シタルハ一箇ノ所爲ニシテ數箇ノ罪名ニ觸ルルモノニ該當ス刑法第五十四條第一項前段ヲ適用スヘキモノトス

（參照）一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸レ又ハ犯罪ノ手段若クハ結果タル行爲ニシテ他ノ罪名ニ觸ルルトキハ其最モ重キ刑ヲ以テ處斷ス（刑法第五十四條第一項）

第一審　高松地方裁判所　　第二審　大阪控訴院

被告人　川津勘太郎　　辯護人　横山鑛太郎

右文書偽造詐欺被告事件ニ付明治四十五年四月二十九日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スル左ノ如シ

判決

原判決ハ之ヲ破毀ス

被告ヲ重禁錮一年六月ニ處ス

押收ノ證據品中村忠名義ノ印鑑證明書（豫第一號證）村上和吉郎名義ノ印鑑證明書（豫第二號證）各一通及川津勘太郎二名名義ノ金圓借用證書（豫第四號證）中偽造ニ係ル部分ハ之ヲ沒收シ其餘ノ押收品ハ各差出人ニ還付ス

公訴裁判費用ハ被告ノ負擔トス

理由

辯護人横山鑛太郎上告趣意書第一點本件偽造印鑑證明書二通及同金員借用證書一通ヲ行使シタル事實ニ付キ原判決ハ「前略上述印鑑證明書二通及金員借用證書ヲ高松市築地町雜賀長平ニ交付シ同人ニ對シ該證書ニテ他ヨリ金借ヲナスコトノ周旋ヲ爲シ呉レタシト申告ケ云云」ト判示シアリテ即チ前記三通ノ偽造文書ハ總テ同時ニ行使セラレタル事實ナルヲ以テ一箇ノ行爲カ刑法第百五十八條第一項及同第百六十一條第一項ノ兩法條ニ觸レ即チ刑法第五十四條第一項前段ノ支配ヲ受クヘキ場合ニ該當スヘシ然ルニ原判決ノ擬律茲ニ出テサルハ法律ノ適用ヲ誤レル失當アリト云フニ在リ○依テ原判決ノ事實理由ヲ見ルニ「被告ハ云云上述印鑑證明書二通（本濱村長村上忠名義ノ偽造印鑑證明書ヲ指ス）及金圓借用證書（被告及村上和吉郎外一名名義ノ偽造金圓借用證書ヲ指ス）ヲ云云雜賀長平ニ交付シ同人ニ對シ該證書ニテ他ヨリ金借ヲ爲スコトノ周旋ヲナシ呉レタシト申告ケ因リテ長平及三好茂三郎ノ手ヲ經テ該證書ヲ云云山内好雄ニ差入レ云云」ト記載シアリテ即チ右偽造ニ係ル印鑑證明書及金圓借用證書ハ被告ニ於テ同時ニ之ヲ行使シタル事實ニシテ即チ一箇ノ所爲ニシテ數箇ノ罪名ニ觸ルルモノナレハ之ニ對シテハ須ク同法第五十四條第一項前段ヲ適用スヘキモノナルニ原判決茲ニ出テサリシハ擬律錯誤ノ不法アルモノニシテ破毀ヲ免レサルモノトス

◉贓物寄藏故買事件

明治四十五年(れ)第一二三六號
明治四十五年七月五日判決（破毀）

判決要旨

一、贓物ノ還給ハ民法上ノ請求權ヲ基礎トスルモノナレハ之レカ還給ヲ命スル裁判ハ贓物授受ニ關スル當事者間ノ民法上ノ關係如何ヲ判示シ以テ請求ノ正當ナル所以ヲ明示セサル裁判ハ破毀ヲ免カレス

説明

贓物ノ意義

贓物トハ犯罪ニ依テ得タル物件及ヒ犯罪ニ依リ所持スル物件ヲ云フ左ニ之ヲ分折スヘシ

第一犯罪ニ依リテ得タル物件。

犯罪行爲ニ依テ得タル物件ハ贓物ナリトス然レトモ犯罪ニヨリテ得タル物件ハ悉ク贓物ナリトハ速斷スヘカラス則チ犯罪ニヨリテ得タル物件中其ノ之ヲ得ルニ付キ民法上所有權移轉ノ效アルモノハ此ノ内ニ包含セス賭博ニヨリテ得タル物若クハ密賣婦カ客ヨリ貰受ケタル所得ノ如キ是ナリ凡ソ此等ノ財物ハ犯罪ニ依リテ得タル物件ニハ相違ナキモ此ヲ得ルニ付キ夫レノ强竊又ハ詐欺等ノ如ク猥リニ他人ノ財物ヲ奪取又ハ騙取スルニアー

物存ルル物テ一像第贓シス犯キ第リス
盗且ルル物キナ任ノ究物ヘヲ承保稱上ス
ニット件ノキ能ハヲハキ諸護ヲ權シ
シ貴將ヲ問幼力必要犯ナ護ニセ附利テ
テ任ク回題者ノスス罪リスヨシ移相
唯無復是カ缺刑ルニ　ルリトノ之轉手
ニ能則遇變ノ構ヲ繼趣ノシスシヨ物責
責能スナ他乏罰ハヨ　ノ民スレノ方
任力力ルリ人ニヲ所リ　必法ルカ效ノ
能者者カ按ノヨ科謂得　要上ニ還アテ完
力トナ爲スル財リスル犯タ　ナ有外給ルタ全
ナ雖ルニルル物處ヘ罪ルル　ク效ナヲモナ
キモトル設ニヲ罰キナ物　從ニヲナノルル
カ他ハケ已笏セ犯ルル件　テ授スサトル承
爲人財タニ取ラ罪モナ　斯受左シスル諸
メノ物ルル說シレナノルル　ルセレムル元ノ
之財ヲモ明タサルヽニ　物ラハルル來下
レ物回ノスルカ意ト　件レ賭所法ニ
ヲヲ復ナルトモ又義以　ヲタ博以律授
罰笏セレカキ尚ハ之上　脏ルス又ノカ受
セ取サハ如ハホ其ナ說　物財ハモモ犯ス
サスル其ク其此ノリ明　中物賣ノ罪ル
ルル可ノ脏ノ性則ス　ニナ婦ハニモ
ニニラ之物笏丙質チル　包レノ不ヨノ
過於サヲノ取ニ已脏カ　合ハ所法リナ
キテル侵規シ包ニ物如　セ脏得ニテレ
スハ必奪定タ合犯ノシ　シ物ノ侵得ハ
左行要スハルスル罪因而　ムナ如奪タ從
レ爲ニルル素盗ルル的テシ　ルルルキセルッ
ハノ何者ト品ヤ行生テ　ノ名ハラ物テ
純性等ノ奪ハ例爲スル今　不稱相レ件其
理質異責取脏ヘタルル玆　可ノ手タニノ
上ハナ任セ物ハルル犯ニ　ナ下方ルル脏授
ヨ一ルル能ラナ責以罪一　ルニカ被物受
リ稱所力レ滅テリテ任上ナ段　ヤ授任畫ナハ
論ノナ者タヤ能ハルノ　知與意者ルル民

物ノ存ルル物テ一像第贓シス犯キ第リス
盗且ルル物キナ任ノ究物ヘヲ承保稱上ス
ニット件ノキ能ハヲハキ諸護ヲ權シ
シ貴將ヲ問幼力必要犯ナ護ニセ附利テ
テ任ク回題者ノスス罪リスヨシ移相
唯無復是カ缺刑ルニ　ルリトノ之轉手
ニ能則遇變ノ構ヲ繼趣ノシスシヨ物責
責能スナ他乏罰ハヨ　ノ民スレノ方
任力力ルリ人ニヲ所リ　必法ルカ效ノ
能者者カ按ノヨ科謂得　要上ニ還アテ完
力トナ爲スル財リスル犯タ　ナ有外給ルタ全
ナ雖ルニルル物處ヘ罪ルル　ク效ナヲモナ
キモトル設ニヲ罰キナ物　從ニヲナノルル
カ他ハケ已笏セ犯ルル件　テ授スサトル承
爲人財タニ取ラ罪モナ　斯受左シスル諸
メノ物ルル說シレナノルル　ルセレムル元ノ
之財ヲモ明タサルヽニ　物ラハルル來下
レ物回ノスルカ意ト　件レ賭所法ニ
ヲヲ復ナルトモ又義以　ヲタ博以律授
罰笏セレカキ尚ハ之上　脏ルス又ノカ受
セ取サハ如ハホ其ナ說　物財ハモモ犯ス
サスル其ク其此ノリ明　中物賣ノ罪ル
ルル可ノ脏ノ性則ス　ニナ婦ハニモ
ニニラ之物笏丙質チル　包レノ不ヨノ
過於サヲノ取ニ已脏カ　合ハ所法リナ
キテル侵規シ包ニ物如　セ脏得ニテレ
スハ必奪定タ合犯ノシ　シ物ノ侵得ハ
左行要スハルスル罪因而　ムナ如奪タ從
レ爲ニルル素盗ルル的テシ　ルルルキセルッ
ハノ何者ト品ヤ行生テ　ノ名ハラ物テ
純性等ノ奪ハ例爲スル今　不稱相レ件其
理質異責取脏ヘタルル玆　可ノ手タニノ
上ハナ任セ物ハルル犯ニ　ナ下方ルル脏授
ヨ一ルル能ラナ責以罪一　ルニカ被物受
リ稱所力レ滅テリテ任上ナ段　ヤ授任畫ナハ
論ノナ者タヤ能ハルノ　知與意者ルル民

物ノ存ルル物テ一像第贓シス犯キ第リス
盗且ルル物キナ任ノ究物ヘヲ承保稱上ス
ニット件ノキ能ハヲハキ諸護ヲ權シ
シ貴將ヲ問幼力必要犯ナ護ニセ附利テ
テ任ク回題者ノスス罪リスヨシ移相
唯無復是カ缺刑ルニ　ルリトノ之轉手
ニ能則遇變ノ構ヲ繼趣ノシスシヨ物責
責能スナ他乏罰ハヨ　ノ民スレノ方
任力力ルリ人ニヲ所リ　必法ルカ效ノ
能者者カ按ノヨ科謂得　要上ニ還アテ完
力トナ爲スル財リスル犯タ　ナ有外給ルタ全
ナ雖ルニルル物處ヘ罪ルル　ク效ナヲモナ
キモトル設ニヲ罰キナ物　從ニヲナノルル
カ他ハケ已笏セ犯ルル件　テ授スサトル承
爲人財タニ取ラ罪モナ　斯受左シスル諸
メノ物ルル說シレナノルル　ルセレムル元ノ
之財ヲモ明タサルヽニ　物ラハルル來下
レ物回ノスルカ意ト　件レ賭所法ニ
ヲヲ復ナルトモ又義以　ヲタ博以律授
罰笏セレカキ尚ハ之上　脏ルス又ノカ受
セ取サハ如ハホ其ナ說　物財ハモモ犯ス
サスル其ク其此ノリ明　中物賣ノ罪ル
ルル可ノ脏ノ性則ス　ニナ婦ハニモ
ニニラ之物笏丙質チル　包レノ不ヨノ
過於サヲノ取ニ已脏カ　合ハ所法リナ
キテル侵規シ包ニ物如　セ脏得ニテレ
スハ必奪定タ合犯ノシ　シ物ノ侵得ハ
左行要スハルスル罪因而　ムナ如奪タ從
レ爲ニルル素盗ルル的テシ　ルルルキセルッ
ハノ何者ト品ヤ行生テ　ノ名ハラ物テ
純性等ノ奪ハ例爲スル今　不稱相レ件其
理質異責取脏ヘタルル玆　可ノ手タニノ
上ハナ任セ物ハルル犯ニ　ナ下方ルル脏授
ヨ一ルル能ラナ責以罪一　ルニカ被物受
リ稱所力レ滅テリテ任上ナ段　ヤ授任畫ナハ
論ノナ者タヤ能ハルノ　知與意者ルル民

ヤ勿論ナリ又贓物カ一ヒ他ニ展轉シタルトキハ贓物タルノ性格ハ何レノ時迄繼續スルヤヲ考フルニ其ノ物件ニ付キ完然ナル民法上ノ所有權ヲ收得スルコトヲ得ルニ至ル迄繼續ス民法第百九十三條第百九十四條ヲ參考スヘシ

第一審　東京地方裁判所　　第二審　東京控訴院

被告人　四澤權之丞　　辯護人　齋藤林平

右贓物寄藏故買裁告事件ニ付明治四十五年五月十八日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スル如左。原判決ヲ破毀シ事件ヲ名古屋控訴院ニ移送ス

理由

辯護人齋藤林平上告趣意書原判決ハ「…押收物件中杉挽角材二十一本杉四分板二十束及杉板割二十束ハ犯人手裡ノ贓物ナルヲ以テ刑法施行法第六十一條ニ依リ之ヲ各被害者ニ…還付ス」ヘキ旨ノ言渡ヲ爲シタリ然レトモ原判決事實理由ヲ見ルニ上告人ハ岡名秀カ騙取シ來リタル杉挽材、杉板及杉板割ヲ買受ケタル旨判示シアリテ之ニ因リテ見ルトキハ岡名秀ト各被騙取者トノ間ノ行爲カ民法第九十六條ノ規定ニ基キ取消サルルカ若クハ岡名秀ノ詐欺行爲ニ因リ各被騙取者カ法律行爲ノ要素ニ錯誤ヲ生シタリシ場合ニアラサリシモノナルニ於テハ岡名秀ハ右物件ノ所有權ヲ取得シタリシナルヘク從テ同人ヨリ該物件ヲ買受ケタル上告人ハ其所有主タルヲ以テ之ヲ贓物ナリトスルモ直チニ被害者ニ還付スルヲ得サルモノトス然ルニ原判決カ岡名秀ト各被騙取者トノ間ノ法律行爲ハ要素ノ錯誤アル無效ノ行爲ナリシヤ否ヤ又其行爲ノ取消サレタリヤ否ヲ判斷スル

コトナキニ拘ハラス輙スク贓物ヲ被害者ニ還付スルノ言渡ヲ爲シタルハ違法ニシテ此點ニ於テ破毀ヲ免レサルモノトスト云フニ在リ

因テ按スルニ贓物ノ還給ハ民法上ノ請求權ヲ基礎トスル原狀回復ノ方法タルニ過キサルヲ以テ直ニ其還給ヲ命スヘキヤ否ヤハ民法上ノ關係如何ニ依リテ定マルモノトス是本院判例ノ從來示ス所ナリ原判示ニ依レハ所論被告ノ故買シタル押收物件ハ岡名秀カ他人ヨリ騙取シ來リタル贓物ナルコト明カナルモ兩者間ノ民法上ノ關係如何ニ付テハ何等判示スル所ナク其物件ノ授受カ當然無效ナルヤ將タ取消シ得ヘキ行爲ニシテ且取消ノ意思表示アリタルヤ否ヤ從テ直ニ其物件ヲ被害者ニ還付スヘキヤ否ヤヲ判斷スルニ由ナキコト洵ニ所論ノ如クニシテ原判決ハ理由不備ノ不法アリト云フヘク上告論旨ハ其理由アリ

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ依リ主文ノ如ク判決ス

檢事鈴木宗吾干與明治四十五年七月五日大審院第一刑事部

◉文書僞造行使委托金費消及瀆職法違犯事件

明治四十五年(れ)第九五七號　明治四十五年七月四日判決　(棄却)

判決要旨

一、會社ノ人格ハ其ノ定欵ニヨリ定マリタル目的ノ範圍內ニ於テノミ存在ス

取締役ノ不法行爲ニ對スル會社ノ責任

一、會社ノ代表機關タル取締役ハ會社ノ目的タル營業ノ範圍內ニ於テノミ一切ノ裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲スノ權限ヲ有シ右範圍ヲ踰越シタル行爲ニ付テハ會社ノ人格ヲ代表スルコトヲ得ス

一、法人ハ不法行爲能力ヲ有スルモノニアラス、其ノ取締役カ職務ヲ行フニ當リ不法行爲ヲ以テ他人ニ損害ヲ加ヘタルトキ會社カ賠償責任ヲ負フハ唯法律カ第三者及ヒ會社ノ信用保護ノ爲メニ會社ニ此ノ負擔ヲナサシムルニ止マリ其ノ行爲ヲ法人ノ行爲トシテ之レカ賠償ヲ負擔セシムルノ趣旨ニアラス

一、從テ會社ノ株主總會ニ於テ會社ノ行爲意思ヲ決定表示シタル事實アリトスルモ其決定意思ニシテ法令又ハ定款ニ反シ會社ノ目的ニ屬セサルトキハ假令其ノ意思表示カ會社ノ利

歸シ會社ノ存立ヲ保護スルニ必要ナリトスルモ其ノ意思決定ハ無效ニシテ之ヲ實行シタル取締役ハ第三者ニ對シ其ノ責ニ任スヘク會社ハ之レニ對シ責任ヲ負フコトナシ

一、取締役ノ不法行爲ニ付キ會社カ賠償責任ヲ負擔スルハ取締役カ權限內ニ於テ職務ヲ行フニ當リ加ヘタル損害ニ止マリ衆議院議員ニ贈賄スルカ如キハ假令其ノ目的社運ノ隆盛ヲ計ルニ在リトスルモ會社ハ之レニ對シ責任ヲ負フコトナシ

一、裁判所カ判示事實中ノ一部ニ付キ無罪ヲ言渡シ其ノ他ノ部分ニ付キ有罪ノ判決ヲ下シタルトキハ右有罪ノ判決ト無罪ノ判決トハ各獨立シテ確定シ得ヘキモノトス

一、前項ノ場合ニ於ケル檢事ノ上告カ其ノ申立ヲ判決ノ何レカノ部分ニ限局セサルトキハ全部ニ對シ上告アリタルモノト推定スヘキモ若シ上告申立ノ趣旨カ有罪ノ判決ノミニ對シ

無罪ノ判決ニ及ハサルトキハ有罪ノ判決ニ對シテノミ上告アリタルモノト認ムルヲ相當トス

一、文書ヲ僞造行使シタル以上ハ文書ノ眞正ニ對スル公ケノ信用ヲ害スルヲ以テ氏名ヲ濫用セラレタル者ニ損害ヲ加ヘス若クハ却テ利益ヲ生スル場合ト雖モ文書僞造行使罪ノ成立ニ缺クル所ナシ

一、詐欺ノ手段ヲ以テ財物ヲ騙取シタル以上ハ詐欺取罪ハ直チニ成立スルモノニシテ之レカ爲メニ損害ヲ被ル被害者ノ何邊ニ存スルヤ之ヲ問フノ要ナシ

第一審　東京地方裁判所　第二審　東京控訴院

被告人　磯村音介外一名　辯護人（江木衷　澤田薫　末弥彌次郎　尾越辰雄　大喜多寅之助　飯田宏作）

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

被告一裕辯護人法學博士江木衷辯護人澤田薫同末弥彌次郎上告趣意書第一點原判決第一事實タル所謂戻稅問題ニ關スル小切手ノ振出ハ大日本製糖株式會社ノ死活問題ニ際シ之ヲ救護スヘク衆議院議員等ニ運動ノ爲メ取締役トシテ振出シタルモノナルコトハ原判決カ事實トシテ確定セル所ナリ而シテ原判決ハ之ヲ以テ全然取締役ノ資格ヲ冒用シタル僞造行爲ナリトシ僞造罪ニ問擬シタリ然レトモ大日本製糖株式會社ハ社團法人ナルカ故ニ自主自存ノ意思ヲ有スルコトハ敢テ喋喋ヲ要セサル所ナリ既ニ自主自存ノ意思ヲ有スルモノトセンカ自己ノ存在ヲ害スヘキ危害ノ襲來スルモノアル場合ニ於テ之ヲ防禦排斥センコトヲ欲スル自存ノ意思ノ伴フハ當然ノ觀念ニシテ凡テノ意思主體ニ通有ノ性質ナリ從テ上告人カ會社ノ生存ヲ救護スル爲メニ爲シタル行爲ハ會社ノ自衛意思ニ基ク法人行爲ニシテ上告人ハ意思執行ノ機關トシテ行動セシニ止マリ毫モ取締役タル資格冒用ノ問題ヲ發生セス或ハ法人ハ不法行爲ヲ爲スヲ得スト論スルモノアランモ知ルヘカラスト雖モ其法律上ノ根據ナキコトハ法人ノ不履行ニ想到シテ直チニ判明スル所トス況ンヤ或ル行爲カ不法ナルヤ否ヤノ法律問題ト行爲ノ主體ノ何人ナルヤノ問題トハ別箇ノ問題ナルニ於テオヤ素ヨリ法人ハ行爲能力ヲ有セス其行爲ハ代表者ニ依リテ行ハル自衛行爲ノ如キ素ヨリ然リ然レトモ代表者ノ行爲カ法人ノ行爲ナルヤ否ヤハ一ニ行爲者ノ意思ニ因リテ定マルヘキモノニシテ單ニ表現ノ行爲ニ因リテ決シ得ヘキモノニアラス上告人ノ小切手振出ノ行爲ヲ資格ノ冒用ナリトスル論據ハ一ニ法人ハ其目的ノ範圍内ニ於テノミ人格ヲ有ス代表者ノ權限亦此範圍ヲ出ツヘキニアラス議員ニ贈賄スル如キハ素ヨリ法人ノ目的ニアラス從テ爲之小切手ヲ振出スカ如キハ代表者ノ權限ニアラ

スト云フニ在ルモ之レ法條ノ末ニ拘泥シ法人ノ人格者ニシテ人格ヲ有スルモノハ當然自主自存ノ意思ヲ有シ其自主自存ヲ害スヘキ危害ハ其自主自存者タル法人自身ニ於テ之ヲ防禦排斥シ得ヘキ當然ノ純理ヲ看過シタル皮相ノ見解ナリ從テ其手段トシテ採リタル方法則チ贈賄カ犯罪タルト否トニ關セス小切手ノ振出行爲自體ハ優ニ法人ノ代表者トシテノ行爲ニシテ毫モ其代表資格ヲ冒用シタルモノニアラス然ルニ原院カ之ヲ僞造罪ニ問擬シタルハ不法ノ判決ナリト云フニ在リ○然レトモ法人ハ法律ノ規定ニ依ルニ非サレハ成立スルコトヲ得サルヲ以テ（民法第三十三條）株式會社トシテ保有スル權利義務ノ主體タル人格ハ定款ニ因リテ一定セル目的ノ範圍内ニ於テノミ存スルモノト解スルヲ相當トス（民法第四十三條）而シテ其代表機關タル取締役ハ會社ノ目的タル營業ノ範圍ニ於テノミ一切ノ裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲ス權限ヲ有スルカ故ニ（商法第六十二條第一項）右權限外ノ行爲ニ付テハ取締役ハ會社ノ人格ヲ代表スルコトヲ得ス從テ會社ハ取締役ノ權限外ノ行爲ニ付キ責任ヲ負フコトナキヲ原則トス但法律ハ第三者ノ利益保護ト法人ノ信用保護トヲ目的トシテ法人ハ其代表者カ其職務ヲ行フニ付キ他人ニ加ヘタル損害ヲ賠償スヘキ責任ヲ負フヘキモノト定メタルヲ以テ（民法第四十四條第一項）會社ハ取締役カ會社ノ營業ニ付キ爲シタル不法行爲ノ責任ヲ辭スルヲ得サルニ過キス又民法第七十一條及ヒ商法第四十八條ハ法人ニ對スル設立許可ノ取消シ及ヒ商事會社ノ解散ノ原由ヲ規定シタルモノニシテ法人ハ其目的以外ニ於テモ存在シ且ツ不法行爲能力ヲモ有スルコトヲ承認シタル趣旨ナリト解スルヲ得サレハ法人ノ代表機關カ爲シタル行爲ニシテ法人ノ目的以外ニ屬シ殊ニ不法行爲ニ該當スルトキハ法人行爲トシ

テハ何等效力ヲ生セス從テ其代表機關ハ法人ノ行爲ナリト主張シテ其責ヲ免ルルヿヲ得ス故ニ縱令所論ノ如ク法人タル株式會社カ實在シ其最高意思決定ノ機關タル株主總會ニ因リテ會社ノ行爲意思ヲ決定表示シタル事實ナリトスルモ其行爲ニシテ法令又ハ定款ニ反シ會社ノ目的ニ屬セサルモノナラハ其意思決定ハ無效ニシテ之ヲ實行シタル取締役ハ第三者ニ對シテ其責ニ任スヘク會社ハ之ニ對シテ責任ヲ負フヘキニ非ス（民法第四十三條第四十四條第二項商法第百七十七條）果シテ然ラハ取締役ハ會社ノ目的タル營業ノ範圍内ニ於テ會社ノ人格ヲ代表シ得ヘク其以外ニ於テハ總テ之ヲ代表スルヲ得サルモノト解スルヲ相當トス故ニ株式會社ノ目的タル營業ノ範圍ニ屬セサル行爲ノ實行カ縱令會社ノ利益ニ歸スヘク而モ會社ノ存立ヲ保護スルニ必要ナリトスルモ又株主總會ノ議決ニ因リタルモノトスルモ將タ又後日株主總會ノ承認ヲ經タルモノナリトスルモ仍ホ之ヲ以テ取締役カ會社ノ代表機關トシテ爲シタル行爲ナリト謂フヘカラス原判決ノ判示事實ニ據レハ被告等ハ大日本製糖株式會社ノ取締役トシテ會社ノ存立ニ關スル問題ニ接著シ其解決ノ爲メ公務員ニ對スル贈賄行爲ヲ遂行セントシ其手段ニ供スル目的ヲ以テ被告等ノ取締役名義ヲ以テ小切手ヲ振出シタリト云フニ歸スルヲ以テ被告等ノ行爲ハ株主總會ノ議決ヲ執行シタル事實ニ非サルハ勿論右小切手振出ノ目的ハ贈賄ニ在リテ會社ノ營業上ノ必要ニ出テタルモノニ非サレハ被告等カ會社ノ目的タル營業ノ範圍ニ於テ取締役トシテ會社ノ人格ヲ代表シタル行爲ニ非スシテ會社ノ代表資格ヲ冒シタルモノニ外ナラサレハ原判決ニ於テ被告等ノ所爲ヲ以テ有價證券僞造罪トシテ刑法第百六十二條ヲ適用處斷シタルハ相當ニシテ論旨ハ理由ナシ

上告第四點上告趣意書第一點ノ一原判決ハ其末尾ニ「然ルニ原判決ハ宮城控訴院ニ於テ無罪ヲ言渡シ確定シタル原判示第一ノ所爲ト本案所爲トニ付キ併合罪ニ關スル擬律ヲ爲シタル失當アルヲ免レサルヲ以テ控訴及附帶控訴ハ共ニ理由アリ」ト說示シ以テ被告磯村音介及秋山一裕ノ兩名ニ對スル原判決ヲ取消スノ理由トナシタルモ記錄ヲ查スルニ第一審判決判示第一ノ所爲ハ宮城控訴院ニ於テ無罪ノ判決アリタルモノナルモ該判決ニ對シテハ同院檢事長ヨリ上告ヲ爲シ御院ニ於テ右上告ヲ理由アリト爲シ同判決全部ヲ破毀シ原院ニ移送スルノ言渡アリタルモノナルヲ以テ上記宮城控訴院ニ於テ言渡サレタル無罪ノ判決ハ確定シタルモノニアラサルコト極メテ明瞭ナリ左レハ原判決カ上記ノ理由ノ下ニ第一審判決ヲ失當ナリトシ破告一裕ノ控訴及一裕ニ對スル檢事ノ附帶控訴ヲ理由アリト說示シタルハ不法ニシテ破毀ヲ免レサルモノ也附言原審公判始末書ニ裁判長ハ本件ニ付キ原判決認定第一公訴事實ニ付テハ大審院ヨリ移送ナキモノト認ムルニ依リ當審ニ於テハ原判決認定第二乃至第五ノ公訴事實ニ付テノミ審判スル旨ヲ告ケタル旨竝檢事被告人及辯護人ハ孰レモ異議ナキコトヲ述ヘタル旨ノ記事ヲ存セリ然レトモ裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事項ハ假令訴訟關係人ニ於テ異議ナシトスルモ爲メニ之ニ對シ裁判ヲ爲スノ義務ヲ免レ訴訟關係ノ消滅ヲ來スヘキモノニアラサルコト勿論ナリトスト云フニ在リ○然レトモ控訴審ニ於テ第一審判決ヲ取消シ其判示事實中ノ一部ニ付キ無罪ヲ言渡シ其他ノ部分ニ付キ有罪ノ判決ヲ爲シタル場合ニ於テハ右有罪ノ判決ト無罪ノ判決トハ各獨立シテ確定シ得ヘキモノナリ而シテ檢事ノ上告カ其申立ヲ判決ノ孰レノ部分ト限局セサルトキハ全體ニ對シテ上告アリタルモノト解スヘキカ如シト雖

モ上告趣意書カ有罪ノ判決ニ對スルモノニシテ無罪ノ判決ニ及ハサルトキハ上告ハ有罪判決ニ限リタルモノト認ムルヲ相當トス記錄ヲ查スルニ宮城控訴院檢事長ノ上告申立書ニハ上告ノ範圍ヲ制限シタル趣旨ノ睹ルヘキモノナシト雖モ之ヲ上告趣意書ニ對照スレハ有罪判決ノ部分ニ制限セラレタルコトヲ確認スルニ足ルヲ以テ同院ニ於テ第一審判決中第一ノ所爲ニ對シテ言渡シタル無罪ノ判決ハ確定シ本院ニ繫屬セサリシコト明確ナリ故ニ原判決ニ於テ所論ノ如ク判示シタルハ相當ニシテ論旨ハ理由ナシ

被告音介辯護人尾越辰雄上告第八點原審ハ文書僞造罪ノ成立條件ヲ無視シテ之ヲ認定シタル不法アリ御院ニ於テ明治三十五年四月二十四日左ノ如ク宣告セラレタリ「文書僞造行使罪ヲ構成スルニハ其文書ノ行使ニヨリ他人ニ害ヲ生シ又ハ生シ得ヘキコトヲ要ス左レハ假令文書ヲ僞造行使スルコトアルモ他人ノ爲メニ却テ利益ヲ生シ又ハ損害ヲ生スヘカラサルトキハ犯罪ヲ構成スルモノニアラス」原審ハ少クトモ被告等カ明治三十五年法律第三十三號輸入原料砂糖戻稅法案通過ニ付テ運動シタルコトハ會社ノ爲メナルコトヲ認メラレタリ蓋シ是會社ノ死活問題タルハ殆ト說明ヲ要セサルナリ然ラハ即チ原審ハ宜シク進ンテ被告等ノ行動カ果シテ會社ノ利益トナリシヤ將タ損害トナリシヤヲ定メラレサル限リハ被告等ノ文書僞造罪ヲ構成スルモノト判斷シ得ラルヘキノニアラサルハ前記御院ノ判例ニ徵スルモ亦明白ナルニ不拘原院カ之ヲ究メスシテ被告等ノ文書僞造罪ヲ判斷セラレタルハ不法ナリト云フニ在リ○然レトモ文書僞造行使罪ハ文書ノ眞正ニ對スル公ノ信用ヲ害スル犯罪ナレハ苟モ僞造行使ノ行爲アリタル以上ハ公ノ信用ヲ害シ若クハ害スル虞ア

ルモノニシテ作成名義ヲ冒用セラレタル他人ノ方面ニ於テ損害ヲ生セス却テ利益ヲ生シ得ヘキ場合アリトスルモ文書僞造行使罪ノ成立ヲ妨クルモノニ非ス原判決ノ判示スル如ク被告等カ會社取締役ノ權限外ニ於テ其資格ヲ冒シテ小切手ヲ振出シ之ヲ取引銀行ニ呈示シタルトキハ其僞造及ヒ行使ニ因リテ公ノ信用ヲ害シタルモノニシテ其事實ノ判示アル以上ハ其結果會社ニ利益ヲ生セシメタルヤ將タ損害ヲ蒙ラシメタルヤハ小切手僞造行使罪ノ構成ニ付判定ヲ要セサルノミナラス右小切手ノ振出ニ因リ何等會社ヲ利スル所ナク却テ取引銀行トノ計算上會社ノ負擔ニ歸セシメタル事實ハ原判決ニ依テ之ヲ認ムルニ難カラス論旨ハ理由ナシ

第十原判決ニハ詐欺取財罪トナラサル行爲ヲ詐欺取財罪トシタル不法アリ原判決第一事實ノ部ニ「前略音介一裕ハ右法律案ノ成立ヲ以テ大日本製糖株式會社ノ死活ニ關スル問題トナシ同シク同會社ノ取締役ニシテ原審共同被告タリシ伊藤茂七等ト共謀シ衆議院議員ニ贈賄シテ右法案ノ通過ニ贊成セシメントシ連續シテ先ツ明治四十年一月三十一日ヨリ同年五月四日ニ至ル間前顯大日本製糖株式會社ノ營業ニ於テ被告音介ノ同會社專務取締役タル資格ヲ冒シ云云各銀行員ヲシテ宛モ右各小切手カ取締役ノ業務執行上正當ナル權限內ニ於テ適法ニ發行セラレタルモノノ如ク誤信セシメ各銀行ヨリ合計金十一萬七千五百圓ノ交付ヲ受ケ之ヲ騙取シ云云」トアリ又第三事實ノ部ニ「前略被告音介一裕ハ之レ畢竟會社ノ議會ニ對スル緣故ノ薄キニ職由スルモノナレハ寧ロ會社員ヲ議員ニ出シ會社ト懇意ナル人ヲ議員タラシメハ議會ニ現ハルル會社ノ利害問題ニ關シ便宜多カルヘシトシ明治四十一年中衆議院議員ノ總選擧ニ際シ同會社ノ金ヲ支出シテ同會社ヨリ被告音介

一裕ノ兩名自ラ候補者ニ立チ尙ホ他ノ同會社ト懇意ナル候補者ニ選擧費用ヲ贈與センコトヲ同會社常務取締役ニシテ原審共同被告タリシ高津久右衞門等ト共謀シ連續シテ先ツ明治四十一年二月二十五日ヨリ同年五月五日ニ至ル間前顯同會社ノ營業所ニ於テ被告一裕ノ同會社取締役タル資格ヲ冒シ云云被告音介ノ同會社專務取締役タル資格ヲ冒シテ云云各銀行員ヲシテ宛モ右各小切手カ取締役ノ業務執行上正當ナル權限內ニ於テ適法ニ發行セラレタルカ如ク誤信セシメ各銀行ヨリ合計金五萬六千五百圓ノ交付ヲ受ケ之ヲ騙取シタリ」トアリ而シテ之カ法律適用ハ舊刑法第三百九十條第一項第三百九十四條刑法第二百四十六條第一項ニ該當スルモノ即チ詐欺取財罪詐欺罪ナリトセラレタリ然レトモ持ニ小切手契約ナルモノハ當座預金ヲナス者ニ對シ銀行ヨリ交付シタル小切手用紙ノ形式要件ヲ具ヘタル小切手ノ呈示アルトキハ銀行ハ預金ノ存スル程度ニ於テ支拂ノ義務ヲ約スルモノニシテ其振出原因ノ如キハ小切手契約ノ要件ニアラス故ニ銀行カ小切手ノ呈示ヲ受クルヤ單ニ形式要件ヲ調査シ其振出ノ原因ノ如キハ固ヨリ寸毫ノ注意ヲ拂フモノニ非ス又拂フノ要ナキナリ如斯小切手振出ノ原因ハ銀行ノ注意事項外ニ屬スルコトナレハ此點ニ付銀行ニ誤信アルモナキモ全ク問題トナラサルモノニシテ此間詐欺ノ手段行ハルヘクモアラス又想像スヘクモアラス畢竟之レ小切手其物ノ性質ヨリ然ラサルヲ得ス然リ被告等ノ行爲即チ原審認定ノ如ク正當ナル會社ノ業務執行ニアラスシテ小切手ヲ振出シタリトスルモ詐欺ノ手段行ハルル餘地ナク從テ又錯誤ニ陷ル銀行員アルヘキモノニ非サレハ此點ヨリ見ルモ被告ノ行爲ハ詐欺罪ニ非ス畢竟被告カ如上ノ如キ意思ニテ引出シタル金員亦會社

ノ金員タルヲ失ハサルナリ又右ノ如キ小切手ニ對シ支拂ヒタル銀行ハ實ニ有效ナル法津上ノ辨濟ヲ爲シタルモノニシテ詐欺ノ被害者ニアラサルナリ何トナレハ上述ノ如ク小切手契約ニ基ク理由ノ外被告等ノ代表シタルハ會社ニシテ無形ノ法人ナレハ其所有財產一切ノ占有ハ實ニ取締役ニヨリ行ハレ會社債權ノ準占有者トナリ得ルモノモ亦タ被告等ナレハ此輩ニ過失アルモ將タ故意アルモ尙ホ會社債權ノ準占有者ニ對シ銀行ハ支拂ヒタルモノナレハナリ斯ノ如ク銀行ノ支拂有效ナレハ銀行ハ決シテ被害者ニアラス被害ナキ詐欺罪吾新舊刑法ノ何所ニ規定セラレアルヤ元來取締役カ會社ノ金員ヲ保管スルニ付テハ之ヲ銀行預金トスルモ將タ又現金ノ儘トスルモ其ノ管理方法ノ異ナルノミニテ取締役カ之ヲ處分スルノ法律上ノ關係ハ何レモ同一ニシテ之ヲ不法ニ處分セハ共ニ銀行金員ノ費消ニ過キサルナリ以上ノ如ク何等詐欺ノ手段當事者ニ行ハレス又被詐欺者ニ何等被害ナク單ニ小切手振出人ノ意思ノ作用ノミニテ詐欺罪成立スルモノトセハ設令ハ會社ニ株金拂込ノアル場合當初ヨリ此拂込金ヲ議員ニ贈賄スルノ趣旨ヲ以テ之カ拂込ヲ受ケ直チニ議員ニ贈賄シタリトセンカ拂込株主ハ詐欺ノ被害者トナリ拂込ヲ受ケタル者ハ詐欺者トナリ了ル筋合トナル又會社ノ爲メ保管シタル金員ヲ費消センカ正當ノ職務執行ノ意思ナキ何等ノ資格ナキモノノ費消トナルカ故費消罪ハ成立セスシテ却テ竊盜罪ノ或立スルコトトナル天下豈如斯奇觀アランヤ要スルニ原審ノ詐欺罪ト認メラレタルハ全ク事實ノ上ニ立論セスシテ徒ラニ空想ニ流レ終ニ詐欺罪トナラサルモノヲ詐欺罪ト爲シタル不法アルヲ免レスト云フニ在リ

按スルニ代理人カ其權限外ノ行爲ヲ爲シタル場合ト雖モ第三者カ其權限ナリト信スヘキ正當ノ理

由ヲ有セシトキハ本人ハ代理人ト第三者トノ間ニ爲シタル行爲ニ付キ其責ニ任スルヲ原則ト爲ス（民法第百十條）カ故ニ會社ノ代表機關タル取締役ハ其權限外ニ於テ取締役ノ資格ヲ冒用シテ小切手ヲ振出シ之ヲ會社ト小切手契約ヲ締結セル銀行ニ呈示シ該銀行ニ於テ小切手ノ形式的條件ヲ調査シ取締役カ適法ニ振出シタルモノト認メ之カ支拂ヲ爲シタル場合ニ於テハ其支拂ハ有效ニシテ會社ハ取締役カ其權限外ニ於テ振出シタル小切手ニ對シテ責ニ任セサルヘカラス故ニ銀行ハ支拂ニ對シテ會社ノ預金ニ付キ計算ヲ遂ケ毫モ損失ヲ受クルコトナク會社ハ之ニ因リテ其預金減少ノ結果ヲ來スモノトス而シテ本件ニ於テ被告ハ僞造シタル其取締役名義ノ小切手ヲ行使シテ會社ノ取引銀行ヨリ支拂ヲ受ケタル事實ハ前示ノ場合ニ該當スルヲ以テ銀行ハ支拂ニ因リテ少シモ損失ヲ受ケサルコトハ所論ノ如シ然レトモ之カ爲メニ被告ノ詐欺罪ハ其成立ヲ妨ケラルルコトナシ被告ハ取締役名義ヲ以テ僞造シタル小切手ヲ行使シテ銀行ヲシテ適法ニ振出シタル小切手ナリト信シ支拂ヲ爲スニ至ラシメタル者ニシテ銀行ヲ欺罔シテ金圓ヲ騙取シタルモノニ外ナラス何トナレハ支拂人ハ小切手ノ實質的要件ヲ調査スルノ義務ナク苟モ其形式的要件ニシテ完備スル以上ハ有效ニ支拂ヲ爲シ得ルヲ以テ僞造行爲ニ因リテ小切手ノ形式的要件ヲ完備シ之ヲ呈示シテ支拂ヲ爲サシムルハ詐欺ノ手段ヲ以テ支拂人ヲ欺罔シ金圓ヲ交付セシムルモノナレハナリ而シテ詐欺罪ハ他人ヲ欺罔シテ財物ヲ交付セシムル事實アルヲ以テ足リ財物交付ニ因リテ相手方ニ損害ヲ生スルコトヲ必要トセス其結果カ利害關係ノ存スル第三者ノ方面ニ發生スルモ詐欺罪ノ成立ニ消長ヲ來ササルモノトス本件ニ於テ被告カ僞造小切手ノ行使ニ因リテ銀行ヲ欺罔シ金圓ヲ交付セシメタル

取締役ノ不法行爲ニ對スル會社ノ責任

事實アル以上ハ銀行カ其損害ヲ負擔セス之ヲ結局會社ノ損失ニ歸セシムルモ被告ノ詐欺罪ニハ何等ノ影響ナケレハ論旨ハ理由ナシ

●誣告事件　明治四十五年(れ)第一〇三三號　明治四十五年七月一日判決（棄却）

判決要旨

一、誣告罪ハ公ノ法益ヲ侵害スルト同時ニ私人ノ名譽信用ニ對スル私ノ法益ヲ侵害スルモノナルヲ以テ唯一ノ誣告行爲カ誣告罪ノ罪名ニ觸ルル箇數ヲ測定センニハ私ノ法益ヲ侵害スルノ個數ニヨリ之ヲ量定セサル可ラス

一、一人ニ對シ一個ノ行爲ヲ以テ贈賄及竊盜教唆ニ關スル虚僞ノ事實ヲ誣告スルハ則チ一ノ名譽信用ニ對スル私ノ法益ヲ侵害スルニ過キサルヲ以テ一罪ヲ以テ論スヘキモノトス

大審院ハ誣告罪ハ公ノ法益ヲ侵害スルト同時ニ私ノ法益ヲ侵害スルモノナリト斷シ之レニ關スル一個ノ行爲カ誣告ノ罪名ニ觸ルル個數ヲ測定センニハ私ノ法益侵害ノ方面ニ就キ之ヲ計量スヘキモノト論決セラレタリ

大審院カ誣告罪ハ公私兩面ノ法益ヲ侵害スルモノナリト云フハ善シ然レトモ之レニ關スル一個ノ行爲カ誣告罪ノ罪名ニ觸ル、個數ヲ量定センニハ私ノ法益侵害ノ方面ヨリ見テ其ノ個數ヲ量定セサル可ラスト云フニ至テハ余輩其ノ何ノ故タルヲ解スル能ハス。抑犯罪ノ一個ナリヤ數個ナリヤハ刑法處定ノ罪名ニ抵觸スル個數ニヨリ之ヲ定ムヘキハ當時諸學者ノ異論ナキ所トス然ラハ其ノ抵觸スル所ノ數私ノ法益ニ付テハ一個ナリトスルモ公ノ法益ニ付キ二個以上ノ抵觸アリトセハ之レニ二以上ノ犯罪ヲ認ムルニ何ノ妨カ之レアランタヽニ妨ケナキノミナラス之ヲ認ムルヲ以テ我カ刑法ノ精神ヲ得タルモノト論決スルノ至當ナルヲ信ス果シテ然ラハ公私何レノ法益ヲ問ハス抵觸スル所多キニ從テ計量スヘク之ヲ一方ニ偏局セサル可ラサルノ理何處ニアルカ是レ余輩ノ說アル所以也

第一審　仙臺地方裁判所石卷支部　第二審　宮城控訴院

被告人　櫻井喜三郎　辯護人　布施辰治

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

誣告罪ノ一罪數罪

理由

辯護人布施辰治上告趣意書第二點原判決ノ事實認定ニ依レハ「……巡査伊藤篤三郎カ本田常雄相澤新作ノ兩名ヲ取調ヘタル上新作ヲ放還セルハ失當ノ措置ナリトシ同巡査及下記ノ者等ヲシテ各刑事ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ明治四十五年一月二十九日石巻區裁判所檢事局ニ宛テ右新作ノ放還セラレタルハ前記警察署員ニ於テ金三十圓ヲ收賄シタルニ因ル旨及右新作ハ前記竊盜所爲ノ教唆外數名ハ亦右連累者ナル旨……」トアリテ即チ被告ハ(一)伊藤篤三郎ニ收賄(二)(イ)相澤新作等ニ竊盜ノ教唆又ハ連累(二)伊藤篤三郎ニ對スル贈賄ノ犯罪アリタルモノノ如ク判示セルニ其後段法律適用ノ部ヲ閲スルニ「被告カ判示數名ヲ誣告シタル所爲ハ」云云トアリ被誣告者ノ數ニ應シテ數罪名ニ觸ルルモノノ如ク說示シ少クモ相澤新作ニ對スル贈賄及竊盜教唆ナル二个ノ誣告ニ付テノ數罪名ニ觸ルルノ擬律ヲ爲ササルカ如キハ要スルニ犯罪事實ノ認定ニ明瞭ヲ缺クノ失當アルニ該當シ破毀ヲ免レサル不法判決ナリト云フニ在レトモ○誣告罪ハ一方國家ノ裁判ニ對スル公ノ法益侵害タルト同時ニ他方ニ於テ個人ノ名譽信用ニ對スル私ノ法益侵害タルヘキ行爲ニシテ之ニ關スル一箇ノ行爲カ誣告ノ罪名ニ觸ルル箇數ヲ測定スルニハ私ノ法益侵害ノ側面ニ就キ計量スヘキモノトス故ニ一人ニ對シ一箇ノ行爲ヲ以テ贈賄及竊盜教唆ニ關スル虛僞ノ事實ヲ擧ケテ誣告ヲ爲スニ於テハ即チ一箇ノ名譽信用ニ對スル私ノ法益侵害スルカ故ニ一箇ノ罪名ニ觸ルルニ止マリ數箇ノ罪名ニ觸ルルコトナキノミナラス原判決ハ被告カ新作ニ對シ竊盜教唆ヲ以テ誣告シタルモノト認定シタルニ止マルコトハ判文上洵ニ明白ナルヲ以テ本論旨ハ謂ハレナシ

◎文書僞造行使詐欺事件　明治四十五年(れ)第一一八二號　明治四十五年七月二日宣告（棄却）

判決要旨

一、文書僞造ノ場合ニ於ケル作成名義人ノ署名ハ必スシモ其氏ト名ヲ併記スルヲ要セス何人カ此文書ヲ作成シタルカヲ識別スルコトヲ得ル程度ニ於テ之ヲ記表スルヲ以テ足ル

第一審　和歌山地方裁判所田邊支部　第二審　大阪控訴院

被告人　西義重

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

被告上告趣意書第一點原判文ニ「右小供ノ母中本チヨノノ名義ヲ冒用シテ前記趣旨ノ手紙ヲ認メ中本名下ニ自己ノ印ヲ押捺シテ文書（第一號）ヲ僞造シ」トアレトモ其手紙ト稱セラルル文書ニハ單ニ中本トノミ記載シ中本チヨノナル名義ノ記載ナキニ拘ラス原判決ニ前記ノ如ク中本チヨノノ名義ヲ冒用シト斷定セラレタルハ不當ニ事實ヲ確定シタル不法ノ裁判ナリト云ヒ」第二點凡ソ

文書ノ僞造ト作成名義人ノ署名

文書偽造ナルモノハ或ハ官公署或ハ官吏或ハ私人一見其文書ニ依テ某甲タルコトヲ何人ニモ認メ得ラルヘク依テ以テ其信用ヲ害スルニ足ルヘキモノタラサル可カラス然ルニ今上告人カ偽造セシト稱セラルル文書ハ單ニ中本ト記名スルノミニシテ何人カ閲見スルモ以テ中本チョノカ發送シタル手紙ナリト推定スル能ハス隨テ中本チョノノ信用ヲ害スルニ足ラサル者ナリ故ニ假ニ上告人カ斯ル文書ヲ作製シ以テ中本チョノノ書信ナリトシテ被害者ニ提供シタリトスルモ是只詐欺ノ材料タルニ過キス文書偽造ヲ以テ論スヘキモノニ非ス然ルニ原院カ擬スルニ文書偽造ノ罪ヲ以テセラレタルハ擬律錯誤ノ判決ナリト思料スト云フニ在レトモ○氏若クハ名ノミヲ以テスルモ其人ヲ表彰スルニ足ルカ故ニ氏若クハ名ノミヲ表記スルモ刑法ニ在テハ之ヲ署名ニ非スト云フヲ得ス從テ文書偽造ノ場合ニ於ケル作成名義人ノ署名ナルモノハ必スシモ其氏ト名ヲ併記スルコトヲ要セス何人カ此文書ヲ作成シタルカヲ識別スルコトヲ得ル程度ニ於テ其氏若クハ名ヲ表記スレハ足ル所論ノ手紙ニハ中本トノミ記載シ中本チョノト記載ナキモ原院ハ之ヲ以テ中本チョノ作成名義ノ手紙ナリト識別シ得ヘキ署名ト認メタルモノナレハ原判決ハ所論ノ如キ不法アルコトナク論旨ハ何レモ理由ナシ

◉文書偽造行使詐欺事件

明治四十五年(れ)第一一六一號
明治四十五年六月廿七日判決（棄却）

判決要旨

一、犯人カ自己ノ偽造シタル借用證書ニ自ラ保證人トシテ署名捺印スルモ其ノ根本タル借用證書ニシテ偽造タル以上ハ保證人トシテノ署名捺印モ亦タ其ノ效力ヲ喪失スルヲ以テ右借用證書ハ全部ヲ沒收スヘキモノトス

捺印スルモ其ノ根本タル借用證書ニシテ偽造タル以上ハ保證人トシテノ署名捺印モ亦タ其ノ效力ヲ喪失スルヲ以テ右借用證書ハ全部ヲ沒收スヘキモノトス

說明

偽證書ノ沒收

證書ノ沒收。

一ノ證書中ニ偽造ノ部分ト然ラサル部分トアルトキハ唯其ノ偽造ノ部分ノミヲ沒收シ然ラサル部分ハ推論スルトキハ本件借用證書ノ如キモ其ノ沒收スヘキ部分ハ借主本人ノ署名捺印タル主要部分ニ止マリ保證人ノ署名タル部分ハ沒收スルコト能ハサルニ似タリ何トナレハ借用證書ハ偽造文書タル保證人トシテノ署名捺印ハ犯人カ自己ノ名義ヲ用ヒタルモノナレハ則チ保證書トシテハ偽造文書ニアラサレハナリ然レトモ凡ソ保證ナルモノ主タル債務存立スルニ依リテ始メテ存在スルモノナルニ今主タル債務ハ證書ノ偽造ナルコトニ依リテ存立セサルコト明カナル以上ハ獨リ保證ノミ有效ニ存立スヘキ理ナシ左レハ保證人トシテノ署名捺印ハ偽造ニアラスト雖モ根本タル借用證書カ偽造ナルニ於テハ之レニ署名スル保證ニ付キ保證ノ部分ヲ除外スルノ必要ナシ是レ本判決ノ生スル所以也從テ無效タルヘク則チ保證アラサルト同一ニ歸スルモノナレハ之ヲ沒收スル

第一審　長崎地方裁判所
被告人　蒲原小野吉

第二審　長崎控訴院

右文書偽造行使詐欺被告事件ニ付明治四十五年五月七日長崎控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スルコト左ノ如シ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第二點原判決法律適用ノ部ニ（第一號借用證書ハ刑法第十九條ニ依リ之ヲ沒收シ）トアリ而シテ前段理由ノ部ヲ見ルニ（其偽造ヲ遂ケタル上保證人トシテ自ラ之ニ記名捺印シ明治四十二年八月二十九日）云云トアリ即チ上告人カ保證人トシテ記名捺印シタル部分ハ偽造ニアラサルヘシ然ルニ此部分迄沒收シタルハ法律ニ違背シタルモノナリト云フニ在レトモ○借用證書ニ於ケル保證人ノ署名捺印ハ全然從屬的ノ效用ヲ爲スニ過キサレハ苟モ借主本人ノ署名捺印ノ如キ證書主要ノ部分カ偽造ト爲リタル以上ハ犯人自ラ其偽造ノ借用證書ニ保證人トシテ署名捺印セル部分ハ其效力ヲ喪失シ偽造證書ノ一部分トシテ他ノ偽造ニ係ル部分ト共ニ沒收スルコトヲ妨ケス故ニ原判示事實ニ於テ論旨ニ掲クル如ク借用證書偽造行使ノ事實ヲ認メ而シテ其法律ノ理由ニ於テ右證書ヲ刑法第十九條ニ依リ沒收スル旨判示シタルハ相當ニシテ本論旨ハ理由ナシ

◉横領事件　明治四十五年（れ）第一一八五號　明治四十五年七月一日判決（棄却）

判決要旨

一、横領罪ハ他人ノ物トシテ占有ヲ始メタル者カ爾後擅ニ其ノ物件ヲ自己ノ所有ト爲スノ意思ヲ以テ占有ヲ始メタル者カ之ヲ費消シ又ハ之ニ處分行爲ヲ施スモ竊盜詐欺等ノ他罪ヲ構成スルハ格別横領罪ヲ以テ問擬スルヲ得ス

説明

横領罪ノ成立。横領罪ハ自己ノ占有スル他人ノ物件ヲ爾後自己ノ物トナスノ所爲ヲ云フ左ニ之ヲ分析スヘシ第一自己ノ占有スル他人ノ物ナルコトヲ要ス。横領罪ノ目的タル物件ハ必ス自己ノ占有内ニアラサル物件ハ之ヲ要ス自己ノ占有内ニアル他人ノ物ナルコトヲ要ス又タ横領罪ハ始メ横取スルモ他罪ヲ構成スルハ格別横領罪ヲ構成スルコトナシ他人ノ物トシテ占有シ中途之ヲ自己ノ物トナスノ所爲ヲ云フモノナルカ故ニ假

横領罪ノ成立

他人ノ物ヲ占有スルモ始メヨリ自己ノ物トナスノ意ヲ以テ占有ヲ始メタルトキハ他人ノ罪ヲ構成スルハ格別横領罪ヲ構成セサルナリ然リ而シテ其ノ所謂占有ナルモノハ必スシモ契約ニ基クコトヲ要セス偶然自己ノ占有ニ歸シタル場合モ之レニ包含スヘキモノトス誤テ配達ヲ受ケタル小包郵便物ノ如キ是ナリ要是ニ横領罪ノ目的タル物件ハ約束ニ基クト然ラサルトヲ不問一旦他人ノ物トシテ自己ニ占有ヲ始メタル物件ニ對シ爾後之ヲ自己ノ物トナスノ所爲アルヲ要ス

横領罪ハ自己ノ占有ニアル他人ノ物件ヲ爾後自己ノ物トナスノ義ナリ自己ノ物トナストハ必スシモ自己ノ物トナスノ意ヲ以テ占有ヲ始メタルトキニ限ラス左レハ今單ニ占有意思ノ改定ノミニテハ則チ心意ノ決定タルニ止マリ若シ之レニ表現セス唯意思ノ決定ニ正マルトキハ犯罪ヲ構成スルモノニアラス外部ニ顯ハルヽコトヲ要ス未タ行爲トシテ外部ニ顯ハレサル心內ノ意思ノ改定アルヲ以テ足ル

論者或ハ曰ン凡ソ犯罪ハ必スヤ行爲トシテ外部ニ顯ハレタル行爲ヲ罰シ未タ外部ニ表現セサル心意ノ決定ヲ罰スルノ結果ヲ生シ犯罪成立ノ一大原則ヲ破壞スルニ至ルヘシトンカ則チ心意ノ決定ヲ罰スルコトヲ論者ノ云フ所ノ如シト雖モ占有意思ノ改定ヲ以テ横領罪ノ成立シ被告カ他人ノ爲メニ占有スルヲ止メ爾後之ヲ自己ノ物トナスト意思ヲ有スル

トキハ現ニ占有シツヽアル外部ノ行爲モ亦タ同時ニ此ノ意思ノ支配ニ歸スルモノナレハ占有意思ノ改定ハ唯心內ノ作用ニ止マラス行爲（則チ占有行爲）トシテ外部ニ表現スルモノト云ハサルヲ得ス左レハ占有意思ノ改定ヲ以テ横領ノ所爲アルモノトナスニ妨クル所ナキヤ知ルヘキナリ

（參照）自己ノ占有スル他人ノ物ヲ横領シタル者ハ五年以下ノ懲役ニ處ス（利法第二百五十二條第一項）

業務上自己ノ占有スル他人ノ物ヲ横領シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス（刑法第二百五十三條）

第一審　東京地方裁判所　第二審　東京控訴院

被告人　原常吉　辯護人　添田增男

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

辯護人添田增男上告趣意書二、第一審判決理由ニ「被告三名ハ何レモ東京市牛込區西五軒町染物業小林松五郎方ニ被雇中（中略）被告常吉ハ同年十月頃ヨリ同年十二月初旬迄ノ間ニ同シク主家華客先數个所ニテ受取リタル染物賃金合計四十三圓九十三錢ヲ（中略）主人ニ交付セス意思ヲ繼續シテ前記期間內數度ニ東京市內ニ於テ横領費消シタリ」ト記載シ之ヲ刑法第二百五十二條第一項ニ問擬シタルハ不法ナリ抑モ刑法第二百五十二條第一項ノ横領罪ノ成立スルカ爲メニ自己ノ占有スル他人ノ物ヲ不法ニ領得スルノ意思アルヲ必要トスルハ論ヲ俟タサル所ニシテ本件ニ付テ云

ヘハ上告人カ染物賃ヲ華客先ヨリ受取リタル際ニ於ケル意思ハ主人ノ爲メニ取得シタルモノナルコトヲ要スルモノナリ然ルニ本判決ニ於テハ上告人ノ意思ヲ斷定スルニ足ル事實ヲ明示セス或ハ上告人カ初メヨリ華客先ヲ欺罔シテ自己ノ爲メニ染物賃ヲ領得シタルモノトセハ詐欺ノ罪ヲ構成スルコトアリトスルモ横領罪ヲ構成スルコトナシ即チ横領罪ニハ占有ノ意思カ始メヨリ他人ノモノトシテ占有シタルモノナルコトヲ要素トスルニモ不拘第一審判決カ此ノ罪トナルヘキ事實ヲ明示セサルハ刑事訴訟法第二百三條ニ違犯シタルモノニシテ理由ノ不備タルヲ免カレサルモノナリ然ルニ原判決カ被告ノ控訴ヲ理由ナシトシテ棄却シタルハ違法ナリト云フニ在レトモ○刑法第二百五十二條及ヒ第二百五十三條ノ横領罪ハ目的タル物ハ自己ニ領得スル意思ニ非スシテ占有ヲ始メタルモノナラサルヘカラス而シテ當初ヨリ自己ニ領得スル意思ヲ以テ不法ニ他人ノ物ヲ自己ノ占有ニ歸セシメタル場合ニ於テハ竊盜詐欺其他ノ犯罪成立スヘキモ右物ノ費消其他ノ處分行爲ニ因リテ横領罪ヲ構成スルコトナキヤ勿論ナリ故ニ本件ニシテ被告カ雇主ノ爲メニスル意思ヲ以テセス即チ自己ニ領得スル意思ヲ以テ雇主ノ名義ヲ詐稱シ其華客ヲ欺キ染物賃金ヲ交付セシメタル事實ナラハ被告ノ行爲ハ詐欺罪ニ該當スヘク右金圓ヲ費消スルモ別ニ横領罪ノ成立セサルコト疑ナシト雖モ所揭第一審判決ハ被告カ雇主ノ爲メニ其華客先ヨリ受領シタル染物賃金ヲ雇主ニ交付セスシテ自己ノ用途ニ費消シタル事實即チ自己ニ領得スル意思ニ非スシテ自己ノ占有ニ歸セシメタル金圓ヲ横領シタル事實ヲ判示シタル趣旨ナルヤ洵ニ明ナレハ被告ノ横領罪ヲ認ムル事實理由ノ説示ニ缺クル所ナシ然ラハ右判決ヲ是認シタル原判決ハ相當ニシテ論旨ハ理由ナシ

◉病者遺棄事件

明治四十五年(れ)第一二六二號
明治四十五年七月十六日判決（棄却）

判決要旨

一、疾病ニ罹リ他人ノ扶助ヲ受クルニアラサレハ生存スルコト能ハサル狀態ニ陷リタル者ト同居スル以上ハ縱シヤ法令若クハ契約ニ因ル扶助ノ義務ナシトスルモ之ヲ扶助セスシテ遺棄スルカ如キハ刑法第二百十七條ノ遺棄罪ヲ構成ス

（參照）老幼、不具又ハ疾病ノ爲メ扶助ヲ要ス可キ者ヲ遺棄シタル者ハ一年以下ノ懲役ニ處ス（刑法第二百十七條）

第一審　長野地方裁判所
被告人　長谷川慶篤　外二名

第二審　大阪控訴院
辯護人　山本芳治　清瀨一郎

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第三點本件被告人等ニ對シ病者遺棄罪ヲ以テ問責シタル原判決ハ不法ナリ抑モ病者遺棄罪ノ成立スルニハ病者ヲ遺棄スヘカラサル義務アル者カ之ヲ遺棄スルコトヲ要ス勿論刑法第二百十七條ノ犯罪ハ其構成要件トシテ遺棄者ニ病者ヲ保護スヘキ責任アルコトヲ必要トセスト雖モ而モ扶

遺棄罪ノ構成

助ヲ要スル病者ニ對シ何等扶助ヲ爲スヘキ義務ナキ者カ之ヲ扶助セサリシトテ直ニ病者遺棄罪ヲ成立セシムルモノニサラス又他人カ故ナク家宅内ニ侵入スルヲ拒ミ之ヲ他ノ場所ニ移轉スルハ不法ニアラス從テ偶々其侵入者カ扶養ヲ要スヘキ病者ナリシトテ之カ爲メニ其侵入ヲ拒ミ得サル理由ナシ然ルニ原判決ニ於テ本件被害者タル奈良德次郎カ明治四十四年十二月二十七日被告長谷川慶篤長谷川觀眞ニ解雇セラレ被告兩名ト法律上何等ノ關係ナキニ至リタルコトヲ認メ且右奈良德次郎カ同日午後無斷ニ再ヒ千佛堂ニ立戻リタルコトヲ認メナカラ被告兩名カ右奈良德次郎ノ故ナク自宅内ニ侵入セシヲ拒ミ之ヲ道路ニ移轉シタル行爲ヲ直ニ病者遺棄罪ニ問ヒタルハ法律ノ解釋ヲ誤リタルモノト云ハサルヲ得ス此點ニ於テ原判決ハ廢棄セラレ本件被告等ハ無罪ノ言渡ヲ受クヘキモノトスト云フニ在レトモ

◎原判決ニ認メタル事實ニ依レハ奈良德次郎ハ肺結核病ノ爲メ身體衰弱シ業務ニ服スル能ハサルハ勿論他ノ扶助ヲ受クルニアラサレハ生存スル能ハサル狀態ニ陷リ被告等ノ住所ナル敎信寺境内千佛堂ニ寢臥シ居タルモノナルヲ以テ縱シヤ被告等ニ法令若クハ契約ニ基ク扶助ノ義務ナシトスルモ之ヲ扶助セスシテ遺棄スルカ如キハ善良ノ風俗ヲ害スルコトハ甚シキモノニシテ刑法第二百十七條ニ所謂疾病ノ爲メ扶助ヲ要ス可キ者ヲ遺棄シタル者ニ該當スルコト論ヲ俟タス故ニ本論ハ理由ナシ

◉詐欺幷附帶私訴事件

明治四十五年(れ)第一二七三號
明治四十五年七月十九日判決（棄却）

判決要旨

一、連續犯ハ同一ノ行爲ヲ數回反覆スルニ因テ成立スルモノナレハ連續犯中ノ或ル一個ノ行爲ニノミ共謀加工シタル者ノ行爲ハ單一ノ犯罪ヲ構成シ連續犯ヲ以テ處斷スルヲ得ス

第一審　名古屋地方裁判所
第二審　名古屋控訴院

公訴私訴上告人　山田信吉
私訴被上告人　岩井泰一郎

判決

本件公訴及ヒ私訴ノ上告ハ共ニ之ヲ棄却ス

理由

公訴上告趣意書第一點原院判決ニ依レハ靜岡縣周智郡氣多村豐岡字神頭五百八十五番山林反別八町歩及ヒ同村石切大字井平三百七十八番山林反別三町七反三畝十歩ノ山林ヲ岩井泰一郎ニ賣買ニヨリ所有權ヲ移轉スルモノトナシ以テ金一百圓ヲ手附トシテ金一百圓九百圓六百圓ノ約束手形各一通及ヒ現金二百四十餘圓ヲ賣買代金名義ノ下ニ右泰一郎ヨリ騙取シタル行爲ハ若林市松栗下嘯五郎小泉卯八三名共謀ノ行爲ニシテ該行爲ニ對シ上告人ノ干與シタルコトヲ認ムヘキ點毫モアラサルコトハ該判決中「尙被告三名ハ泰一郎カ山林ヲ買受クルハ之ヲ他ニ轉賣シ利益ヲ得ントスルニ在ルヲ知ルヨリ之ヲ利用シ泰一郎ヲシテ尙多數ノ山林ヲ買取ラシメ其賣買名義ノ下ニ泰一ヨリ金員ヲ騙取スルノ目的ニテ犯意ヲ繼續シ」云云トアルニ徵シ明瞭ナリ然ルニ原院ハ前記市松

外二名ノ犯行ニ上告人モ干與シタルカ如ク「更ニ被告四名ハ意思繼續ノ上」云云ト判定シ他人ノ犯行ヲ上告人ニ歸セシメ不當ニ法律ヲ適用シタルハ違法ノ判決ト思料スト云フニ在リ○按スルニ連續犯ハ同一行爲ヲ數回反覆スルニ因リテ成立スルモノナレハ連續犯ヲ構成スル數箇ノ行爲中ノ一ノミニ共謀加功シタル者ノ行爲ハ單一ノ犯罪ヲ構成シ連續犯ヲ以テ之ヲ論スルヲ得サルヤ洵ニ疑ヲ容レスト雖モ原判決ノ判示セル事實ハ被告ハ所揭原審相被告若林市松外二名ノ詐欺行爲ニ共謀加功シタリト云フニ非スシテ右相被告等カ前示詐欺ノ意思ヲ繼續シテ實行セル數箇ノ詐欺行爲ニ共謀加功シタリト云フニ在リテ被告カ一箇ノ連續犯ヲ構成スル數行爲ニ干與シタルコト明ナレハ原判決カ被告ノ行爲ヲ詐欺ノ連續犯ニ問擬シタルハ相當ニシテ論旨ハ理由ナシ

◉名譽及信用毀損事件

明治四十五年(れ)第一一一二號
明治四十五年七月二十五日判決（破毀）

判決要旨

一、法人ニアラサル團體ノ信用ヲ毀損スル行爲ハ取リモ直サス團體ヲ組織スル各人ノ信用ヲ毀損スルモノナレハ均シク信用毀損罪ヲ構成ス

一、刑法第二百三十三條ノ罪ハ虛僞ノ風說ヲ流布シ又ハ僞計ヲ以テ他人ノ信用ヲ毀損スルニ依リテ成立スヘク必スシモ具

體的ニ不正ノ事實ヲ指摘スルヲ要セス

一、親告罪ハ告訴ヲ取下ルトキハ公訴權ヲ消滅セシムルノ效果ヲ生スルモノナレハ告訴取下後當該事件ニ對シ刑法第五十四條ヲ適用シタルハ違法ナリ

（參照）一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸レ又ハ犯罪ノ手段若クハ結果タル行爲ニシテ他ノ罪名ニ觸レタルトキハ其最モ重キ刑ヲ以テ處斷ス（刑法第五十四條第一項）

第一審　甲府地方裁判所
被告人　石原宗平

第二審　東京控訴院
辯護人　上原鹿造

判決

原判決ヲ破毀ス

被告人ヲ罰金六十圓ニ處ス

右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ六十日間被告人ヲ勞役場ニ留置ス押收品ハ各所有者ニ還付ス

公訴裁判費ハ被告人ノ負擔トス

理由

辯護人上原鹿造上告理由書第一點刑法第二百三十三條ニハ人ノ信用ヲ毀損シ云云トアルカ故ニ同信用毀損罪ノ構成○名譽及信用毀損事件ニ於ケル告訴ノ取下

條ノ犯罪ハ限定シタル有形人又ハ法人カ被害者ナルコトヲ要スルハ勿論ナリ單ニ同業者全體又ハ人格ナキ或團體ニ對シ犯罪的行爲アリトスルモ同條ヲ適用スヘキモノニアラス然ルニ原判決カ被告ノ掲ケタル記事カ甲府市水晶業者ナル團體ニ關スルモノナルコトヲ認メナカラ尙同條ニ包含スルモノト認定シタルハ不法ナリ而シテ前掲法條ノ規定ハ何レモ具體的ノ事實ヲ摘示シテ人ノ名譽信用ヲ毀損スル場合ヲ意味シタルモノニシテ單ニ何某ハ不信用ナリトカ某商店ハ粗製品ヲ濫賣スルト云ヘル如キ一般的文字ヲ羅列シテ人ヲ攻擊シタリトテ同條ノ制裁ヲ受クヘキモノニアラス果シテ然ラハ原判決認定ノ如キ事實アリトスルモ記事其モノカ犯罪ヲ構成スヘキモノニアラサルニ尙ホ之ヲ有罪視シタハ不法ナリト云フニ在レトモ○原判決所揭ノ甲斐物產商報第百十六號ニハ「我カ商會ト他ノ商店」ト題スルノミナラス「我水晶業者ハ問屋ト云ハス小賣商店ト云ハス將タ亦商工兼業者ト云ハス甲乙丙丁那レモ云云」ト記述シアリテ同記事ニ依リ信用ヲ毀損セラレタルハ甲府市水晶業者ノ體團ニ非スシテ原判決ニ認ムル如ク甲府市水晶業者ノ全部即チ坂本兩柄外二十三名ナルコト洵ニ明瞭ナルノミナラス假リニ論旨ノ如ク信用ヲ毀損セラレタルハ水晶業者ノ團體ナリトスルモ法人ニアラサル團體ノ信用ヲ毀損スルハ團體ヲ組織スル各人ノ信用ヲ毀損スルモノニシテ均シク刑法第二百三十三條ノ罪ヲ構成スルコト論ヲ俟タス又同罪ノ成立ニ就テハ虛僞ノ風說ヲ流布シ又ハ僞計ヲ以テ他人ノ信用ヲ毀損スルコトヲ要スルノミ其之ヲ毀損スルニ付必スシモ具體的不正ノ事實即チ一定ノ不正行爲ヲ指摘スルコトヲ要スルモノニアラス而シテ判示商報ノ記事ニハ「前略彼等ハ常ニ法外ナル利益ヲ壟斷スレハ後ハ野トナレ山トナレ我不關焉タル有樣誠ニ

彼等ニ取ツテハ都合ノ好イ遣リ口タカ大方識者ヨリハ職業ニ不忠顧客ニ不信トシテ爪彈サレルノテアル云云如斯商店ト取引スルハ損アツテ益ナキ事テアル乃テ我商會ノ行爲如何ト云フニ常ニ誠意ト實直トヲ旨トシ云云」トアリテ甲府市水晶業者ノ信用ヲ毀損シ併セテ其業務ヲ妨害スルニ足ルモノナルコト別ニ說明ヲ要セサレハ本論旨ハ前段後段共ニ其理由ナシ

第三點本件ノ如ク一ノ雜誌ニ或記事ヲ揭ケ其記事カ偶々數人ノ名譽信用ヲ害スルコトアリトスルモ其行爲ハ數人ヲ一團トシテ包括的ニ攻擊シタルニ止マリ其各人ニ對スル犯罪カ各別ニ成立スヘキモノニアラス唯一箇ノ行爲ニシテ數箇ノ罪名ニ觸ルル場合アリトスルモ一罪カ更ニ數箇ニ分割サレテ數箇ノ犯罪カ成立スル謂ハレナシ然ルニ原判決ハ之ヲ反對ニ解釋シ最モ重キ土屋愛造ニ對スル犯罪ヲ以テ刑ノ標準トナシタルモノニシテ此點ハ破毀ヲ免レサルモノト信スト云フニ在レトモ○第一點論旨ニ對シ說明スル如ク被告ハ一箇ノ商報ノ記事ニ依リ水晶業者各自ヲ攻擊シ因テ各自ノ信用ヲ各別ニ毀損シタルモノナレハ之ヲ包括シテ一箇ナリト論スルコトヲ許サス然レハ原院カ數箇ノ信用毀損罪ヲ構成スルモノト認メ刑法第五十四條ヲ適用シ一ノ重キ刑ヲ以テ處斷シタルハ正當ナリト雖モ本件各被害者ハ明治四十五年七月九日其告訴ニ係ル名譽及信用毀損被告事件ニ付告訴ノ取下ヲ爲シタルヲ以テ訴追條件トシテ被害者ノ申告ヲ要スル名譽毀損ノ罪ニ對スル公訴權ハ茲ニ消滅ニ歸シタリ故ニ一箇ノ判示商報記事ニ依リ判示各被害者ノ名譽ト信用トヲ毀損シタルモノトシテ刑法第五十四條ヲ適用シタル原判決ハ結局擬律錯誤ノ不法アルニ歸シ破毀ヲ免レサルモノトス

●僞證事件

明治四十五年(れ)第一二八二號
明治四十五年七月二十三日宣告（棄却）

判決要旨

一、第二審裁判所ニ於テ第一審判決後ノ未決勾留日數ヲ本刑ニ算入スヘキモノト判定スルモ之カ爲メ第一審判決ニ於テ言渡シタル刑ノ內容ニ毫モ變更ヲ及ホササルハ勿論其他ノ判定ニモ影響ヲ及ホササルヲ以テ第一審判決ヲ取消スノ要ナシ

一、第一審裁判所カ其審理中ニ屬スル未決勾留日數ヲ刑期ニ算入スルノ言渡ヲ爲ササリシ場合ニ於テ第二審裁判所カ之ヲ本刑ニ算入スヘキモノト判定シタルトキハ第二審裁判所ハ勾留日數算入ノ當否ニ付キ第一審裁判所ト所見ヲ異ニスルニ至ルヲ以テ第一審判決ヲ取消ササルヘカラス

一、刑法第百六十九條ノ僞證罪ヲ成立スルニハ證人カ法律ニ從

ヒ宣誓シタルコト及ヒ故意ニ虛僞ノ陳述ヲ爲シタルコトヲ以テ足リ宣誓カ陳述前ニ在ルト其後ニ在ルトハ本罪ノ構成ニ影響ヲ及ホスコトナシ

（參照）法律ニ依リ宣誓シタル證人虛僞ノ陳述ヲ爲シタルトキハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス（刑法第百六十九條）

一、裁判所カ被告人ノ利益ノ爲メニ呼出シタル證人ヲ訊問シタル場合ニ於テハ其證言ニ付キ被告人自ラ意見ヲ陳述シ又ハ利益ノ證憑ヲ差出スハ格別ナリト雖モ裁判所ハ重ネテ刑事訴訟法第百九十八條ニ依ル告知ヲ爲スコトヲ要セス

（參照）裁判長ハ各證憑ノ取調終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヤヲ問ヒ且其利益ト爲ル可キ證憑ヲ差出スヲ得ヘキコトヲ告知ス可シ（刑事訴訟法第百九十八條第一項）

第一審　大阪地方裁判所
被告人　齋藤房藏

第二審　大阪控訴院
辯護人　横山鑛太郎

右僞證被告事件ニ付明治四十五年五月二十二日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告及原院檢事長水上長次郎ハ上告ヲ爲シタリ因テ判決スル左ノ如シ

判決

本件上告ハ共ニ之ヲ棄却ス

未決勾留日數算入ノ言渡ト前審判決ノ取消○僞證罪ノ構成ト宣誓ノ時期○刑事訴訟法第百九十八條ノ告知三五三

理由

原院檢事長水上長次郎上告趣意書原院ハ第一審裁判所カ未決勾留日數中ノ幾部ヲ本刑ニ算入セサリシヲ失當ナリトシ第一審判決ヲ取消シ更ニ之ト同一ノ事實確定法律適用ヲ爲シ仍刑法第二十一條ヲ適用シ第一審判決前未決勾留日數ノ中六十日ヲ算入スル旨ノ判決ヲ爲シタリ按スルニ刑法第二十一條ニ依ル未決勾留日數ノ算入ハ本刑分量ヲ變更スルニアラスシテ單ニ算入日數ニ付本刑ヲ執行シタルモノト見做スニ過キス即チ刑ノ內容ニ關スル規定アラスシテ刑ノ執行方法ニ關スル規定ニ外ナラサルコトハ御院判例ノ示ス所ナリ（四十三年(れ)第二五九號四十四年二月二十七日宣告及四十四年(れ)第二一八號四十四年十一月二十日宣告）既ニ未決勾留日數算入ノ性質ニシテ斯ノ如クナレハ第一審判決後ノ日數ヲ算入スル場合ト其以前ノ日數ヲ算入スル場合トニヨリ其判決效力ニ區別ヲ生ズヘキノ理ナシ元來未決勾留日數ノ算入ハ被告事件審理經過ノ狀況ニ應シ各審級ニ於テ職權上決スヘキモノナレハ第二審裁判所ニ於テ假リニ第一審判決前ノ未決勾留日數ヲモ算入スル場合ト雖モ同シク是單ニ事件ノ進行上未決勾留ノ算入ニ關シ所見ヲ異ニシタルニ止マリ第一審ノ犯罪事實ノ認定該事實ニ對スル法律ノ適用及科刑等ノ處分ニ何等異動ヲ生セサルモノナルヲ以テ刑事訴訟法第二百六十一條第一項ニ從ヒ控訴ヲ理由ナシトシテ棄却スヘキモノナルニ同判決茲ニ出スシテ同條第二項ヲ適用シテ第一審判決ヲ取消シタルハ不當ニ法律ヲ適用シタル違法ノ判決ナリト思料スト云フニ在リ○按スルニ刑法第二十一條ニ於ケル未決勾留日數ヲ本刑ニ算入スル規定ハ刑ノ內容ニ關スルモノニ非ス刑ノ執行方法ニ關スルモノニ外ナラス而シテ未決勾留ノ

日數ヲ本刑ニ算入スルト否トハ犯罪ノ情狀ニ存セス事件進行ノ狀況ニ因ルヘキコトハ所揭本院判例ニ於テ判示スル所ナリ故ニ第二審裁判所ニ於テ事件進行ノ狀況ニ因リ第一審判決後ニ於ケル未決勾留ノ日數ヲ本刑ニ算入スヘキモノト判斷シ新タニ其旨ヲ判示シタル場合ト雖モ之カ爲メニ第一審判決ニ於テ言渡シタル刑ノ內容ニ毫モ變更ヲ及ホサルハ勿論其他ノ判定ニモ影響ヲ生セサルヲ以テ第一審判決ヲ取消スノ理由ト爲ラサルハ當然ナリ然レトモ第一審裁判所カ其審理中ニ屬スル未決勾留ノ日數ハ本刑ニ算入スヘキ事情ナシト判斷シ其算入ノ言渡ヲ爲ササリシ場合ニ於テ第二審裁判所カ第一審判決前ニ於ケル事件進行ノ狀況ヲ酌酌シテ同判決言渡前ニ於ケル未決勾留ノ日數ヲ本刑ニ算入スヘキモノト判定シタルトキハ同一判斷ニ出ラサリシ第一審判決ヲ失當トシテ之ヲ取消スノ措置ヲ取ルハ蓋シ當然ナリ何トナレハ同一審級ニ於ケル事件進行ノ狀況カ其未決勾留ノ日數ヲ本刑ニ算入スルニ適當ナルヤ否ヤニ就キ第一審及第二審カ互ニ見解ヲ異ニセル結果其判斷ノ積極的ナルト消極的ナルトハ縱令刑ノ內容ニ變更ヲ及ホサルモ直ニ刑ノ執行上ニ影響ヲ及ホシ被告人ノ利害ニ多大ノ消長ヲ來セハナリ故ニ上叙ノ場合ニ於テ同一審理事項ニ付第二審判決ト判定ヲ異ニセル第一審判決ハ須ク之ヲ取消ササルヘカラス而シテ夫ノ第二審判決ニ於テ第一審判決後ニ於テ新タニ生セル事件進行ノ狀況ニ因リ其未決勾留ノ日數ヲ本刑ニ算入スヘキモノト判示スルモ之カ爲メニ第一審判決ニ於ケル科刑其他ノ判定ニ影響ヲ及ホサルヲ以テ該判決ヲ取消スヲ得サル場合ト自ラ異ル所アレハ原審カ所揭判示理由ニ因リテ第一審ニ於ケル未決勾留日數ヲ本刑ニ算入スヘシト判示セサリシ判決ヲ取消シタルハ相當ニシテ本論旨ハ理由ナシ

辯護人横山鑛太郎上告趣意書第一點刑法第百六十九條ハ「法律ニ依リ宣誓シタル證人虛僞ノ陳述

未決勾留日數算入ノ言渡ト前審判決ノ取消○僞證罪ノ構成ト宣誓ノ時期○刑事訴訟法第百九十八條ノ告知三五五

ヲ爲シタルトキハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス」ト規定シアリテ先ツ證人トシテ宣誓シ然ル後虛僞ノ陳述ヲ爲シタル場合ヲ律スル法意ナルコト右法文ノ文理解釋上疑ヒナキ所ナリトス本僞證被告事件ノ參考記錄トシテ添附セラレ原判決理由ニモ引用セラルル大阪地方裁判所明治四十三年(ワ)第六六七號原告奥田德次郎被告田村平兵衛等强制執行異議訴訟事件記錄簿中ニ在ル證人トシテノ上告人訊問調書ヲ見ルニ上告人ハ先ツ訊問ニ對シ供述シ然ル後宣誓ヲ爲シタルモノニシテ民事訴訟法僞三百六條第二項ヲ適用セラレタルモノトス然ラハ則チ先ツ宣誓シ而シテ後證言シタル事實ニアラサルヲ以テ假リニ其證言カ虛僞ナリトスルモ刑法第百六十九條ヲ適用セラルヘキニアラスト信ス原判決ハ擬律錯誤ノ失當アリト云フニ在レトモ○原判決ニハ「被告ハ(中略)同四十四年二月二十三日原告奥田德次郎被告田村平兵衛間ノ强制執行異議訴訟事件ニ付キ大阪地方裁判所第二民事部ニ出頭シ宣誓ノ上證人トシテ訊問ヲ受クルニ當リ(中略)虛僞ノ陳述ヲ爲シタルモノナリ」ト說示シアリテ所論ノ如ク虛僞ノ陳述ヲ爲シタル後ニ於テ宣誓シタル事實ヲ判定シアラサレハ本論旨ハ原判決ニ副ハサル論難ニ歸スルノミナラス縱令原判決ニ於テ所論ノ如ク事實ノ認定ヲ爲シタルモノトスルモ其擬律ハ違法ニアラス蓋シ刑法第百六十九條ノ僞證罪成立スルニハ證人カ適法ニ宣誓シタル後ニ於テ虛僞ノ陳述ヲ爲シタルコトヲ必要トセス證人カ(一)法律ニ從ヒ宣誓シタルコト及(二)故意ニ虛僞ノ陳述ヲ爲シタルコトノ二要素併存スルヲ以テ足ル宣誓カ陳述ノ前ニ在ルト其後ニ在ルトニ因リテ本罪ノ構成ニ影響ヲ及ホスコトナク證人カ民事訴訟法第三百六條第二項ニ依リ訊問終了後ニ於テ宣誓シタル場合ト雖モ苟モ證人トシテ故意ニ虛僞ノ陳述ヲ爲シタル以上ハ僞證罪ノ責ヲ辭スコトヲ得サレハナリ本論旨ハ理由ナシ

司法行政判例彙報第二十三卷刑事判例終

ヲ爲シタルトキハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス」ト規定シアリテ先ツ證人トシテ宣誓シ然ル後虛僞ノ陳述ヲ爲シタル場合ヲ律スル法意ナルコト右法文ノ文理解釋上疑ヒナキ所ナリトス本僞證被告事件ノ參考記錄トシテ添附セラレ原判決理由ニモ引用セラルル大阪地方裁判所明治四十三年(ヲ)第六六七號原告奥田德次郎被告田村平兵衛等强制執行異議訴訟事件記錄編中ニ在ル證人トシテ原告人訊問調書ヲ見ルニ上告人ハ先ツ訊問ニ對シ供述シ然ル後宣誓ヲ爲シタルモノニシテ民事訴訟法僞三百六條第二項ヲ適用セラレタルモノトス然ラハ則チ先ツ宣誓シ而シテ後證言シタル事實ニアラサルヲ以テ假リニ其證言カ虛僞ナリトスルモ刑法第百六十九條ヲ適用セラルヘキニアラスト信ス原判決ハ擬律錯誤ノ失當アリト云ンニ在レトモ○原判決ニハ「被告ハ(中略)同四十四年二月二十三日原告奥田德次郎被告田村平兵衛間ノ强制執行異議訴訟事件ニ付キ大阪地方裁判所第二民事部ニ出頭シ宣誓ノ上證人トシテ訊問ヲ受クルニ當リ(中略)虛僞ノ陳述ヲ爲シタルモノナリト說示シアリテ所論ノ如ク虛僞ノ陳述ヲ爲シタル後ニ於テ宣誓シタル事實ヲ判定シアラサレハ本論旨ハ原判決ニ副ハサル論難ニ歸スルノミナラス縱令原判決ニ於テ所論ノ如ク事實ノ認定ヲ爲シタルモノトスルモ其擬律ハ違法ニアラス蓋シ刑法第百六十九條ノ僞證罪成立スルニハ證人カ適法ニ宣誓シタル後ニ於テ虛僞ノ陳述ヲ爲シタルコトヲ必要トセス證人カ(一)法律ニ從ヒ宣誓シタルコト及(二)故意ニ虛僞ノ陳述ヲ爲シタルコトノ二要素併存スルヲ以テ足ル宣誓カ陳述ノ前ニ在ルト其後ニ在ルトニ因リテ本罪ノ構成ニ影響ヲ及ホスコトナク證人カ民事訴訟法第三百六條第二項ニ依リ訊問終了後ニ於テ宣誓シタル場合ト雖モ苟モ證人トシテ故意ニ虛僞ノ陳述ヲ爲シタル以上ハ僞證罪ノ責ヲ辭スコトヲ得サレハナリ本論旨ハ理由ナシ

司法行政判例彙報第二十三卷刑事判例終

行政裁判所判例

司法
行政

判例彙報第二十三卷

法學博士　江木衷編纂

行政裁判所判例

◉營業稅賦課取消請求ノ訴　明治四十二年第百七十八號　明治四十三年第二百八十八號　明治四十四年十月四日判決（棄却）

判決要旨

一、營業稅ノ賦課ニ付テハ直チニ行政訴訟ヲ提起シ得ルノ規定ナシ

一、上級行政廳ノ裁決ニ不服アリテ之レニ對シ行政訴訟ヲ提起センニハ裁決ヲナシタル上級廳ヲ對手トスルモ處分ヲナシタル下級廳ヲ對手トスルモ法律ニ違背スル所ナシ

行政訴訟ノ對手○營業開始者ノ營業稅

一、營業稅法第二十二條ニ所謂前ノ營業者トハ直近前者ヲ指スノミナラス開業前六ヶ月內ニ同一ノ場所ニ於テ同一ノ營業ヲナシタル凡テノ者ヲ總稱ス

二

說明

行政訴訟ノ對手」行政官府ノ處分ニ對シ直チニ行政訴訟ヲ提起スルトキハ處分ヲナシタル當該行政廳ヲ對手トナスコト勿論ナリト雖モ此ノ處分ニ服セサル者カ一旦上級行政廳ニ不服又ハ異議ノ申立ヲナシ之レニ因テ受ケタル上級廳ノ裁決ニ不服アリテ行政訴訟ヲ提起スル場合ニ於テハ裁決ヲナシタル上級廳ヲ對手トスヘキカ將タ處分ヲナシタル下級廳ヲ對手トスヘキカ此ノ問題ハ行政法學上ヨリ見ルトキハ頗ル論究ノ餘地アルニ似タリ然リト雖モ近時行政裁判所ノ判例トスル處ハ法律ニ於テ別ニ規定スル所ナキ故ヲ以テ上下何レノ行政廳ヲ對手トスルモ妨クル所ナシト云フニ在リ蓋シ此ノ場合ニ於テ何レヲ對手トスルモ行政訴訟ノ結果ニ付キ別ニ異ナル所ナキヲ以テナリ何トナレハ上級廳ヲ對手トシテ上級廳之レニ敗訴シタルトキハ判決ノ結果上級廳ハ下級廳ニ命令シテ其ノ處分ヲ取消サシムヘク又タ下級廳ヲ對手トシテ下級廳之レニ敗訴シタルトキハ判決ノ結果下級廳自ラ其ノ處分ヲ取消スヘク則チ一ハ下級廳ニ命シテ之レヲ取消シ

メ一ハ自ラ之レヲ取消ノ差ハアレ其ノ訴訟ノ目的タル不當處分ヲ取消スニ至テハ二者何レヲ對手トナスモ異ナルコトナシ又タ官府其ノ訴訟ニ勝訴シタル場合ニ於テモ兩者ノ間ニ結果ヲ異ニセサルハ敗訴ノ場合ト異ナル所ナシ之レ本判決カ從來ノ判例ヲ襲用スルニ努メ別ニ新例ヲ示サヽル所以也

營業開始者ノ營業稅」始メテ營業ヲ開始スル者ノ營業稅ハ開始ノ初年ヨリ納入スルニアラスシテ其ノ次年ヨリ納入スルヲ以テ一般ノ原則トシ而シテ法律ハ銀行業ノ如キ保險若クハ倉庫業ノ如キ開業後相當ノ年限ヲ經ルニアラサレハ營業ノ收益ヲ期シ難キモノニアリテハ種類ヲ限リ開業後三ケ年ノ後ニアラサレハ營業稅ヲ徵收セサルコトヽセリ約言セハ營業稅ハ營業開始ノ後短カキハ一年永キハ三年ノ免稅期間ヲ置キ之ヲ經過スルニアラサレハ徵收セサルヲ以テ一般ノ原則トナス然レトモ開業者カ前代ノ營業ヲ引繼クカ又ハ先代ノ廢業後六ケ月以內ニ同一ノ場所ニ同一ノ營業ヲ始ムルトキハ別ニ免稅期間ヲ置カス開業當時ヨリ營業稅ヲ納入スヘキヲ命令ス營業稅法第二十二條乃至第二十五條ハ則チ之ヲ規定スルモノニシテ一讀ノ下其ノ然ル所以ヲ知ルコトヲ得ヘシ而シテ本件ノ目的タル營業稅法第二十二條ノ所謂前ノ營業者トハ必スシモ直前ノ營業者ノミヲ指スニアラス現營業者ヨリ見テ六ヶ月以內ニ同一ノ場所ニ同一ノ營業ヲナシタル一切ノ場合ヲ包合スル者トス故ニ自己ノ營業カ倉庫業ニシテ直前ノ營業者カ倉

三

庫業者ニアラサリシトスルモ其ノ以前ニ倉庫業ヲ營ミタルモノアリテ廢業後六ケ月ヲ過キサル間ニ自己カ同一ノ場所ニ倉庫業ヲ營ムニ於テハ開業ノ時ヨリ營業税ヲ納入スルノ義務アルモノトス然レトモ六ケ月以內ノ開業者ヲシテ直チニ營業税ヲ負擔セシメンニハ前營業者カ開業後一ケ年營業税法第二十一條第一項又ハ三ケ年同法第二十二條第三項ノ法定免税期間ヲ經過シタル後廢業シタル者ナルコトヲ要ス何トナレハ前者ノ廢業後六ケ月以內ニ開業スル者ニ免税期間ヲ與ヘサル所以ノモノハ元來數年間同一ノ場所ニ同一ノ營業ヲ營ミタルトキハ世間ノ人其ノ營業ノ所在ヲ知ルコト深ク從テ後ニ開業スル者ハ前者ノ餘澤ヲ受テ顧客ヲ得ルコト甚タ容易ナレハ別ニ一定ノ免税期間ヲ置カサルモ開業ノ當時ヨリ相當ノ收益ヲ見得ラル、カ爲メナリ然ルニ前ノ營業者ニシテ開業後未タ免税期ヲ經過セサル以前ニ廢業シタル場合ニ在テハ其ノ廢業ノ原因如何ヲ不論法律上ヨリ見ルトキハ(一)前者ノ營業ハ未タ收支ノ計算確立セス從テ後ノ營業者ヲシテ營業ノ餘澤ヲ受ケシムル力ナク(二)若シ免税期間內ニ廢業スルモ爾後六ケ月以內ニ開業シタルノ故ヲ以テ免税ヲ不得トセハ法律ハ理由ナクシテ營業税法第二十一條二十二條ニ定ムル一ケ年又ハ三ケ年ノ免税期間ノ利益ヲ剝奪スル結果ヲ生シ法律ノ規定ヲシテ遂ニ徒法ニ歸セシムルニ至ルヘケレハナリ故ニ前代ノ營業者カ未タ納税期ニ入ラスシテ廢業シタルトキハ假令廢業後六ケ月以內ニ同一ノ事業ヲ開始スルモ其ノ開業者ハ營業税法第二十一條第二十二條ノ免税期間ヲ享有スルモノト云フヘシ

（參照）同一ノ場所ニ於テ六ケ月以内ニ前ノ營業者ト同一ノ營業ヲ開始スル者ハ其ノ月ヨリ營業税ヲ徵收ス（營業税法第二十二條）

原告　東京市深川區佐賀町一丁目
　帝國倉庫株式會社

右法定代理人　帝國倉庫株式會社取締役　前田青莎

訴訟代理人　岡崎正也　江橋活朗　菊地儉輔

被告　兩國橋税務署長　税務官　膳惣三郎

主文

明治四十年分及明治四十一年分營業税ニ關スル原告ノ訴ハ之ヲ棄却ス

前項ノ訴ニ關スル訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

明治四十二年分及明治四十三年分營業税ニ關スル原告ノ訴ニ對スル被告ノ妨訴抗辯相立タス

前項ノ訴ニ於ケル原告ハ其倉庫業ニ付キ營業税法第二十二條ノ適用ヲ受クヘキモノニアラストノ原告ノ主張ハ之ヲ採用セス

事實

原告陳述ノ要旨ハ原告カ明治四十年七月一日東京市深川區佐賀町一丁目四十番地ニ於テ開始シタ

ル倉庫業ニ付キ永代橋税務署長ハ明治四十二年三月二十三日附ヲ以テ原告ハ資本金額四十六萬一千五百一圓八十九錢建物賃貸價格一萬三百四圓九十八錢從業者十二人ノ標準ニテ明治四十二年分營業税ヲ納付スヘキモノナリトシテ課税標準ヲ算定シ其通知ヲ爲シタルニ因リ原告ハ東京税務監督局長ニ異議ノ申立ヲ爲シタルモ明治四十二年十月一日同局長ハ前通知ノ如ク營業税ヲ納付スヘキ義務アルモノト決定シタリ又被告ハ明治四十三年三月十九日附ヲ以テ原告ハ資本金額六十萬三千三百二十一圓九十六錢建物賃貸價格四千八十八圓三十九錢從業者十四人ノ標準ニテ明治四十三年分營業税ヲ納付スヘキモノナリトシテ課税標準ヲ算定シ其通知ヲ爲シタルニ因リ原告ハ東京税務監督局長ニ異議ノ申立ヲ爲シタルニ是亦明治四十三年十一月十四日同局長ハ前通知ノ如ク營業税ヲ納付スヘキ義務アルモノト決定シタリ明治四十年分及明治四十一年分ニ付キテハ永代橋税務署屬ノ强要ニ因リ明治四十二年三月二十二日原告ヨリ營業名課税標準屆ヲ差出シタルモノナリ而シテ原告ハ既ニ明治四十年分乃至明治四十三年分營業税ヲ徵收セラレタリ然レトモ（第一）原告カ明治四十年七月一日右倉庫業ヲ開始シタル以前ニ同一ノ場所ニ於テ何人モ倉庫業ヲ營ミタリシコトナシ臼井儀兵衞ハ同一ノ場所ニ於テ倉庫業ヲ營ム旨ノ屆出ヲ爲シ又株式會社東京米穀商品取引所トノ間ニ特約倉庫ニ關スル契約締結シタリシ事實アルモ右ハ臼井カ物品販賣業者トシテ有スル米穀ヲ定期取引米ニ提供スルニ方リ取引所ノ特約倉庫トシテ保管スルノ便宜アリタリト倉庫業ノ課税標準カ物品販賣業ノ課税標準ニ比シ著シク低廉ナリシトニ由ルモノニシテ其實倉庫業ヲ營ミタリシニアラス（第二）臼井儀兵衞ハ倉庫業者ナリシトスルモ明治三十九年十月頃ヨリ支拂停止

ノ狀態ニ在リテ倉庫業ニ關スル取引ヲ停止シ原告ノ開業ヨリ六箇月以前ニ廢業ヲ爲シタリ（第三）若シ臼井儀兵衞ノ廢業カ原告ノ開業前六箇月内ナリシトスルモ同人ハ其後原告ノ開業迄ノ間ニ同一場所ニ於テ物品販賣業及仲立業ヲ營ミタリシカ故ニ原告ノ直前ノ營業者ハ倉庫業者ニアラスシテ物品販賣業者兼仲立業者ナリ然ルニ營業税法第二十二條ニ所謂前ノ營業者トハ直前ノ營業者ヲ指スモノト解スヘク此點ヨリスルモ同條ハ其適用アルヘキニアラス之ヲ要スルニ原告ハ其倉庫業ニ付キ營業税法第二十二條ノ適用ヲ受クヘキモノニアラスシテ同法第二十一條ノ適用ヲ受クヘキモノナリ（第四）原告ノ以上ノ主張總テ其理由ナシトスルモ原告カ臼井儀兵衞ヨリ買取タルニアラサル建物ハ之ヲ課税標準中ニ算入スヘキモノニアラス（第五）課税標準ノ數額ハ過當ナリ右ノ次第ナルヲ以テ前示明治四十二年分及明治四十三年分課税標準算定竝ニ異議ノ申立ニ對スル決定ヲ取消ス既納賦課金明治四十年分七百六十七圓二十錢明治四十一年分一千五百三十四圓四十錢明治四十二年分二千八百五十二圓七十二錢及明治四十三年分三千二百五十六圓ヲ原告ニ還付スヘシ訴訟費用ハ被告ノ負擔トストノ判決ヲ求ムト云ニ在リ

被告答辨ノ要旨ハ原告ハ明治四十年分及明治四十一年分營業税ノ納税告知ヲ受ケタル後訴願ヲ提起スル等ノ手段ヲ採ラサリシモノナルヲ以テ此兩年分ニ關シテハ訴權ナシ明治四十二年分及明治四十三年分營業税ニ關スル原告ノ訴ハ東京税務監督局長ヲ被告ト爲スコトヲ要スルニ拘ハラス税務署長ヲ被告ト爲シタルヲ以テ不適法ナリ臼井儀兵衞ハ原告ト同一ノ場所ニ於テ明治四十年三月末迄倉庫業ヲ營ミタリシカ故ニ原告ニ對シ營業税法第二十二條ヲ適用スヘキモノナリ原告ノ開業

當時使用シタル建物ハ臼井儀兵衛カ倉庫業ニ使用シタル建物ノ一部ニ過キス課税標準ノ數額ハ過當ニアラス右ノ次第ナルヲ以テ原告敗訴ノ判決ヲ求ム原告ノ營業場所在地ハ永代橋税務署ノ管轄ニ屬セシモ官制改正ノ結果被告署ノ管轄ニ屬スルコトトナリタリト云フニ在リ

當裁判所ハ申請ニ因リ被告ノ妨訴抗辯及原告ノ營業税法第二十二條ノ適用ヲ受クヘキモノニアラストノ（第一）乃至（第三）ノ主張ノ當否ニ辯論ヲ制限シタリ

制限シタル辯論ノ範圍ニ於ケル立證トシテ原告ハ甲第一號證甲第二號證甲第四號證ノ一乃至三甲第六號證ノ一乃至三及甲第八號證ヲ提出シ證人若宮正音及長福幸吉ノ證言ヲ援用シ被告ハ乙第一號證乃至第三號證及乙第八號證ヲ提出シタリ各當事者ハ相手方ノ書證ノ成立ヲ爭ハス

理由

明治四十年分及明治四十一年分營業税ニ關シテハ營業税法第二十八條ノ一ノ決定アリタルニアラス又其賦課ニ關シ直ニ行政訴訟ヲ許ス旨ノ規定アルニモアラサルカ故ニ此兩年分ニ關スル原告ノ訴ハ不適法トシテ之ヲ棄却スヘキモノトス明治四十二年分及明治四十三年分營業税ニ關シ東京税務監督局長カ爲シタル營業税法第二十八條ノ一ノ決定ハ税務署長ノ算定處分ニ對スル異議ノ結果ニ外ナラサルカ故ニ此兩年分營業税ニ關スル本件行政訴訟ニ於テ算定處分者タル税務署長ヲ被告ト爲シタルハ不適法ナリト爲スニ由ナク此點ニ關スル被告ノ妨訴抗辯ハ之ヲ排斥スヘキモノトス

原告カ明治四十年七月一日ヨリ東京市深川區佐賀町四十番地ニ於テ倉庫業ヲ營ムコトハ爭ナシ然ルニ前ニ臼井儀兵衛カ同一場所ニ於テ倉庫業ヲ營ム旨ノ屈出ヲ爲シタリシ事實竝ニ同人カ倉庫ヲ

有シタリシ事實ハ爭ナク同人カ明治三十三年五月三十日株式會社東京米穀商品取引所トノ間ニ特別倉庫ニ關スル契約ヲ締結シ該契約ハ明治四十年八月二十二日解除セラシレタルコトハ甲第八號證及乙第八號證ニ據リ之ヲ認ムルニ足リ臼井支店長福幸吉名義ニテ明治四十年一月三十一日附ヲ以テ倉庫業ニ付明治四十年營業名課税標準屆ヲ同年三月十一日新大橋税務署ニ提出シタリシコトハ乙第一號證ニ據リ又臼井儀兵衛支店主任長福幸吉名義ニテ明治四十年四月一日ヨリ倉庫業ヲ廢スル旨ヲ同年五月十三日新大橋税務署ニ屆出タルコトハ乙第二號證ニ依リ之ヲ認ムルニ足ル然レハ臼井儀兵衛ハ原告ノ開業前ニ同一ノ場所ニ於テ倉庫業ヲ營ミタルモノニシテ其廢業ハ原告ノ開業前六箇月内ナリシト認メサルヘカラス證人若宮正音及長福幸吉ノ證言ト甲第四號證ノ一及甲第八號證トニ據ルモ臼井儀兵衛カ倉庫業ヲ營ムニ至リタルハ主トシテ自己ノ物品販賣業ニ便宜ナルニ因ルモノナルコト及倉庫業カ不振ナリシコトヲ認メ得ルニ止マリ倉庫業ヲ營ミタル事實ナカリシコトヲ認ムルニ足ラス甲第八號證ニ據リ認メ得ヘキ前掲特別倉庫契約ニ基ク取引所ヘノ預證券質入證券ノ提供ハ明治三十八年四月期ノ受渡カ最終ナリシ事實ト甲第四號證ノ二、三トニ據ルモ臼井儀兵衛ノ倉庫業カ不振ナリシコトヲ知ルコトヲ得ルニ止マリ同人カ原告ノ開業ニ先ツ六箇月以前ニ於テ廢業ヲ爲シタリシ事實ヲ認定スルニ足ラス甲第一號證甲第二號證及甲第六號證ノ一乃至三ハ臼井儀兵衛カ倉庫業ヲ營ミシヤ否ヤ營ミシトスレハ其廢業ノ時期如何ニ關スル事實ノ證據方法ニアラス之ヲ要スルニ原告ノ提出シ又ハ援用シタル證據方法ニ據ルモ臼井儀兵衛カ原告ノ開業前六箇月内ニ同一ノ場所ニ於テ倉庫業ヲ營ミタリシ事實ヲ否定スルコト能ハス次ニ營業税法第

二十二條ニ所謂前ノ營業者トハ直前ノ營業者ノミヲ指スニテラスシテ同條ハ開業前六箇月内ニ同一ノ場所ニ於テ同一ノ營業ヲ爲シタルモノアリタル一切ノ場合ニ之ヲ適用スル法意ナリト解釋スヘキカ故ニ此點ニ關スル原告ノ主張ハ其理由ナシ然レハ原告ハ其倉庫業ニ付營業稅法第二十二條ノ適用ヲ受クヘキモノニアラストノ原告ノ（第一）乃至（第三）ノ主張ハ執レモ之ヲ採用スルニ由ナキモノトス

◉縣稅戶數割賦課處分取消ノ訴

明治四十四年第七十六號
明治四十四年十月二十一日判決（請求不立）

判決要旨

一、課稅處分トハ徵稅傳令書ヲ納稅人ニ交附スルノ行爲ヲ云フ

町村長カ其ノ住民ニ交附シタル徵稅傳令書カ府縣知事又ハ其ノ委任ヲ受ケタル官吏吏員ノ發シタルモノナリシトスルモ現ニ之ヲ交附スル者カ町村長ナルトキハ課稅處分ハ町村長ニ依リテ行ハレタルモノト云フベシ從テ之レカ取消ヲ求ムル行政訴訟ハ其ノ町村長ヲ對手トスヘキモノトス

一、戶數割ハ一戶ヲ構ユル者ニアラサレハ之ヲ賦課スルコトヲ得ス宿料ヲ支拂ヒ旅人屋ニ止宿スル者ノ如キハ一戶ヲ構ユル者ト云ヲ得サレハ之レニ戶數割ヲ賦課スルコトヲ得ス

說明

戶數割ハ必ス一戶ヲ構ユルヤ一戶ヲ構ユルコトヲ要ス政訴訟ノ提起ヲ見ルハ自治當局者ニ戶數割賦課ノ觀念乏シキカ爲メナルカ抑モ戶數割ハ戶ヲ以テ課稅ノ基礎トナスカ故ニ之ヲ課セン亦タ他ニ因ル處アリテ然ルカ何レニスルモ喜ハンキ現象ニアラサルナリ

（一）竈ヲ構ユルコト

（二）門戶ヲ張ルコト

戶數割ハ戶數割ノ賦課」戶數割ハ戶ヲ以テ課稅ノ基礎トスルモノナレハ之ヲ賦課センニ者タルコトヲ要スル一戶ヲ構ユルトハ他人ニ依據セス獨立シテ自己ノ住居ヲ標示スルノ課ナリ仍チ左ノ二要件ヲ具備スルヲ要ス

（三）竈ヲ構スルトハ他人ノ竈ニ依リ生活スルニアラス炊事一切ヲ自己ノ計算ニ於テナスノ謂ナリ門戶ヲ張ルトハ他人ノ家ニ間借リセス獨立シテ一家ヲ構ユルノ謂ナリ然レトモ必スシモ一軒ノ家ヲ獨占スルヲ要セス數人共同シテ一家ニ共棲ス